# 豢竜伝

neoblack

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
豢竜伝

【Ｎコード】
Ｎ５６２５Ｑ

【作者名】
ｎｅｏｂｌａｃｋ

【あらすじ】
父親から『七流』なる武術を習っていた石竜可解斗は、その技を活かせない不毛な日々を送っていた。
そんな彼の前に突然、父から習った『七竜』を揮うべき相手が現れる。

## 邂逅龍：一

レガースとファウルカップ、それにヘッドギアまで付け、完全防備の男が二人、神妙な顔で向かい合っている。オープンフィンガーグローブであるところを見ると、総合格闘技のようである。

赤いグローブの男は身を低くし、小刻みに体を揺すっている。もう一方の青いグローブをした男は対照的に、ゆったりとした構えで、左手は腰の辺りまで下げ、右の掌は顎の辺りに置いてある。僅かに前に出した左足も、後ろにある右足も、踵までべったりと床に付け、どっしりと構えている。

しかし前に出ているのは、意外にもどっしりと構えている青グローブの男だった。すり足でじりじりと寄られるたび、体格の良い男はやりにくそうに後ろへ下がって間合いを取る。

赤グローブの男は、僅かに体を起して左のジャブを放つ。ボクシングの経験もあるのか、それはリズミカルに、それでいて鋭く二発、三発と続いていく。

男の手首が、柔らかな力で軽く逸らされる。

青グローブの男の左手が、ジャブの一切を遮断する。やんわりと赤子を撫ぜるような動きで、拳を掬い上げる。

叩いたり弾いたりする防御ではない。むしろ自分の方へと引き込んでいる。しかしその際、巧妙を以ってその方向を体の外へと逃がしていく。

ジャブでは埒が開かないと思ってか、赤グローブの右拳が僅かに引かれる。

右ストレートを警戒した青グローブの男が前進を止める。

右腕が勢い良く伸びる。ただし、その体も一緒に。

右ストレートのフェイントから、前足へのタックル。流れるようなスムーズさで、ごつい体が低空から侵入する。

奥の右膝での蹴りを食らわないよう、左手は前に出して太ももの近くに置いてある。このまま腰に手を巻きつけて押し倒し、寝技に持ち込む算段だろう。

青グローブの男は、タックルしてくる男の肩を左手で押さえ、近づくのを嫌がるが、そんな抵抗で止まるような勢いではない。彼は左手で相手を抑えながら、右手を思い切り振りかぶった。

手刀の部分が、斜め上から振り抜かれる。背面まで腕を伸展させたため、瓦割りの要領で首を切り落とさんばかりの勢いがある。

だが、今正に組み敷かれようとするなかでは、甚だ過剰な振り打ちと言わざるを得なかった。

案の定、手刀は赤グローブの男の丈夫な背面を強かに打ち、代わりに青グローブの男は左足をしっかと抱えられた。

即座に赤グローブが左の足首を脇に抱えてぐるりと巻きつき、青グローブの男の足の付け根は、両足でがっしりと銜え込んで離さない。

そして軽く息を吸うと、赤グローブの男の背が弓形に反り出した。アキレス腱固め。広く強靭な背筋の力が、足首一つに向けられている。両の腕と脇、そして胸筋が脛にかじりつき、寸分ずらすことも適わない。

畢竟、左の足首もまた、弓形をなぞってゆく。

「あがあッ！」

妙な呻き声を上げて、青グローブがマットを数回強く叩いた。それが響かせたのは終了の合図。そして、自身の敗北。

「ありがとうございましたッ」

赤グローブの男が即座に足首を開放し、快活な声で礼を言った。

「……ありがとう、ございました」

青グローブの男は堅く、沈んだ声音で応じた。負けたのがよほどに気に入らないのだろう。

それとも相手選手が気に入らないのか、はたまた自分自身に不満があるのか、眉根を潜ませたままいそいそとレガースとグローブを

片付け、鏡の前に立ってシャドーを始めてしまった。

「……失礼します」

蚊の泣くような細い声に誰も気付くことなく、青年――石竜可解（いしたつか げと）斗はジムを後にした。今日は珍しくスパーリングに誘われたのだが、自分の思うような結果は残せなかった。

もうこの総合格闘技のジムに通い始めて、そろそろ一年が経とうとしているが、未だに友人の一人も出来ず、場の空気にも馴染めずにいる。

どうもあの雰囲気は、好くことが出来ない。とはいえ、他のどのような格闘技のジムに訪れたとて、可解斗の抱く疎外感は拭われないだろう。それは本人自身が、痛いほど理解している。

元より競技としての自由度の高さから、消去法で総合格闘技を習おうと思ったのだ。自分が父から教えてもらった武術『七流（しちりゅう）』に一番近いのは、今のところ総合格闘技だけだったためだ。

これでも、可解斗は致し方なかったと思っている。父が二年前に死んでから、『七流』の練習は型稽古くらいしか行なっていない。しかしそれでは、いつか技が錆びてしまう。

ならば敵に対して行使するしか、自分の中の『七流』を生かす術は無い。

だがそれも、如何せん消去法である。完全な一致など望むべくもない。

そもそも、人間を相手に戦っていること自体に、どうしようもない違和感がある。本来『七流』は、人間と戦うことを想定していない。

故に、可解斗の技は人には通じない。人対人を徹底的に研究に、あらゆる格闘技から最新の技術を惜しみなく取り入れる総合格闘技

を相手取るには、『七流』は適切なアプローチではない。
而して、ならば『七流』が本来想定する敵を相手取るべきなのだが、それは決して叶うはずもないと、可解斗には理解していた。
何故なら可解斗は勿論、父親でさえその敵とやらに『七流』を発揮したことなど、可解斗は見たことがなかった。

盛られぬ器は、器にあらず。飾り立てて置いておくなぞ、とてもではないが許し難く――。
ならばと無理を押して人相手に『七流』を揮い、相性の悪さを埋められず窘められるを繰り返す。
敗北は特段に不快ではない。むしろ己の弱体を鑑み、さらなる工夫を重ねる上で重要な事柄である。
不快なのは、耐え難いのは、その噛み合わなさ加減。自分の身につけた技術がまるで通用せず、何の手応えも得られない現実。『七流』を存分に顕し、真っ向から合して負けてれば納得もいく。
だが、何も無い。何も得られずにただ敗北のみが残されて、耐えられるはずもない。
無論、『七流』を人に通じるようにする工夫も考えはした。しかし自分の父親の考えた『七流』は、実に整然と組み上げられた技術体系であり、その全てを知っているわけではない可解斗如きが崩し変えることは困難だった。

堂々巡りの思考に嫌気が差し、可解斗は立ち止まって額に手を置く。それで頭が冷えるわけもなく、単なる振りでしかない。
振りだ、全ては。わざわざ総合格闘技のジムに通って、通じもしない『七流』の技を揮って負けを重ねるのも、父の遺言を守る振りでしかない。
『七流』を身につけろ。そう言い残し、父は息を引き取ったのを可解斗は覚えている。
言われなくとも、『七流』の技を一生掛けて身につける覚悟は出

来ている。というより、『七流』を抜いた自分など、今更考えることは出来ない。
可解斗は特に学があるでもなく、夢らしい夢も描いてはいない。そのため『七流』に関わること以外には、とんと興味というものが湧かない。それを自覚しておいてなお、改善しようという意欲さえ持たない。
現代っ子特有の意欲の無さを持ち合わせる可解斗は、何事につけて色褪せて感じてしまい、ジムでの振る舞いを見れば一事が万事。例外なく学校でも、冴えない生活を送っていた。
そんな日常の中、せめて『七流』に対しては真摯に向き合おうとするとこが、可解斗のささやかな生きがいだった。

道辻に人影が無いことを確認し、可解斗は緩やかな所作で手を靡かせ、左足で小さく円を描き、ゆっくりと呼吸を整える。
『七流』一の流れ、『龍』。父から教えられた限りでは、独特の呼吸法と姿勢を行なうことで、周囲の気を己が内に取り入れる、らしい。
可解斗自身、これら『七流』の技には不可解なものを感じていた。いわゆる天地合一とでも言うのだろうが、そのあまりの壮大さにピンと来ず、父から習っているときから、この通りで良いのか自身の持てない流れであった。
それでも、『七流』の技を揮っているときが一番落ち着くし、一番楽しい。気が平らかに治まり、心が雀躍する。ジムにいるときより、学校にいるときより、家にいるときより、型だけでも『七流』をなぞっているときが、可解斗にとっては至福であった。
それだけが確かな、『七流』の手応えだった。しかし、それを活かす場所はどこにもない。
形だけが、残されていく。まるで剥製だ。死んだ父親の形見を、後生大事に抱え込むしかない。
活かせないのか。このまま自分の中だけで、消えていくのか。そ

して自分も活かせないまま、生きていくしかないのか。
型稽古を止め、可解斗は視線を足元に向けたまま歩み始めた。

## 邂逅龍：二

「あのう、すみません」
突然後ろから声を掛けられ、可解斗は目を剥いて振り返った。別段、他人から声を掛けられることが怖かったわけではない。苦手ではあるが。
先ほどまでこの道には、可解斗一人しかいなかった。幾ら型稽古をしていたとはいえ――否、していたからこそ、周囲への警戒は怠っていない。あんな演武を道端で人に見られるなど、とてもではないが可解斗の神経は耐えられない。
可解斗の細いからこそ細やかな警戒の網を潜って、この男は突如として現れたことになる。
（何だ、この人……）
単に声を掛けられただけなのだが、可解斗はこの男を早くも嫌いになっていた。
「石竜可解斗さまで、お間違いありませんか？」
しかもフルネームで呼ばれた日には、反射的に顔を顰めてしまっても無理はない。
「そうですけど、何か御用ですか？」
慇懃な物言いと硬質な低音で、相手を突き放しに掛かる。

「私、こういうものです」
可解斗の応対とは好対照に、男の内の一人はにんまりと口の端を吊り上げながら名刺を取り出した。
改めて聞くと、イントネーションに違和感を覚える。日本人ではないのだろうか。
「……探偵。ジャン、シンターさん……ですか？」
名刺の受け取り方が分からず、とりあえず丁寧になるように両手で掴む。見れば“探偵　樟信達（ジャン・シンター）”と書いてある。

可解斗は父親の影響で、中国語を嗜んでいる。さすがに流暢過ぎる発音では耳が追いつかないが、読み書きならばそれなりである。
「あなたの祖父様が是非にお会いしたいということで、やってまいりました」
「祖父う？」
疑念も露に語尾を上げて、男の顔を見上げる。そして多少苛立ちを含ませて、自身の家庭事情を打ち明けた。
「母方の祖父母は、僕の生まれる前に亡くなったそうです。父は天涯孤独の身だと聞いています。もう僕に祖父は居ませんよ」
何故にこんな道すがらで、こんな見知らぬ中国人らしき男たちに向かって、自分の家庭の事情を話さねばならないのか。その脈絡の無さに、可解斗は憮然とした態度を取らざるを得なかった。
「あなたのお父様、劉征竜（リュウ・ゼンロン）様は、天涯孤独の身などではございません。確かに絶縁はしていましたが……」
一瞬、聞きなれない発音に可解斗は首を傾けたが、間を置いて思い至った。

可解斗の父親は中国人だったが、日本に着てからは、征竜（ゼンロン）を征竜（まさたつ）という風に、日本の読みにして名乗っていた。可解斗も父の名は征竜（まさたつ）として覚えており、ゼンロンという読みを覚えたのは最近のことだ。
しかし父親の姓が劉（リュウ）というのは初耳だったので、思い至るまで時間を要してしまった。
「縁を切っていたのなら、天涯孤独で合ってるでしょう。今更そんなことを言われても困ります」
目を若干逸らしながら、可解斗はそそくさと男に背を向けた。現れ方と言い、話の内容と言い、胡散臭さが匂ってくる。願わくばもう会わぬことを祈りつつ、逃げるような早足でその場を辞する。
可解斗の足が、数歩と行かずに立ち止まった。無論この場から誰よりも立ち去りたがっていた可解斗が、意識して行なったことでは

ない。
単に自分より大きな人間が、目の前に立ちはだかっただけのことである。
「……何、ですか？」
せめてそんなことを、震えた口で搾り出すくらいが、可解斗の胆力の限界だった

それは、話しかけてきた探偵の片割れだった。柔和な笑みで話しかけてきたもう一方と違い、こちらは可解斗に劣らぬ仏頂面である。
「おい唐信（トウシン）、やめないか」
信達がそう言っても、唐信と呼ばれた男は身じろぎ一つせず、可解斗を見下ろしている。
可解斗も日々『七流』の鍛錬を怠らずにいるため、体つきだけは目を見張るものがある。しかしそれとて、未だ伸び代を残すもの。目の前に立つ男の体躯は既に伸び切り、厚く締まった肉の鎧を纏っている。
最近の探偵は荒事もこなすのかと揶揄しようかとも思ったが、男が放ってくるゴツい気配を受けて可解斗は口を噤んだ。
「ガキの使いじゃないんだ。こんな日本人（リーベンレン）、とっとと攫っちまえばいいだろうが」
ご丁寧に日本人のところを中国読みにして、男は吐き捨てた。
ぬうっと伸ばされる大きな手を、思わず可解斗は腕刀で弾き上げた。防ぎ様、飛ぶように後ろへ下がり、信達を追い越す。

幾ら人間相手では要領が悪いとは言え、この程度の体捌きは問題なく行なえる。しかしこれ以上立ち合えばボロが出る。それに相手は大人二人。勝算など立つはずが無い。
可解斗は着地した瞬間、一も二もなく踵を返し、全速力でその場から離脱した。
こうなっては逃げるより他無し。元よりこちらのほうが失礼を働

かれたのだ。誰に責められる謂れも無い。
それでも、この背を刺す悪寒は何なのか。まるで自分こそ見当外れの間違いを犯しているような感覚だけが、撤退する背中に張り付いてくる。
ならば立ち向かえと言うのか？　同年代の格闘競技者にすら勝てない男が、大の大人二人を相手に立ち回れというのか。
論外だ。そんなことをせずとも、このまま逃げて、街中で撒いて、家に帰って布団に潜って何もかも忘れて寝てしまえばいい。
逃げたいのだから、逃げればいい。誰に謗られることも無いはずだ。

何もかも振り払って逃げ去るはずだった可解斗に、後ろから突き上げられるような轟音が響いた。
思わず振り向いたが、そこには離れて追走する二人の探偵しか居ない。
しかしその声は、彼らが発したものとは思えない。というよりは人間が発することの出来る、如何なる音響とも似かよらないものと感じられた。
（何だ、今のは……）
首を巡らせて辺りを窺った可解斗が、今度は自分の意思で立ち止まる。
背に張り付いていた不安。異奇な音声。それらの正体が、眼前に躍り出てくれた。
ひたすらに、波が退く音がする。可解斗は、自分の頭が漂白されていく音を聞いた。

その身体は蛇のように長く、纏う鱗は魚のそれより厚く鋭い。小さく退化した四足には、嘴に似た湾曲を持つ鉤爪を生やし、その手の平は猫科の獣に良く似ている。内の腹は淡白く、貝の中身を思わせる。

それらが戴く頭部には、鹿に負けぬ立派な角。牛のように小さな耳。面長な顔はどこか駱駝を思わせるが、そこに置かれた両の眼は地獄を見張る鬼のそれに近く、ぎらりと滾る色を表す。

何だ？　目の前にあるのは、一体何なんだ？　何故こんなものが、目の前にいるのか？

それは、かつて九種の獣に酷似していることから、九似とも呼ばれていたと言う。

「りゅ、龍……」

かろうじてそれだけ、可解斗は言葉を搾り出した。

龍だ。紛れも無い龍だ。伝説の中を生きる獣だ。十二支のうちで唯一の架空動物だ。父親が言っていた、倒すべき敵だ。七流を行使してもいい、唯一の例外だ。

例えばそれは龍気とでも言えばいいのか。何かが龍の体から発散されているように思える。それが一呼吸ごとに自分の体に入り込んできて、どうしようもなく震えを昇らせてくる。

思わず息が荒くなってしまう。腹の奥から形容し難い何かが、沸々と湧き上がってしまう。

最初に味わった頭の空白の中に、今は恐ろしい感情が収まって溢れてしまいそうだ。

考える余地など残っていない可解斗は、右手を喉の前に添え、左手を臍の高さにおいて前に出し、緩やかに自然体を取る。

手足が震え、歯を鳴らしながらも、可解斗は竜を前にして、いつもの通りに構えてみせた。

それ以外の行動が、彼には出来なかった。他に何も思いつかず、するりと無意識に浮き上がってきたのが、この構えだった。

しかし恐れも震えも無くなったわけではない。それは毅然として可解斗の中に存在する。構えたところで何をするかなども、まるで思いつかないでいる。

ただ龍の前に身を晒し、萎みそうな目で見上げるのみである。
「がああああ！」
唸りを上げて、龍の口がこちらに向かう。ずらりと並んだ牙の列が、ぐわりと開いている。
瞬間、可解斗の中で何かが弾けた。
それに伴い、彼の体もまた弾けるように飛び出した。自分を喰らおうとしている、龍の口に目掛けて。
地を蹴った右足を、左足を畳むことでさらに引き上げる。跳ねた体が、ぐうっと上へ伸び上がってゆく。
口の直下、龍の喉の辺りに可解斗のつま先が叩き込まれた。
七流、五の流れ『火』。竜環腿。下から突き上げる高い二連の蹴り技である。
深く突き刺さったつま先に押され、龍の頭がバネ仕掛けのように跳ね上がった。
「おおおああッ」
むき出しになった貝の中身のような白い腹へ、可解斗は拳足を殺到させる。龍に負けぬほど歯を剥き、一気呵成に攻め立てる。
それまで消極的な行いが嘘のように、体力の配分も考えず、龍の喉元に食らい付いて離れない。
龍の角を握り締め、ぶら下がったまま拳や肘で突き上げ、あるいは膝蹴りを繰り返す。
そのまま龍に体重を預け、仰け反っていく頭を両手でがっしりと固定したまま、脳天から地面に叩きつけた。
空かさず首を跨いで挟み込み、可解斗は渾身の下段突きを打ち下ろすために深く引いた。

その腕が、繰り出す中途でぴたりと止まる。
魚燐をあしらった尾が、輪を描いて二の腕の辺りに巻きついていた。龍の力に、人間が抗えるはずも無く、すぐに腕の筋が狭まり、拳に固めていた手が徐々に解けていった。

「ぬぐう……」
それでもなお、可解斗はじりと前に体を迫り出す。噛み締める音が聞こえてくるほどにいきり、残った左腕を振り上げる。
「だらあッ！」
肉厚な鉄槌部分を、またも喉にぶち当てる。握り拳の中ほどまで深く沈み、硬い筋がじわりと緩む感触を覚えた。
そこまでが、可解斗の攻勢であった。
巻きついていた尾に引かれ、ごくりと腕が鳴ったと思いきや、龍の頭が遠ざかってゆく。それが投げ飛ばされているのだと知ったときには、背面に衝撃が走った。
コンクリートの壁に勢い良く体を打ち付け、可解斗は虚ろな視線を中空に投げたまま、どっさりと倒れ伏せた。

引っこ抜かれた右腕が不自然に拉げているが、彼は最早そのような痛みなど気にならない世界へと旅立ってしまっている。
龍もまたそれが精一杯だったのか、生まれたての小鹿のように震えながら首を立てている。
それでも自分を攻め立てた人間のことが分かるのか、ずらりと歯を並べて今にも噛み付きそうな形相である。
「やめろ、応龍」
唐信の下知を受け、応龍の動きが大人しく静まる。そのまま管を巻いて縮まり、彼の取り出した符の中へと吸い込まれていった。
目に見えて失神の体を見せる可解斗を、信達が何やら弄る。一通り脈などを計って命に別状がないことを見て取ると、辺りを窺い、その体を背に担ぎ上げた。
二人は軽やかな足取りで塀に登り、屋根を伝い、人目を避けるようにしてその場を離れていった。
「まさか、こんなことなろうとは……」
可解斗を背負う信達が苦々しく呟くと、唐信がこれ見よがしに鼻を鳴らす。

「日本人風情が、龍に勝てるはずなかろうに。道理を弁えぬガキが」
「ならお前、龍に向かえるか？　その身一つで」
何をか況やという風に、唐信が素っ頓狂な声を上げ、
「俺らは豢竜氏（けんりょうし）だぞ。龍を司るのが仕事だろうが」
と、信達に言い聞かせる。

「つまり、向かうのは下の下ということか」
どこか棘のある言い方に、元から顰めていた顔をさらに歪めて、唐信が睨みつける。
「捕まえられたのだから、それでいいだろう。ぐだぐだと言うなよ」
そう言われれば、信達に返す言葉は無い。別段、彼とて文句が言いたかったわけではない。ただ、腑に落ちないのである。
パニックを起こしたとしか思えない可解斗の行動だったが、その実、狙いはしっかりと急所に向けられていた。
喉の辺りの、顎の下に一枚だけ逆さに立っている鱗こそ、龍にとっての最大の急所である。
慣用句でよく使われる、あの『逆鱗』こそがそれである。龍はこの『逆鱗』を刺激されると、とてつもない激痛が襲うのだという。
『逆鱗』に触れられて怒るのは、その痛みのためである。
急所を狙うのは戦闘の常。龍が相手だとて、それは変わらない。変わらないが――。
自分の背にぐったりと体を預ける青年を見、信達は感慨も深そうに息をついた。
「さすがは、当代随一の豢竜氏、その息子ということか」
「そんな言い方、やめろ。あてつけがましい」
唐信は憤りも顕に、信達を叱り付ける。自身も迂闊な発言であることに思い至ったのか、信達は小さく頭を下げてすぐに謝罪した。
空は夜半に近づき、刻々とその色を落としてゆく。広がる影の中に身を潜め、二人はその姿を消した。

## 遯逅龍：三

意識がゆっくりと浮上してくるのに合わせて、可解斗の瞼が開いてゆく。いきなり目に飛び込んできたのは、向かいの壁を這い回る黒い龍の姿だった。

その荒々しさにおののき、半ば飛び上がるようにして、可解斗の目は無理矢理に覚醒させられた。そうしてようやく辺りを見渡せば、そこには彼の見慣れないものばかりが並べられていた。

迫力に驚かされた龍の姿は、何のことはない。壁に吊された掛け軸である。他にも澄んだ赤茶の箪笥には、金の龍が螺伝細工によって浮かび上がっている。さらに黒壇を掘り抜いたと思われる龍の像などが、その上に置かれていた。

龕灯にくべられた鯨油のかそけき明かりが、目に優しく室内を灯す。連子窓から見える暗さは、既に夜のそれである。

見慣れないとしても、そこには古雅を感じて余りある雰囲気が存在していた。

例えば古代の中国などでは、このような設えを好んだのではと夢想させてくれる。特に、執拗なまでに置かれる龍を表した芸術品が、それをなお確かなものにしている。

古代に限らず、中国において龍は、格別の待遇を受ける動物である。何故なら龍は、ときに皇帝と同義となるからである。そして歴代皇帝も、龍を好む気性を持った方々が少なくない。

特に龍を好んだと思われるのは、高祖帝――劉邦だろう。かの皇帝は、出生からして龍にまつわるエピソードを持つ。

曰く、彼の母親はある日、川の辺で水龍に遭遇し、その身に龍の精を受けるに至る。そうして生まれたのが、劉邦だという。そして自らを龍の子であると称し、同じく龍を掲げていた始皇帝の再来だと嘯いた。

なるほど龍は中国の文化に深く根ざしているが、この部屋のように徹底して崇められると、十分に異様である。
部屋の主が高祖帝に負けず劣らず、龍に傾倒しているのは見て取れるが、果たしてここはどこなのだろうか？　起き抜けの頭がとうとうその疑問に思い至ると、芋蔓式にこれまでの記憶が蘇ってきた。

突如現れた、祖父の使いを名乗る中国人。彼らが呼び出したと思われる幻の獣、龍。その龍を目の当たりにして、可解斗は――。
「くう」
龍に外された右肩が痛みだし、手を当ててうずくまる。その攻撃を最後に、可解斗の意識はこれまで寸断されていた。そして気がついた今、どことも知れない部屋で寝かされている。
外れたと思っていた右肩は、きちんと元に填め戻されていた。誰が治してくれたのだろうかと考えれば、思いつくのはあの探偵を名乗った二人しかいない。
これは誘拐、と言って良いのだろうか。しかしあの探偵らしき二人組の言葉を信じるなら、これは可解斗を祖父に会わせる一環ということになるのだろうか。
あの場で話もろくにせず逃げ出した自分も自分だが、気絶している間に連れてきてしまう相手も相手である。よほどの事情があると見て間違いないだろう。ならばその熱意に免じて、祖父というのに一目は会ってもいいかもしれないと、ややもすれば自己の主張のあまり強くない可解斗は思い直していた。
この際、連れてこられてしまったものは仕方がない。なるべく厄介ごとを起こさないよう振る舞って、家に帰してもらおう。

そこで可解斗は、はたと思いとどまってしまった。果たして自分は、家に帰るべきなのだろうか。
本当に、帰りたいのだろうか。友もなく、父もなく、何ら充溢したものを得られなかった、あの日常へと戻るべきなのだろうか。

無論、ここでそれらが手に入る保証はない。だが、もしかすれば、万に一つでも、そのようなことが起きるかもしれない。今度こそ得られるのではないか。

そのように可解斗は、不埒な期待を胸の中で膨らませつつあった。これまでの自分の日常からはまるで考えの及びもしない世界に、無理矢理ながら連れてきてもらったように感じる。それを危機と取るか、機会と取るかは、己の考え方一つで違ってくるのではないか。

しかしそれも、長くは続かない。敗北の味とでも言うべき鈍痛が、期待を霧散させる。

「全く、役に立たないじゃないか……」

気の抜ける笑いとともに息を吐くと、いよいよ諦観のようなものが沸き上がってくる。

父から教わった、龍と戦うための武術――七流。それが文字通り、龍に対して歯が立たなかった。露骨にこれまでの行いを否定された気分が、今度は腹の底から立ち上る。

その一方で、いや違う、父は間違っていない。未熟な己の修行の程が露呈されたのだと、自責する声もまた起こる。確かにあの場で可解斗は、ろくに落ち着けないまま七流を放っていた。呼吸と姿勢を整える一の流れ、『龍』の存在など忘れて、ただがむしゃらに龍へと歯向かった。

どちらを信じるべきか、可解斗はすぐに決断できるような性情を有していなかった。どちらにも傾けず、半ば信じながらも絶望し、心の平衡を自分で揺らす。

そんな思案の最中、からりと音を立てて部屋の引き戸が開け放たれる。やおら部屋の中へと立ち入ってきたのは、胡服を身につけた一人の令嬢であった。

令嬢は可解斗のほうを見て、あっと驚いてからその近くに寄ってきた。

「目が覚めましたか？」

その呼びかけは、明らかな中国語の発音であった。父が中国人であり、自身も中国語の勉強をしていた可解斗は、かろうじて言葉の意味を理解することができた。
「ここは、どこなんですか？」
若干たどたどしい発音だったものの、令嬢には通じたようで、
「ここは昆山でございますよ」
と、間を置かずに答えてくれた。
これまでの経緯から容易に想像がついていたこととはいえ、いざ目の前に提示されると、可解斗はその心に動揺を隠せなかった。
昆山は中国にある山で、陽澄湖という湖が近くにある。
やっと自分の居所は知れたが、まだ安心するには早計である。極論すればこの目麗しい令嬢さえ、自分の敵か味方か定かではない。この人もあの探偵連中のように、龍を呼び出して襲ってくるかも知れないのだ。

いかに美貌であろうとも、いやむしろ美貌を有するからこそ、可解斗は心の警戒を高めてしまう。
「石竜、可解斗さん、でしたね」
「……は、はい。そうですが……」
突如見知らぬ人に名を呼ばれ、可解斗は緊張も露わにどもりながら返事した。
「私は劉深麗『リュウ・センリ』と申します。あなたのお父様の兄、その娘に当たります」
楚々と礼して、深麗は傍らの椅子に腰掛けた。
「じゃあ、あなたは、僕の従姉妹？」
「はい。あなたの家族です」
異様にきっぱりとした言い様に、可解斗は怯んですこし身を逸らした。
聞き返す可解斗に、深麗は柔和な笑みで答える。そして何気ない動作で彼の手に手を重ねると、きゅうと包み込むように握りしめた。

「ようやく、ようやく会えましたね。可解斗さん」
やんわりと手を握りながら、深麗はじっと可解斗の目をのぞき込んでいる。日本人と同じ、黒々とした瞳孔が、ぐうっとこちらに近づいてくるような気さえする。

常の可解斗ならば、これほどまっすぐに見つめられては十秒と保たない。それが女性であるならば、なおのことである。
それがどうして今回ばかりは、目を逸らし、顔を背けることができない。自分の従姉妹であるという言が気に掛かるのか、はたまた深麗の麗しさに文字通り目を奪われたのか。いずれにしろ二人が見つめあうこと、優に一分は経過していた。
「良い眼を持っています。正に、龍眼」
ほうと漏らすように深麗が言い、今度は可解斗の右手を両の掌で包み、皺の一本一本を労るようになぞってゆく。そのくすぐったさが、深麗の手を通して伝わると、どうしてか心地よい。
その心地よさが気恥ずかしさに変わった頃、深麗が皺をなぞる動作を止めた。
「手相も良い。きっと、良い豢竜氏（けんりょうし）になられることでしょう」
万感込めた重みで深麗はそのように伝えると、可解斗の手を静かに布団の上に戻した。
「まずは、ぶしつけを詫びなければ。急にこのような仕儀と相成って、混乱されていることでしょう。私で良ければ、何でも聞いてください」
そう言われても、果たして何から聞いたものか。可解斗はすぐにこれと思い浮かべることが出来ない。ううとか、ああだの一頻り唸った後、何故自分をここへ連れてきたのかと尋ねた。
深麗は一拍置いて、可解斗が落ち着くのを待ってから滔々と語り伝えてくれた。
彼女が言うに、ここは豢竜氏という職業の人が住む地域である。

そこを取り仕切るのが、深麗の祖父である劉天袁（リュウ・テンユェン）。つまりは可解斗の祖父であり、父征竜（ゼイロン）の父親である。
最近になり、縁を切っていた父に自分という子供がいたということが判明し、天袁は可解斗を連れてくるようにとの触れを出した。自身の後継者を選定するためだ。
孫の中から後継者を選ぶに当たり、公平を期すために可解斗はこうして無理矢理にでも連れてこられたらしい。

突然に親類が増え、しかも豢竜氏だの後継者だのと言われた日には、可解斗の困惑は同情するに余りある。
余計に何を聞けばいいのか分からなくなった彼に、深麗が助け船を出す。
「豢竜氏というのは、方士や祈祷師のように、巫呪を生業とする者のことです」
「あ、いや、それは、知っています……」
はばかるように小さく、可解斗は深麗の説明に口を挟んだ。
まさか可解斗がその豢竜氏であるわけではなく、彼の数少ない趣味の範疇に、豢竜氏という言葉がたまたま入っていただけに過ぎない。
「古代の中国で、龍を扱う呪術師だったと聞いたことがあります」
「まあ、よくご存じで。やはりお父様から教えられたのですか？」
「いえ。自分で調べました。父からそのようなことは、全く聞きませんでした」
そう言うと、深麗が悲しそうに瞼を下げる。
「征竜様は、劉家から勘当されてしまったそうです。だから、恨んでいたのでしょうかね」
「それは、分かりかねます。父は天涯孤独だったと聞いていたので、家族の話は何も……」
それでも、征竜が何故話さなかったのかを推し量れば、自ずと分かってもくるだろう。

父が住んでいた、父が離れた場所。二度と口にせず、誰にも伝えなかった場所。そこに今、自分は来ている。かつて父が暮らしたこの場所には、自分の知らない父の姿があるようだ。
「まずは寨主（さいしゅ）に挨拶をしに行きましょう」
「寨主、ですか？」
「あなたのお爺さまですよ」
元を辿れば、それこそ可解斗の連れてこられた理由である。何を置いてもまず祖父に会わねば、事の進展は望めないだろう。
「是非、会わせていただけますか？」
「それはもう。お爺さまも会いたがっておりますから」
深麗に連れられて、可解斗は部屋を出た。

## 邂逅龍：四

母方の祖父母は生まれる前に亡くなっていたため、写真でしか見たことがない。父は天涯孤独と思っていたため、元より親類縁者に会ったことがない。

つまり今こそ、可解斗が自分の祖父に会う初めての機会なのだ。

果たしてどのように振る舞えばいいのだろうか。この古雅を漂わせる大屋敷の主ならば、何か粗相があってはいけないので、畏まるべきだろうか。それとも可解斗の知る限りの祖父と孫の関係のように、仲睦まじく接するべきなのだろうか。

畏まるのはともかく、祖父とはいえ初対面の人と隔てなく接せられるほど、可解斗は器用ではない。端から後者の選択支はあり得ない。

ならばこの意趣に沿い、慇懃に振る舞っておけば問題ないだろう。それに実際、可解斗はこれまでの展開から常に緊張を強いられている。今は畏まってこそ、自然体として振る舞える。

「さ、着きましたよ」

深麗（センリ）が先立って戸を開くと、むうっとした熱気のようなものが可解斗を撫ぜ過ぎていった。

程なく通された場所は、巨大な堂であった。規則的に屹立する柱は仰ぐほどの高さであるから、その上にある天井は言わずもがな。

床を照らす無数の光の一つ一つも、電球などではなく、可解斗が寝ていた部屋にあった龕灯と同じ物である。

奥へ行くにつれ、熱気のようなものと共に、人の気配が強まってくる。

果たして堂の奥には、ずらりと男女が左右に並んで、可解斗の到着を待っていた。その列の先、数段登ったところの椅子には、一人

の老人が腰掛けているのが見える。
「あの方が、劉天袁（リュウ・テンユェン）さま。私とあなたの、お爺さまです」
言われて、可解斗の体がびくりと跳ね上がった。改めて言葉にされると、何か重みのようなものを感じてしまい、思わず身が震える。
「行きましょう」
深麗が招いてくれるのだが、可解斗の足はうまく前に出てくれなかった。
先ほどの驚き様と合わせて、それは衆のツボを刺激したらしい。くすくすと抑えた笑い声が、堂に反響して可解斗の耳に届く。まるで大勢に自分の有り様を貶されているような気になり、なおのこと足も心も凝り固まってゆく。

そこへするりと、深麗が自然な仕草で可解斗の右手を取って歩きだした。畢竟、可解斗はもう立ち止まっている場合ではなくなり、半ば強引に祖父の前へと連れて行かれる。
それが不快かと問われても、可解斗は判然としない。まるで幼少の扱いに気恥ずかしさを感じるが、そうして人に自分を委ねることは、決して不快ではない。
まるで姉に連れられて歩く弟のようだ。一人っ子の可解斗にとっては、新鮮な体験だった。

些か不埒なことに可解斗が考えを巡らせている間に、二人は祖父の前へと来ていた。隣にいる深麗が膝を付いて抱拳に礼を拝すると、可解斗も慌ててそれを真似る。
祖父――天袁は糸のように細い瞼から、真っ直ぐに可解斗を見つめていた。その目を、可解斗もまた見返す。
父に似ていると言われれば、確かに思い当たる節がいくつか散見する。目や口元の作りに、その血筋を感じさせる。だとすれば自分もまた、他人から見れば、目の前の老人と似ているのだろうか。
天袁の手がゆるゆると上がり、可解斗の頭にすっと乗せられた。

「よう、来たのう」
そしてただ一言、そう言って可解斗の頭を撫でる。たったそれだけのことに、胸の辺りがきゅうと締められるように感じる。
このような思われ方を、可解斗は味わったことがない。無論、母親は特段に可解斗を嫌っているなどと言うことはなく、ごく自然に自分を愛してくれていた。そんな母の愛とはまた違う感触が、可解斗の胸の内を満たす。
「お前が、征竜（ゼイロン）の子か」
天袁の声とはまた違う厳かな低音が、可解斗の耳に届く。それは天袁の後方の、遙か頭上から届いていた。
仰ぎ見た可解斗が堂目し、ひゅうと息を呑んだ。
そこにいたのは、巨大な龍だった。髭を長く垂らし、とぐろを巻いて悠然と堂の中に身を湛えている。その全容は、一見しただけでは把握し得ないほどである。

これまで感じていた熱気のようなものが、一層に強まって可解斗の体に染み渡ってくる。
それは明らかに、この龍から発せられているものだった。龍気とでも言うべきものに、この堂は満たされている。
「龍……」
可解斗は知らず知らずのうちに、歯を鳴らしていた。下顎が浮動し、落ち着き無く暴れ回る。あの日本で出会った龍とは、まるで桁が違う。だがそれは、確かに龍であった。
「龍が、怖いか？」
天袁に聞かれ、可解斗は躊躇いがちに頷いた。これほど震えておいて、今さら張る虚勢を彼は持たない。
「それでよい。龍は怖いぞ。忘れてはならぬ」
震える可解斗の頭をねんごろに撫で、天袁は言い聞かせる。それは正に、孫を愛おしむ祖父の姿に相違なかった。
「お爺さま。そろそろ……」

深麗に促され、天袁は次に可解斗の手を取った。
「お主は、征竜に武術を習ったらしいな」
「は、はい。七流と言います。父から手ほどきを受けました」
「それが何のためのものか、分かるか？」
「竜を、倒すためのものだと、父が言っていました」
可解斗の言葉を吟味するように、天袁は思案げな顔のままでいる。

「可解斗よ。豢竜氏（けんりょうし）になる気はあるか？」
そして、細い目で強く、可解斗に問いかけた。
「寨主！　いきなりそれは――」
突如列の中から、一人の男がやおら躍り出た。それは間違いなく、日本で可解斗を攫った男の一人であった。
「これは征竜の子ぞ。不満か？　唐信（トウシン）」
「征竜様は禁忌を破られ、追放されたのですぞ。しかもこんな日本人に、豢竜の技を授けるなど……」
「奴に拳竜の手ほどきを受けていたのは、お主であろうが」
「しかし、それとこれとは話が違います！」

さらに言い募ろうとする唐信の前に、ずいと信達（シンター）が踏み出した。
「恐れながら申し上げます」
恭しく礼を拝し、唐信とは異なる静かな語り口で信達が言う。
「血筋はなるほど、申し分ないものと思われますが、幼少より培ってこそ豢竜の技は冴えるもの。既に可解斗様は、齢十五を越えております。その技も、満足には身に付かぬかと愚考する次第であります」
これにはさすがに正論であると認めるところがあるようで、天袁は素直に唸って諫言を認めた。
豢竜の技は信達の言うとおり、幼少よりその素質を見出され、研鑽を積まなければならない厳しいものである。

単に龍と心を通わせれば良いと言うわけではない。龍を従え、己の意のままに操るには、龍の生態を十分に把握しなければならない、そしてときには巫呪の類を用いて押さえ、あるいは助けもしなければならない。

さらに豢竜氏は、龍と共に戦う必要を迫られる。その際に体が弱くては話にならないので、拳法や武器術も兼習する。

その全てを修めてこそ、真に豢竜氏として認められるのである。故に古代では、豢竜氏こそ方士や祓師の中でも無双の誉れ高く、特に皇帝の寵愛を集めていた。

「ならば、あれしかあるまいか……」

「はい。把式（はしき）でお決めになるのが、よろしいかと思われます」

勝手に進んでゆく話を、深麗が止めに入る。

「待って下さい。まだ可解斗さまは返事をしておりません」

そこでようやく可解斗は、自分の事が話題になっているのだと思い知らさせた。

突如、龍と相対し、連れ攫われ、今度はその龍を操る者にならないかと誘われる。はて如何様な返事をするのが最良か、殆ど何も知らない可解斗が答えられる道理は無い。

しかし、それでも、可解斗の心は既に定まっていた。

「やります。なりたいです」

ぐらぐらと顎が定まらず、身震いが収まらない有様で、可解斗は答えた。それが滑稽なほど勇ましく、ただただ見ている者の嘲笑を買うしかなくても、彼はそう言わざるを得なかった。

せっかく舞い込んだ機会。逃すつもりは無い。しかし、それが最良の答えであるという保証は無い。我が身を破滅へと追いやる、悪手であるかもしれない。

ならば、それはそれ。破滅した時に、悶え苦しんで狼狽えればいい。そんなものは、そのときの自分に任せておけばいいのだ。

今は苦しむ時ではない。決めるときだ。そのくらいのことは、弁

えている。
「待って！　まだ十分に説明もしていませんよ。それを軽々と応じてはいけません」
確かに深麗の言うとおりである。今の可解斗は傍から見れば、状況に流されて唯々諾々と応じているだけだろう。
可解斗は言い募る深麗に、ぎっとゴツい視線を寄越す。

自分の決断を、軽々などと言われてはさすがに気分を害する。大体にして、可解斗がこの場でこんな決断をしている原因の大半は、深麗や天袁、そしてあの探偵二人組といった豢竜氏たちにある。
それを今更、まるで自分の短慮こそが悪いかのような言い様をされては堪らない。他人と正面きって敵対するのを嫌う可解斗でも、威嚇の目を向けざるを得ない。
「僕の父は、あなた方と同じ、豢竜氏だったのでしょう」
そのまま可解斗は、深麗に話しかける。というよりは、この場にいる自分以外の全てに語りかけるような口調であった。
「はい。当代随一と呼ばれた、豢竜氏でした」
頷きながら、深麗はそれに答える。先ほど唐信が言ったように、可解斗の父である征竜は、豢竜氏としての禁を破り、追放された過去を持つ。
故に征竜の名は豢竜氏の間で一つのタブーとされているが、それでも彼の功績が曇ることは無く、当時の豢竜氏にあって随一の声が高い人物であった。
少なくとも深麗は、そのように伝え聞いている。
「父は僕に、一つの武術を教えてくれました。『七流』と言います」
深麗の言葉にそれほど注意を払わず、可解斗は語り続ける。どうやらこれは彼にとっての独白であるらしい。
「父は『七流』を、龍と戦うための技術だと言っていました。正直そんなの、何のことか分かってなかった。ただの冗談だと思ってた……。

だけど、父は正しかった。龍は、本当にいたから」
一拍置いて、可解斗がぶるりと身を震わせる。日本での、龍との邂逅を回想しているのだ。
腹の底が揺れる。人間など物ともしない強力で投げ飛ばされた記憶が、強く揺さぶる。

かあっと熱い息を、震えごと吐き出し、大きく、体の隅々に沁み込ませるように息を吸う。父から教わった『七流』一の流れ『竜』の、導竜法の呼吸である。特に基本的な呼吸法や姿勢を総括した流れである。
こうして慣れ親しんだことを行うだけでも、先ほどとは落ち着きの度合いが違う。幼少より習った行程を忠実になぞり、何とか可解斗は震えを気にならない程度に留める。
「なら僕は、『七流』を活かす。多分ここでしか、父の教えてくれた『七流』は活かせない」
龍は恐ろしい。龍は怖い。そのような体験があってなお可解斗に決断せしめたのは、正にこの確信のためであった。
事実、今までの生活で可解斗は七流を全くと言っていいほど活かすことが出来なかった。型を反復する行為も、単なる自分のための慰撫行為でしかなかった。父に対しての義理立て以上の意味を持たなかった。

それが今、覆ろうとしている。自分の力で覆すことが出来るかもしれないという岐路に、彼は立たされている。
「そのためなら、試合でも何でも、やらせてもらいます」
ここに己の全てを賭ける。元より可解斗から『七流』を取ったら、殆ど何も残らない。
自分でもそれを分かっている。弁えているからこその軽挙である。ここでいちいち渋るほどの日常を、可解斗は日本で獲得出来なかった。だから今度こそ、それを掴み取ろうとしている。

父から教わった、『七流』の技によって――。
「流石はワシの孫。よくぞ申したものよ」
天袁は抑えた笑いを滲ませて、孫の肩を抱いた。
「聞いての通りだ。皆の者。この可解斗は豢竜氏となるべく、把式を行うことと相成った」
矍鑠とした天袁の声を、可解斗は腹にぐっと力を込めて聞いていた。

そうでもしなければ、あれほどの啖呵を切った威勢の良さが、自分の中から抜け出してしまいそうな気がした。
「誰ぞ、相手を務める者はおるかな？」
天袁の誰何に、急いで前に躍り出る一人の青年の姿があった。
「是非、私にお申し付けくださいますよう」
「ふむ。元（ユン）か」
名を呼ばれ、青年がさらに頭を垂れる。
「音に聞こえた征竜様が、手ずから仕込んだという『七流』とやら。是非にもこの身で確かめとうございます」
言い終えて上げた顔は、一心に可解斗へと向けられていた。
こちらも負けじと、元と呼ばれた青年を見下ろす。勝負は既に始まっているのだ。
「把式は明日。大把式場で行う」
時と場所が知らされ、元はまたも恭しく頭を下げる。一応、可解斗も真似して頭を下げておく。
それで集まりは終わりらしく、堂に集まっていた者達はそれぞれ出口へと向かっている。

自分の身の振り方が分からずにいた可解斗に、まだ元は視線を寄越していた。とりあえず今は彼に倣い、とびきりドスを利かせた目で応えておく。
そうして階下には元以外に誰も居なくなったところで、彼は踵を

返し、殊更聞こえよがしに靴音を鳴らして堂の薄暗い闇の中へと消えていった。
元の靴音が途絶えて初めて、可解斗は自分が昂ぶっていることに気が付いた。今の彼の胸の高鳴りは、龍との邂逅を思い出したときのそれとは明らかに違う。腰の辺りから背に掛けて、冷めざめとした気が伝うのではない。腹の底から熱く、熱く焼けた何かが噴き上がるような――。
「可解斗さま、可解斗さま」
深麗の呼びかけに、ようやく可解斗ははっとして首を向けた。様付けでなど呼ばれたことがないので、反応するのが遅れてしまった。
「行きましょう。色々と、お伝えしなければならないこともありますので」
「はい。よろしくお願いします」
「可解斗を頼んだぞ。深麗」
天袁に呼びかけられた深麗が、その場で立ち止まる。そして見る間に、彼女の容貌から表情を落とされていった。
それを目撃した可解斗は、何か良からぬものを見たという思いに駆られ、すかさず視線を外した。そのまま見つめていれば、自分の昂ぶった心さえ削ぎ落とされかねないほど、深麗の顔は凄絶の程を高めていた。
しかしそれも一瞬のこと。「お任せください。お爺様」と振り向き様に笑みを浮かべて答えると、可解斗を連れ立ってその場を辞した。

## 邂逅龍：五

寝かされていた部屋に戻った可解斗は、どこか苛立ち気味の深麗に、無理やり椅子に座らされた。
「まったく。幾ら征竜様の子だとは言え、豢竜氏に挑むのは無謀過ぎます」
あの表情の抜ける様よりかは、こうして言葉にして表現してもらえるほうが気が休まる。
「豢竜氏というのは、強いのですか？」
「知っているのではないのですか？」
「龍を操るということしか、知りませんが」
可解斗の言い様に、深麗は眩みを覚えたようで、くったりと椅子に座る。
「そ、それは何も知らないということです！」

今度こそ怒りを顕にして、深麗は叱り付ける。そして顔を両手で覆い、おろおろと首を振っている。
「いけないわ。だめです。そんなことで龍と戦ったら、殺されてしまいます」
「龍とは、もうやりましたよ」
深麗は「はあ？」と尻上がりの調子で大声を上げ、何か思い至ったのか、浮いた腰をもう一度椅子に戻す。
「唐信さんね。あれほど言っておいたのに、相変わらず気が短いんだから。信達さんは何をやっていたのかしら」
「その経験は、活かせませんか？」
可解斗の申し出に、深麗は所在なさげな視線を寄越す。それがむしろ可解斗に、見当違いのことを言ってしまったのかという不安を募らせる。
「あの、ちなみに把式というのは、具体的に何をするのですか？」

話を逸らすべく、可解斗は尋ねた。

戦う相手と、戦う相手が豢竜氏であることは既に判明している。そして把式が試合を意味するのは知っている。しかし、それがどのような規定で行われるのか分からなければ、戦いようが無い。

「この場合の把式は、年嵩の者が新たに豢竜氏となる場合、その実力の程を計るために行うのです。豢竜氏になる者は、生まれたそのときに龍と契約し、研鑽を積むものです。本来は中途で、豢竜氏となることは出来ないのです。

しかし、その者の力量次第では可能となります。その場合は無論、大変な辛苦の伴います。それに耐えうるか、そしてそもそも力が備わっているかを計るべく、豢竜氏と戦って、その力を示してもらうのです。　勝たなければいけないというわけではなくて、如何なる手段を用いても、豢竜氏に対抗できる力があることを証明できれば、それで十分なのです」

「はあ。大変なお仕事なんですね、豢竜氏って。僕くらいの歳から目指すのは、特例なのですか」

どうやらここまでの話を総括するに、豢竜氏は幼少から非常に厳しい訓練を経て、ようやく一人前になれる仕事のようだと可解斗は理解した。それをいきなりこんな高校生がなりたいと言っては、確かに他の豢竜氏の方々にとっては面白くないだろう。元が向けた視線の意味は、そこにあるのかもしれない。

「確かに大変な、仕事です。可解斗様のような人もいるにはいますが、珍しいでしょうね」

「だからかな。僕は、歓迎されていないように思うんですよ」

多少、そうした機微に疎いとはいえ、ここまで明け透けだと、可解斗でも容易にそれは感じ取ることが出来た。

そしてさも関心げに頷く可解斗から、またも深麗が視線を外す。今度は何やら動揺しているらしく、頻りに瞳孔が揺れて定まらない。

「いや、それはあまり関係ありません」
「……じゃあその、僕が日本人だから、お嫌いとか？」
若干言いにくそうに、どもりながら言う。
あの探偵の一人は、何だか日本人を嫌悪している風な物言いをしていたのを、可解斗は覚えていた。
しかしそれも、深麗は首を振って否定する。
「違うんです。それには、あなたのお父様について、お話しないといけません」
努めて気を落ち着かせ、深麗は口火を切った。
「あなたのお父様が豢竜氏であることは、既にお伝えしましたが、それはそれは優れた豢竜氏だったと聞いております」
「なるほど。それで血筋がどうこうと言っていたんですね」
可解斗の合いの手に頷き、深麗は続ける。
「しかし、征竜様は豢竜氏の禁忌を犯し、豢竜氏としての職を取り上げられ、勘当されたのだと、私は聞いております」
「禁忌、とは？」
「分かりません。文字通り禁忌ですので、知ることも口にすることも、禁じられています」
にべもない言い方に、部外者の可解斗は納得がいかない顔つきのまま頷く。自分の父親が何か悪いことをしたとはいえ、それを教えてもらえないのでは、息子としては釈然としない。
「でも、その禁忌を犯してやめさせられた父親の息子が、豢竜氏になっていいんですか？」
「そこで私達の意見が分かれているのです。お爺さまは賛成ですか、それを認めていない人もいます」
何か自分の至り知らぬところで、とんでもないことが展開しているように、可解斗は感じた。その奔流が偶々、自分を掠めていったのだろうと彼は勝手に解釈し、一応は納得した。
「ちなみに私は、あなたが豢竜氏になることには反対です。でもそれは、あなたが征竜様の息子だからとかは、関係ありません」

可解斗の答えを聞くまでも無く、深麗は進めていく。
「あなたは豢竜氏について知らなすぎる。戦うのは、やはり危険です。死んでしまう可能性もあります。そういう意味で、反対しているのです」
今や孤塁の身だと思っていたが、少なくとも深麗だけは味方でいてくれる。それを確認し、可解斗は安寧の心地に包まれた。

しかし、それを馬鹿正直に受け取るわけにはいかない。
「お気遣いは、ありがたいです。でも僕は、戦うことに決めましたので」
「考え直したほうがいい。唐信さんの龍に会ったのでしょう。本来なら、元は方士などをしていた人が、こうした把式を受けるのです。方術さえ用いないあなたが、あんな怪物に挑むということは、とても危険なことなのは分かっているでしょう？」
分かっている。十分に分かっている。あんな恐ろしい怪物と戦うということがどういう意味を持つのか。既に戦った可解斗には理解できている。
「はい、分かってます。尻尾で投げ飛ばされましたから」
それを聞いて、深麗は目を剥いて驚いた。どうやら龍に会ったと言っても、まさか戦って、攻撃されているなどとは夢にも思わなかったのだろう。
「……よく生きていましたね」
「体は丈夫なほうです。子供の頃から、親父に仕込まれてますから」
それくらいしか、可解斗には誇るものが無い。父に教えられた七流の技、それで鍛えられた体があったからこそ、あの時、曲がりなりにも龍に向かっていくことが出来たのだ。
例えそれがひどく無様なものだったとしても、一度は向かっていって、殴りつけることが出来たのだ。ならば今度こそ焦らず、練習した通りに七流を顕し、それを活かしたい。
「あの時は、僕の負けでした。でも父が教えてくれたのは、龍と戦

うための技術だったんだ。それを活かさないと、今度こそちゃんと行わないと駄目なんです」
「そんな軽々しく、投げ出してはいけない」
「軽々しいですか？　龍に挑むことは……」
まるで喧嘩でも吹っかけるような凄みを出して、可解斗はずいと前に体を乗り出す。

「確かに僕は、あなたから見れば何も知らないでしょう。だからって、ここで大人しく日本に帰るわけには行きませんよ。大体、連れてきたのはあなた達でしょう。攫っておいてとっとと帰れでは、筋が通りませんよ」
声を荒げる可解斗に押され、深麗が鼻白む。幾ら自分の事を慮ってくれての発言とはいえ、やはりあんな言い方をされては、可解斗も我慢ならなかった。
ただでさえ激しい状況の推移に晒され、心の均衡が不安定になっているため、可解斗にしては珍しく怒鳴ってしまった。
しかし深麗にも、可解斗の物言いには思うところがあるので、粛々とその糾弾を受け入れ、眉根をさらに顰めて顔を伏せる。それを見て、すぐに気力の萎えてしまった可解斗は、同じように項垂れ気味になる。
「ごめんなさい。深麗さんは、よくしてくれているのに……」
ここで深麗一人を責め立てるのは、筋違いというもの。それに可解斗は、既に自分の意思でここに留まることを決めたのだから、他人に責任を押し付けるような真似は出来ないはずである。
「可解斗さまがそう思われるのも、当然ですよ」
「その、さまを付けるのは、やめてもらえませんか？」
恥ずかしそうに鼻を掻いて、可解斗は照れくさい調子で言う。
「お嫌いですか？」
「はい。何だか落ち着かなくて……」
他の呼び方にして欲しい。そう要求すること自体がもう不遜な気

がして、最後のほうはごにょごにょと判然としない。
「それじゃあ、可解斗さんって呼びますね」
「……分かりました。それで、お願いします」
返事したあとで、二人は気恥ずかしそうに互いを見つめて笑った。間の抜けたやり取りに、可解斗は一瞬、自分の置かれた状況を忘れてしまう。
まだ言葉遣いなどは他人に向けるそれだが、こうして話していると、何だか昔からこうしていたような錯覚に陥ってしまう。無論それは錯覚なので、ひどく淡いものでしかない。

これが、親類と言うものだろうか。自分と同じ、もしくは似た血が流れている人間というのは、こうして話すだけでも違ってくるのか。
可解斗が不思議な感慨に耽っていると、深麗が思い出した様子で告げた。
「そういえば、征竜さまに教わったという七流、試しに見せてもらえませんか？」
「はい、構いませんよ」
可解斗はその場で立ち上がって瞑目すると、両の拳を腰に添えて姿勢を正した。静かに膝を中に回して内股になり、拳は逆に外へ向かってゆっくりと回す。
それらの所作だけで、深麗のころりと大きな瞳が、さらに剥かれるほどに瞠目する。
可解斗が行っているのは、空手で言うところの三戦立ちである。太ももと脇を締め、体の深いところにある筋肉――体幹深層筋を刺激し、重力が貫く線に対して垂直になるよう、自分の体を屹立させる。
これほどに正された姿勢を、深麗は見たことがなかった。少なくとも彼女の知る豢竜氏には、これほどの姿勢を有した人間はいない。
なるほど幼少から仕込まれただけの事はある。さらに可解斗はそ

の姿勢のまま深く呼吸し、腹の辺りに力を込める。
僅かに閉息し、丹田に取り入れた気を回転させて練り上げる。ゆっくり、焦らず、洞穴の天井から滴る液が、やがて鍾乳石を象るように、一回転ごとに内息を充溢させていく。

そうして身体の隅々までを自分の気で満たし、余すとことなく掌握する。筋肉の律動、内臓のぜん動、体液の脈動。それら全てを自分の意識下に置くことで、初めて一の流れ『龍』の功は成る。
気息の充実を感じ、可解斗は静かに目を見開いた。
「ここまでが七流の一の流れ、『龍』です。基本となる呼吸と姿勢を、身に付ける流れです」
言いながら可解斗は、どうやら彼が言うところの次の流れに移行していた。
開いた左手を肩口から真っ直ぐに出し、右手は水月の前の辺りに置いておく。足は左の自然体。足も膝も腰も、肩も肘も手も、ふわりと緩んでいながらその実、ぴたりと据えられて微動だにしない。
そこから可解斗は、ゆっくりと右足で踏み込み、構えを入れ替えて右の裏拳を突き出す。返す左手が守るように右腕を押さえ、今度は体を後ろに向き直しながら右腕を振り下ろす。
「二の流れ、陰です。立ち捕りを主とする流れです」
たおやかとさえ言っていい身のこなしで、ゆるゆると型らしきものが消化されてゆく。どうやらそれは、日本の柔術などに近いものだということが、かろうじて深麗にも理解できた。
「三の流れ、陽。拳足を基本とする構えです」
今度は左の腕を畳んで手の甲を相手に見せるように構え、右の拳は臍の辺りにぴたりと吸い付ける。先程の流れとは打って変わり、素早く拳が打ち出された。
左の腕刀払い受けからの右正拳突き。右腕を殆ど引かないまま、右裏拳と左下段突き。そして高々と上がる右上足蹴り。
足の甲がちょうど相手の頭の辺りに命中したであろうところでぴ

たりと止まり、そこからたっぷりと時間を掛けて、右足を畳みながら左腕を前に出して残心を決める。
そしてまた構えを変えて続けようとした可解斗を、深麗が思わず止めに入った。
「あの、ちょっと待って下さい」
止めたはいいが、一体何から言ったらいいのか思案がつかないようで、深麗は頭を押さえて考え込んでいる。
漸う紡いだ言葉の、かなり遠慮がちな口調だった。
「拳法の腕は、卓越していると思います。しかし、何と言いましょうか。もっとこう、龍を操るのに必要なことは、習いませんでしたの？」
「……」
可解斗のほうもまた申し訳なさそうに、眉根をひそめている。

何か自分が間違いを起こしたのだろうけど、それが指摘するのもかわいそうなものであるために、迂遠な言い方をされているのだろうと、勘繰りがちな可解斗は敏感に思い至った。
「まあ、そうですわよね。豢竜氏については、何も聞かされていなかったのだから、それも当然でしょう」
それでよく豢竜氏になると言えたものだと、言葉に出さないまでも深麗が呆れたのは言うまでもない。
可解斗ももう呆れられるのに慣れてきてしまったため、いちいち先程のように声を荒げる必要を感じなかった。むしろ開き直りの体で、「これが父に教えられたことです」と伝えた。
深麗は何やら不穏なことに気が付いた様子で、恐々と可解斗の顔を覗き込む。
「まさか可解斗さん。その技で、龍に挑むのですか？」
「それは、さっきも言ったと思いますけど」
父から習った七流で龍に挑みたい。堂でもこの部屋でも言ったはずなのに、深麗にとってそれは、何度でも驚くべきことのようであ

る。
「本当にそれを征竜さまは、『龍を倒す術』だと言われたのですか？」
「ええ、言っていましたよ」
毅然と言ったところで、深麗を安心させるには至らないようで、ますますその端正な顔をしかめていく。
何か上手く可解斗の翻意を促せないものかと悩む深麗へ、さらに彼は続ける。
「もう、決めましたので。これで、あの元という人と、戦いますので」
あの堂でも言ったことをもう一度宣言し、何を言われても動じないということを伝えておく。そうしないと、これ以上何か言われてしまい、本当に心が萎えてしまいそうになってしまう。
「……分かりました。出来る限り、協力いたします」
そう言って深麗は、可解斗の手を握り締めた。
「まず約束してください。龍と正面から戦わないこと。豢竜氏のほうを狙うこと。この二つを忘れないで」
まさかきちんとした戦略が授けてもらえるとは思っておらず、可解斗は関心した。
「その戦略って、何か意味とかあるんですか？」
「いえ、意味というほどのものは。ただ龍と豢竜氏自体を比べて、どちらが強いかといえばやはり龍のほうなので、豢竜氏を先に狙ったほうが、まだやりようがあると思うのです」
「じゃあ豢竜氏を倒せば、その龍も消えたりとか」
「はあ？　別に消えませんよ。龍は龍でしょう」
思わず「す、すいません……」と謝り、可解斗はおずおずと尋ねる。
「それで、認められるんでしょうか？」
「それは流石に分かりません。お爺さまや他の方たち次第なので、

何とも言えません」
　何か指標のようなものがあればと思ったが、完全に人任せの評価方法らしい。それでも豢竜氏を倒して勝ってしまえば、さすがに心配は無いだろう。
　そう思って、可解斗の体がぶるりと震える。もしかすれば、万に一つ、自分が勝てるかもしれないという方策が定まり、体が勝手に興奮してしまう。しかし実際の龍との対決を回想して、身も心も凍えて荒むのを繰り返す。
　徐々に落ち着きを失くていく可解斗は、普段どおりの情緒不安定さを取り戻しつつあった。
「負けた場合って、どうなるんでしょうかね？」
「負けても内容が良ければ、認められるでしょう。でもそうでないなら、日本に帰れるのでは？」
「だから、帰りませんよ。僕は」
「はい。だからこそ、頑張ってください。あまりお手伝い出来ませんけど、何か入用ならば、言ってください」
　椅子を片して部屋を出る深麗を、「あ、ありがとうございました……」と少し間の抜けた挨拶で見送り、とうとう可解斗一人だけとなった。
　いざ残されると、やはり心細く感じてしまう。しかも明日には、龍と戦わねばならないのだ。もう何度も反芻しているのに慣れるということが無いらしく、その度、胸の辺りにもやもやと蟠りを感じてしまう。
　戦わねばならない時というのは、誰にでも来るもので、とうとう自分の番が来てしまったのだと、可解斗は納得しようとする。
　心の不安定な自分には、これくらいの追い詰められ方が丁度良いのかもしれない。そうして追い詰められれば、自分の中の秘められた力が、今さらひょっこり出てきてくれるかもしれない。
　そういうものにでも恃まないと、心の振り幅が自分でも制御でき

なくなってしまう。そうなっては致命的だ。戦うだの何だのと言っていられなくなってしまう。

何だか居ても立ってもいられなくなった可解斗は、先ほど深麗に披露した流れをもう一度やってみることにした。

まず一の流れ『竜』で体と息を整え、ゆるゆると型を続ける。

流れを追う内に、いつもの通り彼の心は平らかさを獲得し、冷静に今の状況を鑑みる助けとなる。

今更怖い嫌だと喚くのは簡単だ。しかしそんなことをしていては、何も変わらない。自分も、自分の周りも、全て変わらないまま、七流を活かせないまま、過ごしていかねばならなくなる。

自分が恃むべきは、この七流なのだ。これこそ恃むべきなのだ。

それを再確認し、可解斗は打ち震える。ややもすれば夢心地ですらある今の状況で、七流の技だけが確かな感触を与えてくれる。

こうなったら、やるしかないのだ。七流を、自分自身を、出せるだけ出ししてやればいい。

全ては明日だ。明日で、可解斗の人生が決してしまう。忌憚なくそう思えるからこそ、可解斗は夜半を大きく回ってからも、七流の稽古を繰り返していた。

## 邂逅龍：六

「可解斗さん、可解斗さん」
深麗に揺り起こされて初めて、可解斗は自分が床に突っ伏していることに気が付いた。
どうやら朝方に眠くなっても、無理やり稽古を続けたため、体が突然ぷっつりと眠ってしまったのだろう。
しかし稽古をしていなかったとて、眠れたかどうかは定かではない。むしろ不安を募りに募らせた最悪の精神で、把式へと望むことになっただろう。
そう思えば寝不足のための疲労も、やはり襲ってきている不安も、まだ救いがあるようで、可解斗は深麗に案内されるがままについて行く。

そうして初めて、可解斗は中国の空の下に出てきた。
初めて見る中国の景色は、正に深山幽谷と言った風情で、正直に言えば深すぎて何だかよく分からない。実は日本だと言われても、可解斗は抵抗なく受け入れてしまうだろう。
しかし眼下に見える樹海には、時折被さるような出来かけの雲が這い寄り、如何にもここが高山域にあることを演出している。
その高さは、今の可解斗にとって優越だった。まさに陸の孤島。下界の諸々と切り離された、ここは仙境である。
もう自分は、これまでのことを考えなくてもいい。拘う必要なんてない。そんな気にさせてくれる高さ、そして遠さである。
案内された大きな広場には、人だかりで出来ていた。開かれた屋敷の庭先に、天袁の姿が見える。
そして人垣で形作られた大きな円の中心で、既に元が待ち構えていた。

「お、おお……」
思わず、可解斗は声に出して唸ってしまった。

土が踏み均された把式場。弟子達による人垣。こちらに寄越す好奇と懸念の視線。それらをまとめて庭先で見守る師匠。まるで武侠譚の世界である。
（中国だ。ここは、中国なんだ）
そのとき初めて、可解斗は自分が中国にいるのだと言うことを、実感を伴って理解した。
「これより、劉家豢竜氏、劉征竜の子、石竜可解斗。元家豢竜氏、元（ユン）との把式を執り行う。双方、全力を尽くすように」
審判らしき男が前に出ると、何やら口上らしきものを並べ立てる。いきなり始まるのかと思っていた可解斗は、これはしたりと思い、静かに構えを取った。
七流、一の流れ、『竜』。姿勢と呼吸法で体を整える流れであり、その後に続く全ての流れの根本でもある。
（せめて、息だけでも整えなくちゃ――）
慌てふためく体を落ち着かせるべく、一の流れ『竜』の呼吸をねんごろに繰り返す。
深なる呼吸を密に重ね、体幹に直立する空洞を設し、大気に充ち満ちる龍気を取り入れ、己がモノとする。
それこそが『竜』の呼吸、導竜法である。特殊なリズムで繰り返す呼吸によって調息し、取り入れた龍気を丹田にて練り上げる。増幅された龍気は体内を巡り、然る後に身体は、正に龍の力を宿すに至る。

あくまでもそのように、可解斗は父に教えられてきた。無論、この呼吸法によって身体能力が爆発的に上昇した経験など、これまでにない。ただ慣れ親しんだものであるから、こうして緊張する場面で行うと、気持ちが平らかに治まってくれるのである。

慌てふためいて勝てる相手ではない。可解斗にも、そのくらいの分別はある。勝つの負けるのは一先ず置いておき、まずは自分の全力を振り絞ることだけを考えればいい。

心が平らかになるにつれ、それは殊勝な形へと変わり、体はその挙動に備えるべき力を宿す。

そのとき可解斗は、空気の中に混じる、何か妙に熱いものを感じていた。それはあの堂の中で感じた、熱い、熱い龍の気と似ていた。

一呼吸、繰り返すたび、自分の中にそれが入り込む。口や喉が焼けるように熱くなり、腹の底に収まったそれは血管を巡るようにして四散し、さらに体が火照りだす。

導竜法によって、可解斗の体が如実に変化を表し始める。

これは可解斗にも身に覚えの無い感覚だった。七流を習い始めてこの方、これほど充溢した気の巡りを感じた試しはない。

本来なら気を巡らすのによろしくない体調であるはずなのに――それとも昨晩願ったとおり、今さら功が成ったのか。それにしても余りに唐突過ぎるのではないか。

「始め！」

全く腑に落ちない滾りを可解斗が自覚し、それに困惑している内に、審判役の男が合図した。

いつの間にか傍に龍を呼び出していた元が、こちらに体を向けていた。元と、彼の龍との、射竦めるような視線を浴びて、ゆっくりと可解斗は二人に向き直る。

果たして、元と可解斗の戦いが始まった。

合図があっても、二人と一匹はすぐには動かなかった。元は端から様子を見る体だったが、可解斗はむしろ突如襲った自分の変化に、対応しきれずにいた。

睨(シン)みあうこと数秒、龍がずるりと蛇腹を引きずって前に出る。唐(トウ)

信が呼び出したものより小振りなものの、その出で立ちは龍に相違なく、大きく突き出た口には鋭い牙が生え揃っている。
「さあ、稀代の豢竜氏の息子。その力を見せてみろ」
元が軽く指で示してやると、龍は可解斗へ向かって踊りかかった。唸りを上げて襲い掛かる龍を見て、可解斗は一先ず動揺を意中の外に追いやり、左手の甲を見せる形で前に出し、鳩尾の前に右の拳を添える。
七流、二の流れ、『陽』。拳足を主とした動の流れである。

流れに沿う形で、可解斗は捩じっていた左腕を跳ね上げつつ、右へ運足して龍の下顎を腕刀で弾きながら、その横へ逃げた。
突撃を外した龍は、地を跳ねてまたも可解斗に迫る。
可解斗は落ち着きを払うように掌を下に向け、膝を屈めて龍の牙を遣り過ごした。のみならず、その喉に向けて右肘を跳ね上げる。
硬い肘鉄が交叉法の要領で突き刺さり、龍の喉がざっくりと抉れていた。
「ぐげえっ」
まるで人のような呻きを上げて、龍は可解斗と通り過ぎる。再び距離を取った一人と一匹を見て、先ほどまで静まり返っていた把式場が、にわかにざわめいている。龍の攻撃を生身の人間が二度も危なげなく遣り過ごし、あまつさえ反撃を加えたことは、彼ら豢竜氏をして瞠目に値する現象だったらしい。
龍を操っている元もまた、僅かながらに動揺を禁じえないようで、手掌で指示していたのが既に止まっていた。
「少しはやるようだ。とはいえ、これくらい凌いでくれなければ、こちらも困るよな」
元はさも余裕の含まれた調子で話しかけてくる。しかしそのような弄いも、可解斗には届かない。彼の意中は、既に目の前の龍と、自分とに占められている。

先程の攻防は、自分自身のイメージ通りに、七流の通りに体を駆動させることが出来た結果だった。そしてこれほど理想どおりに体が動いたのは、これが初めてだった。

初めての体験なのだが、どこかでしっくりとくるものを感じている。自分や七流が、こうあるべくしてあるような――。

その確信が、可解斗の足を前に進める。無論、目標は龍である。

龍もまた、悠揚と構えているわけではない。

振り払うように放たれる尾を、可解斗は腰や膝を屈めながら激しく体を入れ替えて踏み込んでゆく。ボクシングで言うところのダッキングの技術で、彼は間合いを詰めていく。

「シッ――」

鋭く呼気を吐き、右へ潜りざま、龍の腹に右の振り打ちを叩き込む。

龍の体が、左へとずれた。吹き飛んだ龍の横腹には、拳の形の窪みが痛々しく現れている。堅牢を誇る龍の鱗が拉げ、中の肉が押し潰されているのがよく分かる。

見れば、可解斗は再びその構えを変えていた。右の腕を高く上げて、顎の横に置く。まるで打撃格闘技の構えである。

それは七流、五の流れ、『火』。投撃や逆捕を完全に廃し、打撃のみによって構成された苛烈な流れである。今の可解斗が感じている、不可解な滾りのままに自分を躍動させるには、なるほど適切な流れと言える。

「おおおッ」

離れた間合いをまた殺すべく、可解斗が飛び出す。上で鎌首をもたげる龍の下へ潜るように、姿勢を低くして懐に入り込む。

人間と龍とでは、攻撃範囲の優劣は明白である。まずは何に置いても、近づくことが肝要だ。

迎撃する形で上から降りかかる尾が一転、足元を払う横薙ぎへと変化した。既に横へ動いていた可解斗は運足が間に合わず、両足が

ともに掬い上げられる。
片手を付いて素早く立ち上がろうとした可解斗の体が、斜めにぶっ潰れた。再び反転した尾が、可解斗の顔面を的確に痛打していた。危険な角度に首が折れ、地面に叩きつけられながら、さらに尾が打ちのめしてくる。
「ガアヒャアアッ」
調子を上げた龍が、右へ左へ尾を振るい、それに合わせて可解斗の体が右往左往する。
「どうした？　もう終わりか？」
ここぞとばかりに嵩に掛かる元だったが、余裕を見せて攻勢を緩めるような真似はしなかった。彼の性情が律儀であるからではない。龍の打撃を受け続けているにもかかわらず、可解斗が徐々に立ち上がっていたからである。
腕をこめかみの辺りまで掲げて、致命的なものを防ぎながら、何とか足を立て直していく。

もういつ頭がぱかりと割れて、中身がとろりと漏れてしまうのかと恐れてしまうほどに、頭蓋が揺さぶられている。腕も既に打たれすぎて、鮮烈だった痛覚が段々と鈍ってきてさえいた。
痛くて苦しくて、もう嫌になってしまう。助けて欲しい。この状況から、誰かそっと手を差し伸べて掬い上げて欲しい。帰りたい。帰るべきなんだ。もう日本に帰ってしまうべきなんだ。
そんないつも通りの可解斗が抱く思いが、じりじりと体の底から昇る熱に焼かれて、灰のように粉と散ってしまう。
陰惨で保守的で利己的な妄念が、まるで問題にならないほどの滾り。熱く熱くこの身を苛み、血に成り代わって体中を駆け巡る。
痛い。苦しい。つらい。やめたい。だからなんだ？　それがどうした？　それは手応えなのだ。自分が正に敵対し、相手を脅かしていると言う証明なのだ。より苛烈に、激しく打たれるたび、自分という存在が確かなものへと進化していく。希薄だった気配に、しっ

かりとした形を与えられていく。
日本にいた頃、七流を全く役に立てることが出来なかったら頃に比べたら、可解斗にとってむしろそれは歓迎すべき窮地だった。
自分が倒されそうになることは、相手が自分を倒そうとしていることだ。自分のために注意と力と思索を費やしていることだ。問題にならないほど軽くあしらわれたり、技が全く活かせなかったりするより、よほど上等な事態である。

## 邂逅龍：七

可解斗が感傷に浸る間、龍の打撃はさらに密度を増し、もはやその切れ間も定かではないほどうるさく音を響かせている。

「ぎひゃあッ」

奇声を上げて打ち据える龍を、可解斗は防御の奥から見守る。龍は人間と違って、テクニックだのフェイントだのと言った細かなことは行わない。彼らは龍なのだ。本来、人とは隔絶すべき神代の獣である。人間が積み重ねてきた技術のようなものを、まさか身につけていようはずもないし、そもそもにして必要が無い。

故に彼らは、ただただその威を示すだけで、戦闘は事足りてしまう。猿の親戚のようなものを相手取るとなれば、なおさらである。

そうして彼らは、行動を単純化する。相手に向かって火を噴いたり、水をかけたり、雷を呼んだり、牙を剥いたり尾を振ったりしかしなくなる。無論その一切が、人智を超えた次元で行われるのだが――。

（それでも、小細工がないだけマシだ）

人間を相手にするよりは、こういう戦いの方が可解斗には好ましい。それもそのはず。彼はそう戦うべくして、父親に仕込まれてきたのだ。

硬い鱗に覆われたしなやかな鞭が、可解斗の下方から迫る。腕の防御の隙間に滑り込ませようという算段らしい。顔の側面しか守っていないのだから、そこを狙われるのは当然と言える。

そこまでの駆け引きならば、可解斗の頭でも容易に察しが付いた。

「せいっ！」

狙い済ました龍の攻撃に、可解斗は待ちに待った迎撃を加える。

尾の先の、最も速度の乗った場所へ、素早く手刀を振り下ろした。

ごきりと、嫌な音が把式場に響く。直後に呻いたのは、むしろ攻

勢に出ていた龍の方であった。
尾の先の方が破れ、貴重な龍の血が撒き散らされる。それを間近で浴びた可解斗が、顔を滴るそれをちろりと舐め上げる。漢方である竜血樹の樹脂ではない、真の龍の血である。
舌先に甘い痺れを覚えながら飲み下したそれが、可解斗の中の滾りをさらに加速させてゆく。さすがは活血の薬として珍重されている霊果である。とことん打ち据えられた総身の痛みの上に、さらなる熱が上書きされいく。
赤く腫れた手で拳を握り締め、可解斗が走る。今しがた自分が砕いた、龍の尾を踏みつけて――。

龍の体は長い。これは古今東西、如何なる時と場所を超えて普遍的な真理だろう。そのような相手に対して効率よく間合いを詰めるにはどのようにするべきか。
人間と龍の間には様々な格差が存在するが、間合いの差も存在する。攻撃をするにしても喰らうにしても、まずこの課題を何とかしなければいけない。
体が長いのならば、その体を伝ってしまえばよい。そうすれば相手の動きを制限しながら、自分の間合いを確保することが出来る。
七流の歩法、龍伝。それは七流における基礎的な思想であり、体捌きでもある。
龍の体を踏みつけて、人が迫る。その様子に周囲は息を呑んでいる間に、可解斗はもう龍の頭に手を伸ばそうという距離まで近づいている。そんな猿の親戚の行いは、龍の目にはどのように映ったのか。少なくとも、好意的な解釈をするとは、はなはだ夢想し得ない。
嘶きと共に身を捩り、龍は可解斗を振り落としに掛かった。彼が足場としているのは、細長い龍の体一つである。僅かでも運足が狂えば、踏み違えて地面に落ちる。そして落ちる場所は、龍の懐の内側である。
そのような場所で隙を晒せば、即座に龍は可解斗の体に巻きつき、

法外な力で以って締め上げてくることだろう。龍に命令している元が制止しなければ、可解斗は尻穴と口から内臓を噴出してしまうかもしれない。

惨たらしい自分の未来が、もはや足元に迫っている。このまま踏み外して地面に降り立ち、体勢を整える一刹那が、今は余りにも長く、恐ろしく思える。

その恐ろしさこそが躍動の源になることを、果たして可解斗は気づいていたのか。自らを振り落とすべく蠢いた足場から、彼は躊躇い無く飛び上がった。

その足の片方を、緩やかに高く突き出して――。

一撃目の蹴りを戻し、二撃目を更に高く、速く、深く相手の急所に命中させる。『火』の流れ、竜環腿。

あの時と同じく、龍の顎の奥、逆鱗に二発の蹴りを叩き込む。

「おおあッ！」

まだ体を空中に残し、可解斗はさらに吼え上げて体を捻った。今度は屈みこんで、天地を逆さにしてから足だけを上に伸ばす。

骨の厚い踵が、三撃目として翻り、逆鱗をカチ割ってのけた。

二連の高い蹴りから、さらに身を捩って相手に背を向け、真下から踵を振り抜く。間断なく繰り出される蹴撃の、全てが例外なく逆鱗を狙ったものという、竜環腿の変じ手、臥竜尾である。

今度は慌てふためいて振るったものではない。気を平らかに静め、急所を狙い済ました攻めである。

跳ね上がった口で真上に向かって喀血し、龍は自身の長い体をだらりと地面に横たえた。その卒倒ぶりは神代の獣とはいえ、明らかに戦闘能力の喪失を物語っている。

着地して龍に向き直り、もう一度構えて残心を済ませると、可解斗は抱拳して深く礼した。既に元は自分の龍を倒され、忘我の体を為していたからだ。

「しょ、勝者、石竜可解斗……」
審判役の男が、遅まきながら勝ち名乗りを上げる。しかし今しがた自分が目撃したことがよほど疑わしいのか、その言葉尻は自信なさげに擦れてしまっている。
把式が終ったとはいえ、可解斗もどうしてよいのか分からず、所在ない様子ですごすごと帰ろうとする。その当てと言えば、昨日一晩過ごしたあの部屋以外に無い。
「よくやった。可解斗よ」
人並みに紛れようとした可解斗を、天袁が大きく声を張って呼び止める。そういえばこの把式、元を辿ればこの天袁――可解斗の祖父が仕組んだものであったことを、彼は思い出した。
仕組んだのも天袁なら、それを収めるのも天袁ということだろう。とりあえず呼ばれたので、可解斗は天袁のいる庭先の前まで歩み出た。
「これより石竜可解斗は、參竜氏として我が劉家の門弟とする」
どこか騒がしかった把式場が、天袁の声によって切り落としたかのように静まり返る。その厳かな調子に、可解斗も思わずその身を正して佇立していた。
把式の結果次第で、自分の進退が決定する。先程の龍との立ち合いに込められた意味を再確認し、これまで体内に蟠っていたあの滾りは、息つく度に外へと逃げていってしまった。
ぼうと自分の祖父を見つめる可解斗は、何やら視界の隅で深麗が身振り手振りで、何かを伝えようとしているのを見つけた。
どうやら抱拳して膝を付き、それから頭を下げろと言うことらしい。独学で中国語を習い、少しは中国の文化を勉強した可解斗だが、こうした礼節への疎さというのは、単なる知識で補えるものではない。
急いで取り繕って礼を拝すると、元もまた同じ姿勢を取り、隣で頭を垂れているのが見えた。彼はまだ自失から立ち直っておらず、その目はどこか泳いでいて危うい印象を与える。

それでこの集まりは終わりらしく、把式場を占めていた人々は、屋敷の中へと戻ったり、把式場の他の位置で、何か習練を始めようとしていた。

この後に、何らかの会合に呼ばれたり、新たな敵に絡まれたりという展開を期待していた可解斗は、その関心のなさに少しばかり肩を落としてしまう。

「可解斗……さん」

立ち上がろうとした可解斗に、躊躇いがちな口調で元が声を掛けてきた。

「おい。石竜、可解斗」

如何にも投げやりな調子が、元の本来の喋り方なのだろう。しかしそれは素直に健闘を讃えるというより、自分の中の腑に落ちないものを相手に突き返すような乱雑さも滲んでいる。

「負けたよ。でも、あんたのやったことは、豢竜じゃない。ただの拳法だ」

「……はい。そうですか。すいません」

拳竜を生業としている人にそう言われても、可解斗には何の反証する材料が無いので、悄然と頷くほか無かった。未だ拳竜それ自体もよく理解していないのだから、それを素直に受け入れるのが当然と言える。

しかしその殊勝さも、時と場合によっては、余り歓迎できるものではないらしい。特に今しがた自分を負かした相手が、そんな浅薄な態度を取るのを、元は許しておけなかった。

やおら可解斗の胸倉を掴み、ずいと顔を迫り出して元が睨みつける。龍を倒されて落ち込んでいたとはいえ、元自身は何の疲労も負傷も無い。

「親がそうだってだけで、なれると思うなよ」

可解斗が父親が豢竜氏であることを知ったのは、つい昨日の出来事である。そのような台詞で凄まれても、共感のしようがない。た

だ元が放ってくる妬みを、恐々とした顔で受け止めるばかりである。
それに今は、龍と相対していたときの滾りが消えてしまっている。とてもではないが、元と一対一で戦う気概を持つことが出来ない。
「みっともない真似はやめなさい、元」
元が事を起こす前に、深麗がすかさず止めに入った。彼女は元の腕を掴んで可解斗から振りほどくと、切れ長の目をぎっときつく細めて見遣る。
「負けは負けでしょう。大人しくなさい」
「しかし、深麗様。方術などで破れようものなら、まだ納得がいきます。でもこいつは、素手で龍を倒した。
おかしいでしょう、これは。こいつ、何かやったんだ。そうに決まってる。でなけりゃ、俺の蛟(みずち)が負けるはずない」
元は震える指で可解斗を示し、深麗に訴えかける。

人が素手にて龍を倒す。その現象が、彼にとっては受け入れ難いものらしい。豢竜氏の常識から逸脱したそれを虚構と感じ、何らかの作為が働いているのだと邪推するのも、ごく自然な流れかもしれない。
些か美徳に掛けるが、元も言わずにはおけなかったのだろう。
「ならば、今度は龍を呼ばず、立ち合えばいいでしょう」
憤りに震え上がる元に向かって、深麗は毅然と涼やかに言ってのけた。元は二重の意味で顔色を失くし、さらに指先の震えを加速させる。
深麗もまた元と同じく豢竜氏を目指しており、互いに歳も近いため、知らぬ間柄ではない。故に元は、深麗も心情的にはこちらに味方してくれるものと思っていた。しかし、いきなりやってきて拳竜の技を習おうとする日本人の肩を持つ深麗の態度は、彼を絶望させ得るに足る材料だ。
そして、もしここで元が意地を張り通せば、待っているのは龍をも屠る一撃である。嘘だズルだと喚くのと、実際に突きつけられる

とでは、持つべき覚悟が違ってくる。
むしろ自分の浅薄な様を見せ付けられて、元はゆるゆると腕を下ろし、また自失の様相で可解斗と深麗を見つめていた。
「さあ、行きましょう。色々と準備がありますから」
そういって深麗が可解斗の肩を掴んで、無理やり屋敷の方へと案内する。可解斗もまた、元と立ち合わねばならないという緊張から開放され、呆けた様子で彼女の引っ張るがままに体を任せた。
あの元という豪竜氏には悪いが、これで自分は日本に帰らずに済むと思うと、可解斗はふつふつと喜びが湧いてくるのを感じた。しかしそれを表に出そうという気にはなれない。
元が見せた焦点の定かならぬ瞳を前にして、そんな振る舞いが出来るほど、可解斗の肝は太く育っていなかった。

## 狂悖蛇：一

ゆっくりと、息を吸う。
大きく胸を上下させ、背筋を伸ばし、冷たい朝の空気を身体の深くにまで沁み込ませる。
七流の呼吸、導竜法を繰り返す。しかしあの把式で感じたような滾りは、全く現れてくれない。

いい加減、呼吸法ばかりやっていても仕方が無い。とりあえず形だけ息と姿勢を整え、七流の流れを追う型稽古に入る。一つ一つの動作をゆっくりと、かいつまんで確かめるように行う。足裏の踏み方、脚の伸び、腰の捻り、背筋の歪みを逐一観察し、少しでも間違えば最初からやり直す。要は踊りと同じである。決められた動作を、決められた姿勢で、決められた調子で行う。
局面ごとに臨機応変な対応を迫られる実戦では、その舞踊然とした行動など役に立ちはしない。動きをなぞることだけに終始するならば――。
少なくともこれまでの可解斗にとって、この型稽古が七流の唯一の習練であり、組み手であり、実戦であった。父親の考え出した独自の流派である以上、同じ流派の人間は父親しかいない。その父親が亡くなって、可解斗には練習できる相手もいなくなった。
だからこそ、型取りにもそのような心構えで臨まねばならないほど、可解斗は七流に飢えていた。
父親に教えられた流れを辿り終え、呼吸を整えてから構えを解いた。
「早起きですのね、可解斗さん」
すっかり可解斗の世話役となっている深麗は、朝靄も晴れぬうちから鍛錬を行っていた可解斗と同じく、早くに起きて拳法らしきものを練習していたらしい。

可解斗が知っているのは七流だけなので、深麗の行っているものが本当に拳法なのかの見当まではつかなかった。
「父の言いつけなんで、その……さぼるわけにはいかないんです」
気恥ずかしげに目を伏せながら、可解斗は深麗に挨拶する。
元との把式で豢竜氏としての修行を受けることになったものの、まだ色々と手続きや準備があるらしく、可解斗はさながら季節ごとに設けられる学校の長期休暇を味わっている気分であった。
「可解斗さん、今日はお暇、ですよね？」
今の可解斗を捕まえて、暇も何もないだろう。まだ自分の部屋と食堂と把式場ぐらいしか把握していないので、出かける予定など立てられるわけがない。
「龍の巣に行ってみませんか。豢竜氏になるのなら、龍に慣れておくのは大切ですよ」
「龍の巣、ですか？」
どもりながらも、可解斗は少し動悸が上がっていた。
龍の巣。何とも子供心というか冒険心をくすぐられる言葉である。

あの把式を終えてから、可解斗は龍に対する恐怖心が薄れつつあった。というよりは――やはり胸の奥から湧き上がるのだが――何とか押さえられる範囲に制御できるようになってきたと言うべきだろう。
「行きます。行きたいです。それって遠いんですか？」
「いいえ。あそこの裏山がそうですよ」
え！？　と素っ頓狂な声を上げて、可解斗は深麗が指差した山を見た。それは本当にすぐ近くで、目測でも把式場の門から歩いて行ける距離なのが分かる。
龍の巣と言う場所は、やはり人の入るを拒むような、それこそ仙境と言うべき遠い場所にあるべきだとすぐさま連想していた可解斗は、今自分がいるところから、すぐ近くにあるという事実を味気な

く感じていた。
しかし可解斗のいる場所も、相当に人里から離れている。ここが既に仙境だと思えば、殊更おかしなことでもないだろう。
それにここは豢竜氏の集う道場である。龍を扱い、養うことを生業とするのだから、寄り添うほど近くに居を構えるのは、なるほど理に適っているのかも知れない。

特段用意するものも無く、朝食を済ませ、昼飯を包んでもらい、深麗の案内で龍の巣へと出発した。
可解斗が持参しているのは、朝食の小龍包だけである。深麗は何やら方術に必要と思える札などを身につけているが、やはり身軽な服装である。
龍の巣に行くのに、こんな軽装で良いのだろうか。もっと然るべき装いがあるのではないかと、可解斗はその細い神経を発揮しておどおどと深麗の後ろに付いていく。
その拳で龍を打ち倒しておきながら、やはり彼にとって、龍は未だに神代の獣であり、畏敬すべき存在なのだろう。
「着きましたよ。ほら、あそこ」
深麗が手を差し伸べた樹間を見遣ると、そこには林の中に忽然と現れた小さな池と、黙々と水を飲んでいる数匹の龍の姿を確認できる。
小さいのが二匹と、大きいのが一匹。母龍と子龍なのだろうか。小さい二匹は大きな一匹の周りでしきりにはしゃぎまわって、一時たりともじっとしていない。
この辺りの振る舞いは、人間も龍も変わらないらしい。

一幅の絵のように素朴な様子を見て、可解斗は容易に心と視線を奪われてしまった。龍を警戒させないよう、草むらに屈む深麗に従い、ひょっこりと顔だけ出して龍の親子を窺う。
「蛟の親子ですね。ほら、頭の上に瘤があるでしょう。あれは博山(はくさん)

と言いまして、あそこに力の源となる尺水（せきすい）という水が入っているのですよ。蛟はあれが特に大きいので、水が大好きなのです」
深麗は懇切丁寧に、蛟についての解説をしてくれた。
龍の持つ超常的な力の多くは、この水あってのことらしく、尺水を失った龍は、蟻などに食べられてしまうこともあるという。
「あの大きさだと、子供はまだ五十といったところでしょうか」
「五十！？　五十歳ということですか？」
「はい。そのくらいかかりますよ、あの大きさになるには」
子龍の見た目は、まだ中型犬くらいでしかない。あんなに可愛らしいくせに、自分の約五倍も生きている大先輩だと思うと、可解斗は何だか妙な気分を覚える。

そして龍が成長するためには、やはり伝承の通り悠久の時間が必要なのだということを、実感を伴って理解する。それだけの時をかけて育まれるからこそ、あれほどの人智を超えた力が宿るのかもしれない。
ならば、それを一時的とはいえ破って見せた自分は、一体何なのか。元の言葉ではないが、やはり素手にて人間が龍を倒すと言うのは、我が事ながら、どこか世界の理が破綻しているような異常を感じてしまう。
だからといって、可解斗は何か方術を操るでもなく、何か巧緻な罠を仕掛けたわけでもない。正々堂々、自身の五体のみを条件に戦ったと自負している。
これ以上このことについて考えると、もしかすれば龍を倒すほどの力が、自分の中から逃げていってしまうかもしれない幻覚に駆られ、可解斗は頭を振って考えを切り替えた。
「この辺りって、何匹くらいの龍がいるんですか？」
「細かな数字は私達も把握していませんが、この地一帯に、多くの龍が住み着いております。水龍に火竜に土龍もいます」
「土龍って、ミミズのことでは……」

「よくご存知ですね。大きいものだと十メートルくらいのがいますよ」
「うわ、長いなあ」
十メートルのミミズと聞いて、可解斗が身を震わせる。あののっぺりとした赤い体と相対するのは、なるべくなら勘弁願いたいところだった。
「もっと奥に、たくさんいますよ。見に行きますか？」
誘われるままに山奥へ向かおうとした深麗が、はたと立ち止まる。合わせて可解斗の肩に置かれた手が、有無を言わさぬ堅さを有していた。

細やかな深麗の手から伝わる緊張が、じんわりと可解斗の中に入って身を固めていく。
深麗は、あの龍の親子を見つめて動かない。釣られて可解斗も視線を戻すと、そこでは俄かに信じがたい光景が展開していた。
数名の男達が、可解斗たちと違う方向から、龍の親子に近づいたかと思うと、彼らはいきなり躍り出て、腰溜めに構えた機関銃を一斉に発射した。発砲音が荒々しく林の静寂を破り、龍たちを打ち据える。成長途中の子龍が血を吹いてのたうち、甲高かった声をさらに高くして嘶いた。
二匹の前に立ちはだかり、母龍は水を厚く前面に展開してそれらを防ぐ。蛟として力を発揮し、池の水をまるで自身の手足のように操る。分厚い水の壁に遮られ、男達は打つ手を失くしたように下がって銃撃を緩めた。
下がる彼らと入れ替わるように、一人の男が前に歩み出る。靴も履物も上着も、黒ずくめの異様であった。
その顔は、目深に被ったハンチング帽に隠れている。
男は龍の前に立っているにもかかわらず、これといって構えるようなことをしなかった。強いて言えば、右の手で何かの印らしいものを象っている。

男はぐっと固めた拳を、一気に開いて龍へと向けた。その途端、銃声を上回る轟音が辺りに鳴り響いた。
掌から放たれた白々とした光が水の壁を貫き、母龍の体ごと吹き飛ばした。水は力を失ってだらりと地面を流れてしまう。もう蛟には、水を従える力はなかったようだ。
すると、幾人かの男たちは慌しく龍に取り付き、首輪らしきものを慣れた手付きで装着していった。
首を振って抵抗する子龍の体が、何か衝撃を受けたように反り返って痙攣する。そのままばったりと倒れたきり、子龍の一匹は身じろぎ一つ起こさなかった。

## 狂悖蛇：二

「な、何なんですか？　あれって、いいんですか？」
　豢竜氏や龍の事情に精通しているわけではない可解斗にも、目の前の光景が良からぬ行為であることは想像がついた。
　その推測はやはり的を得ていたらしく、深麗は顔を向けずに小さく頷いた。
「あれは、密猟者です。とうとうこんなところにまで……」
「密猟？　龍を密猟するのですか？」
　龍と密猟という言葉が結びつかず、可解斗は小さく混乱をきたす。
「昔はそんなこと、考えられませんでしたよ。でも最近ね、はぐれの豢竜氏とかが増えて、そういう稼業に手を染める輩が増えているんです」
　深麗が言うことには、龍の体は漢方や料理、そして工芸品などとしても非常に重宝されるので、それを求める者は古今東西絶えることは無いらしい。龍というのは、存在自体が希少な動物である。そうした加工商品の流通は、古来より豢竜氏によって厳重に管理されてきた。
　しかし最近は豢竜の技も流出が著しく、にわか豢竜氏というか、もぐりの豢竜氏が龍を捕らえ、売り捌いているのだと言う。それも豢竜氏が定めている本来のレートよりも安価に、である。
　元々が相当に法外な値で取引されている。安価とはいえ、かなりの利益率なのだろう。そこに目をつけ、より安直な手段によって龍を捕獲し、文字通り売り捌いている。
　無論、そのような豢竜氏が正しい豢竜の技を身に着けているはずがない。それを補うのが、重火器などの兵器類だと言う。彼らは中国マフィアとの協力を背景に、力づくで龍を捕まえているらしい。

中国に来てから、可解斗が一貫して感じていた幻想的な雰囲気が、呵責ない十字砲火でずたずたに引き裂かれる思いだった。
龍という神代の獣を、人間の火器で踏みにじるのは、やはり忸怩たる思いが呼び起こされる。まるで龍を商品としか見ていない、不遜な行いだ。
龍に寄り添い、龍を養い、龍と共に戦う豢竜氏ならではの義憤が、可解斗の中に生まれつつあった。まだ自分は豢竜氏になったわけでもないのに、彼はすでにその気になっているのかもしれない。
黒ずくめの男を見ていた深麗が、何かに思い至ったようで、はっと大きく息を飲み込んだ。
「あれは、接輿（せつよ）さん！？」
「お知り合いですか？」
厳かに頷き、深麗は可解斗に向き直る。
「劉家の門弟だった人です。そう、ちょうど征竜さまと親しかったと聞いています」
今度は、可解斗のほうが息を呑む番であった。
父親の友人というのを、可解斗は初めて目の当たりにすることになった。日本に居たころの父親は天涯孤独で通っていたので、親類縁者にはまず会わない。そして友人もまた家に連れてきたりした試しがない。
可解斗の気性は、こうした父親のものが多く受け継がれているのだろう。彼もまた友人は皆無である。だからこそ、友人のいなかった父親を馬鹿に出来るほど、可解斗は社交的ではなかったし、厚顔でもない。
しかしながら、やはり驚きは隠しようがなかった。
父親に友人がいたと言うのも驚きだが、それ以上に、自分の知らない父親のことを知っている人がいるというのが、可解斗にとって新鮮な驚きだった。
自分が父親の全てを知っているなどとは思わない。しかしそんな

ことにいちいち気を回すことがなかったため、はっと我に帰るように思い至った。
出来れば父のことについて、男に尋ねてみたい衝動に駆られる。だが、今ここでそれを表に出すには、深麗の存在が歯止めとなる。
幾ら深麗が優しかろうと、さすがにそこまでの手前勝手は許さないだろう。
「豢竜氏でありながら、こんな稼業を手伝うなんて……」
ぎりりと奥歯を噛み締めているのが、傍目からもよく分かる。深麗の目の前で行われているのは、豢竜氏を、そして龍の尊厳と言うべきものを踏みにじる行為だ。誠実な彼女の性情は、そのような行いを許容できないのだろう。
そして意を決したように、深麗は符をかばんから持ち出すと、身を屈めたまま彼らの元へ歩み寄る。
「ちょ、ちょっと、深麗さん。どうするんですか？」
そのままこの場に置いていかれそうになったので、可解斗は思わず深麗の肩を掴んで小声で囁く。
「決まっているでしょう。彼らをこらしめるんですよ。可解斗さんはここにいてください」
「こらしめるって、いや、でもその……」
さらにまごまごと言い募る可解斗を置いて、深麗はするりと身を滑らせて木陰から躍り出た。
「来なさい、白（はく）！」
前面にばらりと展開した符から、ずるりと白い帯が飛び出す。
それはすぐに大蛇の形を成し、太くて長い蛇腹が飛び出し様、男達を一薙ぎにしてしまった。
突然の闖入者に、彼らはまともな反応を返すことが出来なかった。
残った者達が銃を構え、白い大蛇へと発砲する。銃火が木陰を蹂躙するなか、ぶちぶちと肉を噛み砕く音が響く。蛇の白い肢体の至るところに、真っ赤な花が咲き乱れる。

粗方撃ち尽くしたところで、彼らは銃を下げる。如何な龍とて、これだけの銃弾をまとめて食らえばひとたまりもない。それは先ほど蹂躙した龍の親子を見れば瞭然である。

すでに事を終えた体の彼らは、硝煙と血風が漂う向こうで、もぞりと何かが蠢いたのを見た。

その瞬間、血に塗れた蛇の尾が翻り、またも数人の男達を物ともせずに一掃した。横殴りに来る尾が男達の体をくの字に拉ぎ、林の向こうにばらばらと放って捨ててしまう。

「そんな豆鉄砲じゃ、蛇の一匹殺せやしない」

深麗は端正に整った顔を歪ませて、侮蔑も顕に倒れ伏せる密猟者共を見下ろす。

さらに深麗は手で指し示し、白はそれに従って尾を振るっていく。その一振り一振りで、ごっそりと人員が削られていった。

可解斗と接する時や、道場にいるときとはまるで違い、深麗はどこかタガの外れたように逃げ回る男達を蹴散らしてゆく。

古来より蛇というのは再生や復活、そして生命力を司る生物として尊ばれてきた。成長のたびに脱皮し、新たに生まれ変わる姿は、まさに無限の生命力の顕現である。

たった９ｍｍぐらいの鉛玉など、その白蛇にとってはまるで利かないらしく、よしんば肉を抉ったといっても、すぐに治癒してしまう程度の傷にしかならないようだ。

深麗は白に手で命令し、一人、また一人と尾で薙ぎ払ってゆく。巨大な蛇の力で突き飛ばされた彼らの体は殆どが拉げており、まともな人間の形を保っている者こそ珍しい。

一見しただけでどこかの骨を砕かれていることが窺え、まだ足や手などの末端に命中したものは幸運である。そうした者は何とか這いずってこの場を離れようとするが、体幹に食らったものにはそんな挙措さえ許されない。

内臓を傷つけられた者は例外なく血反吐を吐き散らし、呼吸もま

まならない状態で蹲っている。
そうでないものは言わずもがな、生存反応が既に失せている。
可解斗はその様を、口元の震えを抑えるために、両手を宛がいながら眺めていた。
（これが、これも、豢竜氏か）
龍という画然たる獣を従わせるのだから、ある意味これくらいの状況は修羅場のうちにも入らないのだろう。あれは文字通り神代の戦いを起こすものだ。それに人間が巻き込まれて、まだ命があるだけ奇遇と言えるう。

可解斗はまたも、自分の中の固定観念が突き崩される思いだった。深麗から伺っていた内容の豢竜氏なる職業、及び人種は、このような血生臭さとは無縁のように聞こえていた。
故にこそ、今でもどこか自分は、これまでいた世界の延長線上にいるのだろうと感じていた。
それはまるで違っていた。こんな世界――人間が正に虫けらの如く獣に散らされる世界は、絶対にこれまで自分がいた世界ではない。それが嬉しくもあり、恐ろしくもある。
だからこそ可解斗は、深麗の行いを止めようとはしなかったし、それを平素の心地で受け入れようとも思わなかった。
真っ赤な舌をしゅるしゅると揺らして、白蛇が一人を見つめている。残されているのは、接輿と呼ばれた豢竜氏崩れの男だった。
「今どきこれほどの白蛇を繰るとは、もしや劉家の正統ですかな？」
人ならぬ獣を前にして、まるで人を食った態度のまま、接輿は暢気な口調で語りかける。
「劉家豢竜氏、劉深麗です。呉接輿さん」
名を呼ばわれても接輿は驚いた様子もなく、にんまりと破顔するに留まった。
「劉。ということは、天袁師匠のお孫さんですか。これはこれは……」

さらに接輿が慇懃な言葉を続けようとしたところ、白が強かに地面を打ち据え、聞くに堪えない台詞を無理やり切る。

「今すぐここを去りなさい。でなければ、この白蛇に飲み込まれますよ」

「怖い、怖い。私はもう參竜氏ではないのですよ。大目に見てもらいたいですねえ」

「だから失せろと言っている。これで最後です。あと一言余計に喋れば、けしかけます」

「過分な恩情、痛み入る限りで――」

接輿が礼を言い終わる前に、白が蛇腹を伸ばして踊りかかっていた。

ごうと風鳴りを上げて襲いかかった口が、勢い余って地面を噛み砕く。

「ほっ。速い、速い。たいしたものです」

目深に被ったハンチング帽を手で押さえ、接輿はいつの間にか十数歩も離れた位置に立っている。残念ながら可解斗の目で、今のやり取りを殆ど見ることが出来なかった。

「縮地ですか。なら都合がいい。そのまま消えてください」

地を縮めたかのように、長い距離を瞬時に移動する仙術『縮地』を受けても、深麗はまだ傲岸な態度な態度を崩さず、顎でしゃくって去るよう接輿に促す。

「いやいや、そうもまいりません。せっかくお会いできたのだから、一つお手合わせ願いましょうか」

言いながら接輿はゆったりとした動きで、両手を前に突き出した。

「それにここで帰ったら、私はお飯の食い上げですからねえ。何か、土産が欲しくなります」

みしりと、接輿の手が歪む。正確には掌の周囲の空間に、何か得体の知れないものが蟠ってゆく。

そこから間を置かず、いよいよ形を為すところまで、凝り固まった。

「天禄（てんろく）、辟邪（へきじゃ）」

符も何も用いず、接輿の掌から二匹の龍がずるりと転び出る。二匹とも、額に特徴的な角を有している。

一匹は一本。もう一匹は二本。荒々しくうねくる角が突き立っている。その他、所々に鬣や羽を靡かせるその様は、むしろ西洋のグリフォンやスフィンクスを髣髴とさせる。

顔もまた獅子のようにごつごつと纏まっており、牙がごろりと口元から零れ出ている。それがさらにいきって歯を剥くと、黄ばんだ鋭い歯並びがずらりと見受けられる。

大蛇の白と、天禄・辟邪は、既に威嚇の応酬を始めていた。

## 狂悖蛇：三

甲高い擦過音を上げる白と、正に獅子の如く低まった吠声を上げる天禄と辟邪は、主人の許しを今か今かと待ち受けている。

二人は音もなく、その手を自身の龍へと差し向ける。堰を切ったように、三匹の龍は獰猛の限りをぶちまけた。

顎の骨を外し、ばっくりと開いた白の口が天禄の体を捕らえる一方、辟邪の牙が白の体に突き立てられる。

「シィィィィ！」

白は器用に体を折り畳み、自分の体に噛み付いた辟邪の体を、さらに包み込んで締め上げる。

辟邪も天禄も、喉の奥で稲妻のような音を立てながら、白の攻撃に耐えている。しかしその雷音は、すぐにその調子を変えてゆく。

天禄の一本角と辟邪の二本角が、ばちばちと爆ぜる。火花が空気を急激に膨張させ、小さく爆裂させているのだ。

「ゴガアアア！」

二匹は同時に咆哮し、白く爆ぜる角を白の体に押し当てた。瞬間、角に宿っていた力が、根こそぎ白の体に流れ込む。

「ギギャアア！」

発声器官などないはずの蛇が、絶叫を上げてのたうちまわる。強烈な電撃が体中を駆け巡り、肉と言う肉を焼き尽くそうとしていた。

堪らず、白は咥えていた天禄を吐き出し、締め上げていた辟邪を地面に叩きつけた。

鞠のように跳ねる辟邪が、肩から生えた小さな翼を広げて舞い上がる。一方、天禄はまたも角から電撃を放ち、白の体を打ち叩く。

その間に辟邪は、白の後方に控えていた深麗へ一直線に降下する。

豢竜氏同士の戦いは、主に互いの龍で行われるが、その龍を司っている豢竜氏を倒せば、迅速に勝負をつけることが出来る。

龍はそれぞれが人智を超えた力を持つ以上、尋常に組み合えば往々にして拮抗し、勝負は膠着の体を為す。
そこで楔となるのが、所詮は人の身に過ぎない豢竜氏の存在である。龍に指示を出し、操って戦わせている豢竜氏が消失すれば、龍は戦う意味を失い、自ずから無駄な戦いをやめてしまうのが常である。
なるほど二匹を一度に使役するのは、そうした狙いがあったのか。深麗は目の前に龍が迫るなか、冷静に接輿の戦略を分析していた。
通常、豢竜氏一人に龍一匹が基本だが、人によっては二匹三匹と増やすことも可能である。しかし一匹でさえも使役するのに長年の修行が伴うのだから、数が倍になればその辛苦も倍加するのは道理である。
しかしそれを成功させれば、こうした戦いにおいて多大な優位を得ることもまた当然である。こうして一方が相手の龍を抑え、その間にもう一方が豢竜氏を仕留めることが可能となるのだから。
獅子のように大きな口が開かれても、まだ深麗は何らかの反応を示さない。
接輿はこの二匹を使うくらいで、功が成ったと思い上がっているのだろうか。しかしこの程度は劉家正統の豢竜氏である深麗にしてみれば、取るに足らない余技に過ぎなかった。
そのとき、辟邪と深麗を分かつように、白い尖塔が突然現れた。驚きに吼えながら、辟邪は羽ばたいてそれを避ける。しかし尖塔は意思を持つような素早さでそれを追い、上から強かに叩きつけた。
白の長い体は、頭で天禄を相手にしながら、尾で辟邪を打ち落としていた。長い体を持つ蛇ならではの芸当である。二匹三匹と増やすまでもなく、龍は一匹いれば事足りる。接輿のような手妻はあくまで邪流、亜流のものでしかない。
「この程度で功が成ったと、まさかお思いではないですよね？」
さも嘲るような笑いを頬に走らせ、深麗が挑発する。気高き職能

である豢竜を落としてめた輩を圧倒し、溜飲を下げつつあるようだ。
「功も何も、私は途中で降りた身です。今更、何にも成れませんよ」
接輿は自らを嘲るように顔を引きつらせて答える。そしてごく軽やかな所作で、彼はするりと前に踏み出した。
「な！？」
深麗が驚くのも無理はない。接輿が踏み込んだそこは、既に白の間合いの内である。龍の攻撃範囲に、何も持たない人間が踏み込むなど、自殺行為である。そもそも接輿はもぐりとはいえ、一応は豢竜氏である。龍の強さ怖さを良く知る身でありながらそのような行いに出るなどと、正気の沙汰とは思えない。
「舐めるな、似非！」
果断の指示を手掌で送り、白はすぐさま尾を振り上げて接輿が居る辺りを根こそぎ薙ぎ払う。そこら中に転がる男達を襲った一撃よりも、
今度のは、近くにいる天禄さえも押し潰さんとする一撃である。
そんな迫り来る尾を足場に、接輿は天地を逆にして白の頭上を跳び越した。

深麗と共に、草葉で見守っていた可解斗もまた驚いてしまう。先程の接輿が行った技は、七流の歩法、龍伝と酷似していた。龍の体を足場に見立て、その長い体を伝って間合いを殺す基本的な技術である。
自分以外に、そして七流以外にも、このような技術が存在していた。共感と驚愕を同時に覚え、可解斗は思わず感極まった瞳で接輿を見つめる。
もしかすればあの接輿は、七流を知っているのかもしれない。自分の父である征竜と親交が深かったというのだから、何らかの形で七流と関わっているのかもしれない。
（だとすれば、残りの流れも知っているかもしれない……）
七流という技術体系は、残念ながら完成を見ていない。所詮は征

竜一人の我流に過ぎない以上、それは仕方のないことだろう。父から受け継いだ可解斗としては、何としても残りの流れを完成させてやるのだという決意を秘めていた。
無論、日本に居たころはただ胸の奥に仕舞っていたのだが、ここにきてその決意は現実味を帯び始め、真剣に技の開発を行おうとしていた。
既に決められているている一から七までの流れだが、その全てが完成を見ているわけではない。しかし、父の作った流れをさらに昇華し、流れの残りれを形作ろうとするたび、自分ひとりの力不足を痛感していた。
残りを作る助けとなるのなら、例え敵であろうと関係ないとさえ思っていた。

可解斗が煩悶としている間に、接輿は白の後方に降り立ち、深麗と正対していた。そこから間を置かず、またもぬるりとした動きで近づいていく。
自分の主人に襲い掛かる輩を、白が身をくねらせて頭から飲み込みに掛かる。
「吻ッ！」
鋭く呼気を吐き、それを前に踏み出して避けると、接輿は振り向くこともせず、後ろに向かって肘を突き出した。
重苦しい震脚が弾け、接輿の踏みしめた地面がべこりと凹む。
太極拳で言うところの『後掛肘』で脳天を的確に痛打され、白がぐらりとよろめいた。その隙を見逃すはずも無く、天禄と辟邪が白の体に飛び掛り、地面に縫い付けるようにして押し倒した。
その光景を一部始終見ていた深麗の顔が、如実に青ざめていく。
「す、素手で……」
かろうじてそれだけ搾り出し、口を戦慄かせる。そ相変わらず柔和な表情を崩さない接輿は、さらに酷薄の程を高めた笑みを張り付かせる。

「まさか。拳法と仙術の合わせ技です。拙い手管でお恥ずかしい」
接輿が肩を竦めておどけてみせるが、その力の抜けようがなおさら危ういものを感じさせる。
「では、失礼して……」
接輿が無造作に掌を伸ばす。先程の勢いはどこへやら、深麗は気の毒なほど身を震わせており、歯の根も合わない様子である。
「深麗さん！」
さすがの可解斗も辛抱堪らず、ようやく草葉から飛び出した。

駆けつけざまに飛び蹴りを接輿にかますが、それはやはり彼の柔らかな所作で外されてしまう。別段、ここで当てる意図はない。今は接輿をこの場からどかし、間に割り込むことが肝要だ。
二つのを掌を相手に向ける陰の流れを取り、接輿の前に立ちはだかる。立ち捕りを主眼とした、守りの流れである。
再びの闖入者の登場に、接輿はふわりと軽く身を退けた。しかし、その柔らかな物腰は、可解斗の姿を見た途端に消し飛んでいった。
その顔を、服装を、体格を、嘗め回すように観察する。その間、目は皿のように剥かれていた。
接輿の明らかな動揺は、対面している可解斗にも伝わっていた。何が起きているのか把握できず、可解斗もまた怪訝そうな顔で接輿を見つめている。
「ぜ、征竜……。いや、そんなはずは……」
一人語りのように、接輿が呟いた。一目見て可解斗に征竜の面影を見て取ったのであろう接輿は、もはや顔だけでなく、体から発する気配まで硬質化させてゆく。
「この人は、征竜さまの子ですよ」
深麗が拙い口で余計なことを言うと、接輿が唸りを上げた。
「征竜のやつ、子を設けたのか！？　それが、お前だと」
鋭く刺すような視線を受けて、可解斗はこくりと首肯する。何故だかそのとき、声を出して肯定するのは憚られた。

口に出すか出さないかの僅かな隙に、目の前の男がどのような行動に出るのか、まるで予想がつかないのが恐ろしかった。

何か、目には見えないものに、接輿は追い詰められている。それだけが、可解斗の分かることだった。そして追い詰められた圧力が向けられるのは、恐らく自分であるだろうことも、可解斗は自覚していた。

「名は、名は何と言うんだ！」

恫喝する勢いで、接輿は可解斗に名を尋ねた。

「石竜、可解斗と言います」

「その名、日本人のもの？　あいつ、日本に渡ったのか？」

「はい。母は日本人です」

「そうか。そうか……」

先ほどから全く瞼を動かさず、眼を見開いたまま接輿が頷く。その顔には、やはり危ういものが宿ってきている。

「奴は、元気か？」

力みすぎている口が、震えながら言葉を紡ぐ。

「五年前、死にました」

他に上手い言い様が思いつかず、可解斗はそのままを伝えた。

接輿の顔から、すとんと表情が転げ落ちる。先程の深麗と同じように、音を立てて血の気が引いてゆくのが傍目にも分かってしまう。

深麗の言うとおりなら、接輿は友の死を告げられたことになる。なるほど動揺を呈するのも仕方のないことだ。

しかしそれにしては、態度に余りにも納得のいかない部分が多すぎる。友の子を歓迎するわけでも、その死を告げられて悲しむでもない。それでも自分の内側から何かが湧き上がっているのだろう。もはやその内圧が許容を越え、今にも弾けて飛び散りそうである。

「死んだ？　死んだのか？　あいつが、死んだのか？」

嘲るが如く、一人ぽつぽつと呟いている。接輿の細い切れ長の眼は、位置こそ可解斗に向けられているものの、すでに可解斗のこと

を見てはいない。ただ自分のみにだけ、その焦点が合わされている。
どうやら接輿は、自分のことを見つめているらしい。自分のなかにある記憶の水底を攫い、そこから何かを取り出すのに夢中なようだ。
「それは、それは駄目だ。嘘だ。やっぱりあの時、やっておけばよかったんだな。なあ、征竜」
薄ら寒い一人語りが、ようやく可解斗に向けられる。まるで底無しの深遠に、ひたすら自分の思いの丈を投げ込むような、そんな狂おしいものを感じさせる。

## 狂悖蛇：四

中空を掻くように拡げられた五指に、何やら紫電らしきものがまとわりついていた。それを弾けるように握り潰し、右手を腰、左手を肩口から真っ直ぐに出され、剣呑な様子で向けられる。

それが接輿の構えなのだろう。例え自失の体を為していても、拳を向けるのに問題はないらしい。

可解斗は威圧に強張りそうな体を必死に和らげ、戦慄く口で導竜法の呼吸を繰り返す。陰の流れは、陽や火の流れに共通する激しさがない反面、ゆるりとした動きを旨とする。そのため体が強張れば強張るほど、技の運用が拙いものになってしまう。

腹の底に凝り始めた熱を必死に回し、練り上げ、体中に拡げていく。そんな練気の作業中、接輿がいきなり飛び込んできた。

崩拳による右中段突き。迷いなく、容赦なく、大きく踏み込んで深く突き出す。

可解斗は怯えつつも、流れに沿って動き出す。

右の崩拳を、左掌が内側から掬い上げつつ、こちらも一歩前に出る。脇下を潜り抜けながら、右腕の逆を捕ってぐるりと巻き込んだ。

「うおあ！」

つんのめった接輿だったが、残った左腕を先に地面につけると、前転して右腕を解きながら体位を入れ替え、再び可解斗に向き直る。

その見事な様に、可解斗は驚愕する。無論、接輿の体捌きも見事なのだが、自分が行った技――竜車の極まり様が、今までに無い手応えを有していた。

やはり中国に来てから、自分の中の何かが変わっている。これまで適当に運用できなかった七流が、ほぼ理想通りの形で発揮することが出来ている。不可解だが、今はそれがありがたい。今度は可解斗の方から、接輿の右へと回り込んで間を詰める。

そして臍の前に置いておいた右手を振るい、鞭のように相手の喉を狙い打つ。そのすらりと伸びた当身が、接輿の髪を鋭く弾いた。
当身を外し、接輿が右肘を振り上げて強く前に出る。いわゆる八極拳の外門頂肘の形だ。しっかりと重い震脚を響かせ、至近距離で行うには余りに大きい踏み込みを敢行する。
可解斗の体が、接輿に押されてズレた。しかし、骨を砕く打撃音は響かない。突き出された右肘を両手で押さえ、寸でのところで胸郭に達するのを防いでいた。
そのまま右腕を捕獲した可解斗は、接輿の右腕を後ろに押し込み、後ろに回した左手で襟を捕り、真下に引き込んで落とす。さらに左足が、接輿の脹脛を蹴り飛ばしていた。
ばしんと空気の弾ける音を立てて、接輿が真後ろに倒れこむ。しかし事前に首の後ろへ手を回して受身を取っていたので、致命の一撃とはなり得なかった。
（よしッ！）
とどめとはいかなかったが、改心の技の手応えに、可解斗は戦いの最中に打ち震える。そんな投げを無駄にしないため、倒れ伏せる接輿の顔目掛けて拳を振りかぶった。

接輿の顔面を押し潰すはずだった拳が、ふらりと空を切る。むしろ可解斗の顔が跳ね上がっていた。
下から突き上げた接輿の足先が、的確に可解斗の顔面を捉えていた。
あんな雑な打ち方をすれば、迎え撃たれるのは当然である。改心の技に酔い、詰めを甘くした可解斗の自業だ。
ここで功を焦ってはいけない。再び間合いを取って陰の流れに戻し、ゆっくりと呼吸を整える。ここまでの攻防、可解斗が一撃を食らっているものの、ほぼ互角と評してもよいものだった。
これは日本にいた頃の可解斗では、全く考えられない事態である。本来なら最初の崩拳が腹に刺さり、息苦しさに気を遠くさせている

はずであった。
可解斗の修めている七流は、あくまで龍を相手取るために編み出された技術である。これまでは可解斗自身も、それに関して懐疑的であった。しかしそれも、先だっての把式において完全に払拭された。
七流ならば龍に勝てる。きちんと七流の技で龍を倒すことが出来たことで、可解斗はその確信を一層に深めていた。
確信が自信を呼び、なおのこと心を充実させる。身体の過不足ない状態であるほど、技もさらに発揮されると言うものだ。
それは対人間においても、当てはまるのか。これまで人を相手にして勝ったことのなかった可解斗だが、それが今、覆りつつある。
滾りと共に喜ばしいものが体に満ちて、うずうずと体を揺すってくる。敵対している男――接輿の力量が只ならぬだけに、それを圧倒した時の欣快は、恐らく可解斗が味わったことのないものとなるだろう。
「お前のそれ、征竜に習ったのか？」
目線を外さないまま、小さく頷く。それで接輿には十分だったのか、かあっと熱い息を吐いて唸る。
「そうか。あいつ、それを残したのか」
訳知り顔で頷づくのを、可解斗は複雑な面持ちで聞いていた。自分以外の人間が、父のことをあたかも知っているように話すのを見ているのは、決して気持ちの良いものではなかった。

「退いて下さい。殺す気はありません。父の友人なら、なおさらです」
確か深麗も似たようなことを言っていたのを思い出し、可解斗もとりあえず真似てみることにした。
心にも思っていないことを、恥ずかしげもなくのたまう。本当に退くのなら追いはしないが、退いてくれるなと可解斗は願っている。七流の技を活かし、人を倒す光景が、既に彼の脳裏には描き終わっ

ている。その機会が目の前にやって来ているのに、どうしてそれを振り払えようか。
これまで幾度も夢に見てきたのだ。自分が七流の技を使い、迫り来る敵を散らす様を。
「心配するな、征竜の息子。俺も、お前を逃がす気はない」
可解斗の中身を見透かしたように、接輿が意地汚い笑みを浮かべていた。
それを惜しげもなく、可解斗が向けてくる。まるでそのまま顔の皮が破れ、中身が飛び出してしまいそうな気味の悪さである。
滾っているはずの可解斗の背に、怖気が走り抜ける。何か自分が、致命的な間違いをしているという脆く危うい気配が、足元から迫ってくる。
それを上書きするように、しっかと地を踏みしめて足の感覚を確かめる。導竜法の呼吸を崩さず、背を正して向き合う。
白を倒し終えた天禄と辟邪は、四足で身を立てて可解斗に吼え上げた。地鳴りのような轟音が、ずしりと揺さぶる。その声も獅子のように低く重苦しい。
立ち昇る震えが、腹の底――丹田に凝り固まっていく。二匹の龍から発せられる熱い気が吸い上げられ、ごうごうと速度を上げて旋回し、その質を高めていく。
あの把式で味わった滾りと同等の練気が、とうとう完成する。その滾りを飲み込んで、体の中に押し留めて力に変える。
導竜法の呼吸を繰り返すうちに、背を這っていた怖気はどこかへ立ち消えていた。
接輿が手掌で示すまでも無く、二匹の龍が可解斗に飛び掛る。左右から同じ機を狙ってきたそれが、太い前足と大きな口を誇示するように振り上げた。
一本角の前足に触れた瞬間、体位を入れ替えながらそれを振り下ろし、牙を外された二本角の頭の上に叩き落した。
「グガアアア」

一本角が低く呻いている。その右前足が、在り得ない角度にしんなりと曲がっている。振り下ろされた右前足を受けた瞬間、可解斗は即座に足首を捻り上げ、関節を外していた。
「せいッ！」
その折れた前足めがけて、可解斗は高い角度から振り下ろすように左足で蹴り込んだ。
獅子顔の龍が呻く。その浮ついた顎に、返す刀の右足先が真下から突き上げる。血が糸を引いて吹き出し、牙に噛み切られた長い舌が、べろりとだらしなく伸ばされる。
仰け反る天禄が、柔い腹を晒す。勿論、喉までも可解斗に向けられる。

引かれる右足と入れ違いに、可解斗が右の貫手を突き刺す。その指の半ばまで、深く沈みこんでいた。
「おおあッ！」
もう呻くことも出来ない天禄に代わり、可解斗が吼える。
貫手が引き抜かれた逆鱗を、すかさず左の正拳が刺さる。そのまま拳を殆ど引かず、右の肘を胸に突き出し、今度は左の下段逆突きを、腹を折らんばかりにめり込ませた。
その一つ一つが、龍である天禄の体を大きく揺さぶる。腹部への突きで完全に浮き上がった天禄の逆鱗を、七流の後ろ回し蹴りである臥竜尾が強かに押し込む。
吹き飛んだ天禄が大木に打ち付けられ、刺さった角に釣られる。まるでアンコウの吊るしのように、喉から迸る血が生々しい。
相手が龍である以上、急所である逆鱗を打撃するのは当然であり、その機会を得たならば、根限りを詰め込んで戦闘不能になるまで追い詰めるのもまた必然である。
豢竜氏として龍を敬う心が芽生えたとて、その理は可解斗の中では絶対であった。

## 狂悖蛇：五

「グワア！」

今さら声を張り上げて、背後から辟邪が襲い掛かる。

身を屈めて前転し、辟邪が可解斗の体の上を通り過ぎる寸前、彼の足がすらりと天に向かって伸びる。

その時点で辟邪の頭が跳ね上がり、斜め上に吹き飛んで幹へと体を激突させた。

絶好の機を、可解斗は見逃さない。半ば脅迫観念となっている衝動が、ずり落ちてくる辟邪の体を捉えろと攻め立てる。

高く飛び上がり様に膝を叩き込み、両手で二本角をしっかと握り締めていた。そうして可解斗は、辟邪と共に重力に身を任せて落ちてゆく。

可解斗は殆ど体勢を変えず、そのまま背中から落下した。

彼の抱えられた辟邪の首が、珍妙に捻じくれていた。

七流、二の流れ、陰の技、転角。龍の角を保持したまま落下し、それを支点にして頚椎を破壊する。

さしもの龍も首を折られるのは堪えたらしく、口に収まらない舌をどろりと垂らしながら沈黙していた。

それでもまだ生存反応を見て取った可解斗は、完全に止めを刺すべく、両足で辟邪の首を固定したまま角を引っ張って、さらに首を旋転させる。

丈夫な肉の中にある骨がずれ、みちみちと筋が千切れていく感覚は、龍の絶命が近いことを如実に教えてくれる。

殺せる。龍を殺せる。七流は龍の制圧を目的とした術理だ。完全な制圧とは、一切の攻撃手段と機会を奪うことに他ならない。

つまり対象の死亡を以って七流は、行使の完成を見る。

胸筋が悲鳴を上げ、腕の内側が熱を帯びる。さすがに真っ向から

捻じ切って破壊するには、龍の骨肉は頑丈すぎる。最後の一捻りの前で、可解斗の筋肉が過剰な酷使に悲鳴を上げ始める。
「死んじまいなあ！」
掛け声と共に、一気に体を捻った。

その時。可解斗の首に、ぬるりと嫌な感触が走る。それに驚いている暇もあればこそ、脳への血流が瞬く間に滞っていき、自分の頭から血の気が失せていくのが手に取るように分かる。
「ぬ、ぐ、があ……」
あと一捻り、あと少しで、龍を殺せる。その甘い確信に誘われて、可解斗はあろうことか首に巻きついた腕を振り払おうか、それとも辟邪の首を破壊するか迷ってしまった。
時間にして一秒もなかった。しかしそれは最早、致命的な時間を敵に与えてしまい、もう取り返しようがないほど自分の意識を遠のかせる助けとなった。
程なく、二匹の龍と同じように、可解斗はその身を地面に投げ出すこととなった。
「龍に囚われ過ぎだ。とはいえ、この程度では人相手に分が悪いか。なあ、征竜」
既に遠い世界へと旅立っている可解斗に、接輿は恍惚とした様子で語りかける。やはりそれは、受け答えを期待しない一人語りに近いものであった。
「可解斗さんから離れなさい！」
今まで事を静観していた深麗が、脅す目つきで接輿を睨みつける。
「まだ、おやりになりますか？」
再び柔和で慇懃な雰囲気を取り戻した接輿が、わざとらしく肩を竦めた。
深麗の後ろで、むくりと何かが起き上がった。その巨大な影は、本来は白磁のように透き通っていた体を血みずくに汚し、凄絶な様で接輿を見下ろしていた。

「やはり蛇はしぶといですなあ。今のままでは、殺しきれん」
片方の頬だけ釣り上げて、歪に笑う。その間に、後ろ手を履物のポケットに突っ込み、数枚の符を取り出した。
「逃げるのは、止めないのでしょう？」
「同じ豢竜氏のよしみです。しかし、次はありません」
深麗の言い様に、接輿が肩を揺らしておどける。
「変わらないな。こんな小さな子にまで、そういうのを仕込む。豢竜氏ってのは、変わらないよ」
非難めいたものを感じつつも、深麗は硬い表情を崩さなかった。
「失せろ！」
手掌が振り上げられると同時に、白の尾が接輿に向かって叩きつけられた。命中した部分の地面がざっくりと抉れるが、そこには既に接輿の姿はない。
恐らくは遁甲の術を使ったのだろう。丁寧に龍どもも回収され、池の畔は再び静寂を取り戻した。

完全に気配が無くなったことを確認すると、深麗はその場に膝を突いて蹲った。心配そうに覗き込んでくる白の頭を撫でると、その頭頂にはまだ痛々しい凹みが見られる。
接輿の『後掛肘』が付けた傷だろう。天禄や辟邪が刻んだ爪痕や噛み痕は消えかけているのに、これは未だ治癒の半ばである。
再生を司る蛇は、種類によっては他の龍をも上回る生命力を発揮する。特に白は治癒に優れ、外傷内傷を問わずに回復してしまうため、あれだけの攻勢を受けようとも、再び立ち上がることが出来る。
その白が治すのに手間取る傷を、人間が刻んだ。その事実に、深麗は今更ながらぶるりと身を震わせた。
今は可解斗の身も心配である。何とか立ち上がって彼の近くまでたどり着くと、その頭を抱えて顔を覗き込んだ。
幸い呼吸は正常である。首を絞められて失神しただけに過ぎないようだ。

「可解斗さん、可解斗さん」
優しく顔を叩くと、可解斗の目の焦点がゆっくりと深麗を捉え始める。
意識がはっきりするにつれ、可解斗の顔が青ざめていった。
「可解斗さん、どこか具合が悪いのですか？」
「い、いや。だ、大丈夫です。もう大丈夫ですから」
よろめきながらも深麗の膝枕から頭を上げる。木にしがみついて立ち上がる様は、お世辞にも大丈夫とは言い難い。裸締め以外には殆ど可解斗は攻撃を食らっていないので、それは単なる身体的損耗から来るものではない。
それは単に、彼の矮小な心根の為せる業であった。

女性の膝枕など体験したことのない可解斗にとって、それはかなり刺激の強いものだったらしく、先程の戦闘から離れて一気に緩んだ心を直撃していた。
顔を赤らめるどころか、むしろ青ざめるほど驚き、気恥ずかしさを隠すように深麗から離れる。
こうして終ってみると、目の前の惨劇が途端に生々しく映る。
こみ上げる吐き気を頑として受け付けず、口腔に広がったそれを力づくで飲み干した。
地獄など、見る覚悟は出来た。出来てしまった。豢竜氏として生きることを決めた可解斗は、畔を埋め尽くす死体を真っ向から見据えた。
いよいよもって後には引き下がれないのだと、自分とは何の縁もゆかりもない骸たちが言っているように思えた。

龍の巣から戻った二人は、すぐにそこで起きた件を天袁に伝えた。
天袁の個室は、可解斗の部屋以上に龍の美術品に満たされている。ならば可解斗の部屋の趣味は、やはり天袁のものなのだろう。

「接輿に、会ったか」
報告を受けた天袁は、しかし殊更慌てふためいたり、怒鳴り散らしたりすることなく、平静な態度で反芻した。
「どうだった？　奴は」
「強いです。今のままでは、敵いません」
何の衒いも無く、可解斗は宣言した。七流の最強を信仰している彼と言えど、それは他の全てを軽んじているということではない。七流に匹敵する素晴らしき術理、そして実力には、尊敬の念を送って止まない。
「あれと、征竜には、悪いことをした」
天袁は訥々と、ゆっくり語り始めた。
「可解斗は知らんだろうが、豢竜氏には色々と禁忌があってのう。あやつは、それを破りおった。征竜と共に」
「禁忌、というのは？」
「反剋というのを、知っておるか？」
「相剋の反対、ということですか？」
「おう、それよ。それを進めるとな、良からぬことが起こる」
「良からぬこと？」
「世界の理が、逆しまとなるのだ。水の流れも、人の営みも、空も地も、全てが摂理を逆にしてしまう――」
天袁は慈しむように、傍にあった龍の木像を撫でながら言った。
「そして時は、未来から過去へと流れる。あやつらはそれを用い、龍を呼び戻そうとしたのだ。過去の時代から、強大なる龍を」
「そんなことが可能なのですか？」
可解斗が聞くと、天袁は大きく首を横に振った。
「無理であろうよ。時を逆さに流すほどの反剋は、容易には生み出せぬ。結局、あやつらの思惑は半端に終わった」
そこまで言って、天袁は像を撫でる手を止めて、何かを押し込めるように強く瞼を閉じた。それに押し出されてか、重く長い息が口から漏れ出てくる。

「しかし、責を取ることは、必要なのだ」
だから縁を切った。天袁はそう付け加えた。
「それは、悪いことなのですか？」
可解斗の質問に、深麗は顔を覗き込むほど驚いてみせた。天袁もまた目を瞬かせている。しかし可解斗には、まだ判然としなかった。家を追われ、勘当されることと、その禁忌とがうまく結びつかなかったのだ。
「時の流れに、人が無闇に干渉するのを、良からぬということなのじゃろう。実際、それで何が起こるのか、我々には計り知れぬ」
天袁は可解斗を責めるようなことはせず、静かに言い含める口調で教えてくれる。
「それでも、そこに可能性があるのなら、試してみたくもなろうものよ。それもまた、人の摂理か」
一概に誤りだと決め付けるのは、よろしくない。だが――。
「間違えずとも、汲み取れぬものというのは、どうしても出てくる。わしに限ってそれが、自分の息子だったということだ」
天袁は肩を落として弛緩し、感慨深げに言った。その様を見て、可解斗は安心した。
自分の父が禁忌を犯したと聞かされていたので、どんな悪いことをしたのだろうと兢々としていたのだが、それがあまりたいした事ではないらしかった。あくまで可解斗個人の価値観だが、より陰惨で鬼畜外道なことを想像していた彼にとって、それは安心だった。
しかも、祖父である天袁がそれを悼んでくれていることが、純粋に嬉しかった。縁を切る判断を下したのは、恐らく寨主である天袁なのだろう。だからこそ、その天袁本人が痛み苦しんできたのだろうということを、可解斗の心は肯定的に受け入れた。

そこでふと、可解斗に思いつくことがあった。
「僕は、父の代わり、なのですね」

「可解斗さん！？」
今度こそ深麗は可解斗にきつい視線を寄越し、何を言い出すのかと責めるような口調を取った。それでも可解斗は、確かめたかった。天袁が可解斗を呼んだ本当の理由。孫である自分には、それを知る権利と義務があるはずだ。
天袁の細い目が、さらに細まる。きゅうっと横に長い目は、一体何を見ているのか。可解斗には窺い知れない。
「罪滅ぼしには、ならぬだろう。せめてわしが死ぬ前に、あ奴の面影でも感じておきたかった」
可解斗の横にいる深麗が、息を呑むのが聞こえた。この告白は、彼女でも知らないことだったらしい。
「女々しかろう。老骨が何をと、可笑しかろう」
可解斗は同意も、拒絶もしなかった。そのどちらかを示せるほど、彼はまだ強くはなかった。

しかし、ただ黙ってはいられなかった。例えうわっすべりで取り繕いにしかならなくても、祖父に対する不遜な同情だとしても――。
「僕も、女々しいです。それを、ありがたいと思っていますから」
くくっと、天袁の口から乾いた笑いが漏れる。しかし顔は如何にも好々爺としており、緩んだ眼が可解斗の顔を具に観察している。
今なら、その視線の意味が可解斗にも分かった。正に今、天袁は面影を感じているのだ。自分の顔に、雰囲気に、父である征竜の面影を感じ取っているのだ。
「正しく、征竜の子よな」
天袁がそうっと、可解斗の頭に手を伸ばす。しわくちゃの手が髪の中に潜り、強く押しながら撫でてくれる。
いつか自分も、こんな風に人を撫でられるだろうか。こんなに心地よく、人の頭に手を載せられるだろうか。
きっと出来るだろうと、可解斗は思った。彼もまた、天袁の中に面影を感じ取っていた。

## 苛虐竜：一

可解斗が中国に来てから、三ヶ月が経過した。すっかり中国語の聞き取りにも慣れ、日常会話は問題なくこなせるだけに成長した。

宛がわれた寮の部屋にも慣れて、連子窓から入り込む日差しを受けて、可解斗はくすぐったそうに顔をこすると、すぐに起き上がった。

寝巻きから着替え、外の井戸から冷水を汲んで顔を洗うと、もう眠気は吹き飛んでしまう。あとは勉強の準備として教科書などをかばんに詰めて、学舎へと向かう。

まだ日が昇って間もないが、既に幾人かの生徒が学舎を歩いている。その中の一つの講堂に、可解斗は余裕を持って入室した。

講堂に並べられた机に座ると、可解斗はノートを開いて授業の始まりを待っていた。

劉家豢竜氏の学舎では、こうした座学も取り入れている。本来は一人の師匠に数人の弟子という体制で教えを請うのが伝統だが、それでは対処しきれないほどに、毎年多くの人間が劉家の豢竜氏に憧れて門扉を叩いてくる。

無論、全て受け入れるわけではない。適性を計る試験を通った者のみが、晴れて豢竜氏となるべく修行を受ける。

毎年二十人から五十人もの人間が入り、数人の豢竜氏がそれぞれ受け持つこととなる。方術、仙術、遁甲術、道術などの中で、特に龍を従え、龍と共に戦うために必要なものだけを選出して学ぶ。

昔は豢竜氏と言えば、あらゆる呪法魔術に精通し、その技術を以って神代の獣である龍を操り、他の術師からの羨望と畏怖の念を恣にした職能である。方士祓士の類は数いれど、真に豢竜の技を極めた者には敵わないと言うのが常であった。

しかし、時を経るに連れて豢竜氏はその活躍の場を失くし、衰退

の一途を辿っていた。その中で幾つもの流派が途絶え、豢竜の技を伝える術が次第に失われている。今に伝わる豢竜の技は、かつての栄華の残照にすぎない。

劉家の修行を受けた可解斗は、そのように豢竜氏の歴史を学んでいた。

最初こそ、まるで日本の学校と変わらぬ体制の整いぶりに、何だか肩透かしを食らったように思っていた可解斗であった。

魔術呪術を駆使して龍を操る。そんな幻想とはうら遠い世界に生きていた可解斗にとって、それは何とも心をくすぐる言葉だった。なのでそれを学ぶには、それに適して古めかしくて妖しく、神秘的な環境で行われるのだと手前勝手に信奉していたのだ。

しかしいざ浸ってみれば、慣れてしまうのは早かった。別段、学校が好きではなかった可解斗だが、そうして整頓された形の中に自分を納めるというのは、安堵を伴っている。

管理されることに喜びを感じるのは、むしろ怠惰な性情が自分の中にあるからかもしれない。

授業が間近に迫ると、生徒たちが急いで席に群がる。すぐに教室の席は埋まり、皆はしんと静まって、講師の到着を待つ。

間もなく講師を務める豢竜氏が教室に入ると、皆が一斉に立ち上がり、

「おはようございます！」

と、威勢の良い声で言った。

「はい。おはよう。今日は遁甲をやるぞ。教科書開け」

皆がぞろぞろと座るなか、可解斗は急いで座り込み、黒板に喰らいつくような眼差しを向けていた。

席も早めに来たことで一番前を取っており、傍目からは正に優等生のそれである。

しかしそれは、単なる見た目だけのことだった。

劉家の修行を受けられるようになった可解斗だったが、その成果

は燦々たるものだった。
龍の生態や豢竜の歴史などについての授業ならば、まだ何とかなる。しかしそれが方術や仙術など、いわゆる呪術の部類に関するものとなると、可解斗は何の成果も得ることが出来なかった。

今までそのような魔法染みたことなど触れた試しがない可解斗は、自分がいきなり火を吹いたり、空を飛んだり、姿を消したりすることが全く信じられずにいた。
その意識が術の習得を阻害しているのだが、これまで培った常識や観念と言うのは容易に振り払えない。これは大なり小なり、中途で豢竜氏を目指して入劉家する者が直面する問題らしい。しかし既に方術などを習得している彼らに比べると、可解斗の問題は輪をかけて深刻である。
「先生、もう少しゆっくりと教えてもらえませんか？」
可解斗は勇気の限りを振り絞って挙手し、目の前の講師に進言する。
多少ヒアリングが進歩したとはいえ、書き取りと合わせて行うとなると頭の理解が追いつかない。ならば理解を促すため、授業の速度を落としてもらうのは、仕方の無い処置だろう。
他の生徒は皆中国人であり、授業を受けるのに何の弊害も無い中、自分が足を引っ張ってしまうのは気が引けるものの、可解斗の豢竜氏としてきちんと身を立てたいと思い定めているので、背に腹は変えられない。
しかし講師は流暢な中国語を少しも緩めず、投げつけるように乱雑な語り口で授業を進めていく。
「あの、先生……」
さらに可解斗が言い募るが、もはや自分のほうに注意さえ向けてくれないことを確信すると、語尾を弱めながら俯くほかなかった。
そんな可解斗の様を見ていた生徒達が、これ見よがしに笑っている。授業を妨げぬように抑えてはいるが、それはしっかりと可解斗の耳

に届いていた。
このようなやり取りは、可解斗にとって初めてではない。
劉家での授業を受け始めたときから、何とか理解しようと必死に喰らいついていた。最初のうちはそんな可解斗の熱意を買ってくれる講師も少なからずいたが、まるで向上の余地を見せない可解斗よりも、伸び代のある生徒のほうが教えがいがあると考えたらしく、そうなってから可解斗は単なる無視の対象でしかなくなった。
他の生徒も同じく、こうした場面で冷ややかに笑う以外、可解斗のことなど関心に無いようであった。
こういう扱いもまた、初めてではない。ここに来る前までに通っていた学校でも、可解斗は似たような状況を味わっていた。
父親から教わった七流を身に付け、それを活かす場を探すことくらいにしか興味を抱かなかった可解斗は、勿論のこと学校生活に対して熱意を注ぐことが出来なかった。そこで行われる授業も、部活動も、七流には何ら関わってこない余計なものにしか思えなくて、やってもいないのに色褪せた見方しか出来なくなっていた。
そんな無気力を地で行く人間が他人に歩み寄ろうとするはずもなく、また他人が寄り付いてくるはずもなかった。
しかし、それでも学校は日本だったので、言葉は問題なく通じたし、教師は生徒に対して平等に接してくれていた。しかしここにいる講師は、本来は豢竜氏として活躍している人達である。教育者的態度を求めること自体が間違いだった。

「石竜さん、ちょっと来てくれませんか？」
午前の授業が終わり、食堂で昼食を取っていると、可解斗よりも背の低い少年が、にたにたと笑いながら慇懃な言葉使いで話し掛けてきた。
中国に来てからこれまで、深麗ぐらいとしか話したことのなかった可解斗は、どのように振舞ったらいいのか分からず、その繊細な

神経に従ってとりあえずのこのこと着いていくことにした。
果たして何用なのか訊ねると、少年は「ちょっとした用があって……」と言葉を濁しながら答える。
歳も違えば学年も違う。全く接点のない少年であった。頻りに思い出そうと頭を捻ったが、心当たりは一向に浮かばない。
程なく、可解斗は敷地の外れにある雑木林の中へ通された。さすがに人気が失せており、そこはかとない不安をようやく可解斗は感じた。
木立が僅かに疎らとなり、開けた原に出ると、そこには可解斗に話しかけてきた彼と同い年と思われる少年達が、八人ほど屯っていた。
彼らは薄ら笑いを浮かべたり、ぎらりときつい視線を投げながら、何か吐き捨てるように喋る者など様々であった。
「あんたが、石竜さんですか？」
語尾を上げて、いかにも不遜な言葉使いで一人が問いかける。

未だに状況が飲み込めず、可解斗は声を出さずにただ首肯した。
「ふーん。へえ、ほー」
可解斗の返事を受けて、今度は違う少年が、まるで値踏みするような視線で遠慮なくねめつけてくる。
生理的嫌悪を隠せず、可解斗が顔を歪めると、案内してくれた少年が徐に彼の前に立ちはだかった。
「石竜さんて、元さんに勝ったんですよね」
訊ねているのだが、それは確認程度のものらしく、可解斗が肯定する間もなく少年は頷いている。
「何でも、龍を使わなかったらしいじゃないですか？　それって、やっぱり皆気になるんですよね」
なあ、と同意を求める声を上げると、訳知り顔で頷いたり、大きく肩を揺らすものなど、反応は様々だった。
しかしそれは正に同意の返事らしく、少年は誇らしげな顔を向け

ながら、
「一体どうやったのか、僕らに見せてくれないですかね？」
と、さもそれが当然の権利であると言わんばかりの傲岸さで、可解斗に提案してきた。
ああ、と唸りながら、可解斗の鈍い頭がようやく状況を理解した。
いわゆる『一手ご教授』というやつだろう。それならそうと早く言ってもらえれば、それなりに心の準備が出来たと言うものだ。
やはり人の手で龍を倒すと言うのは、豢竜氏ならば無視し得ない事態らしい。把式の後の元が見せた反応などを思い返せば、それも納得できる。
「いいですよ。そういうことなら、お見せしましょう」
すっかりその気になった可解斗は、素早く荷物を捨て置いて、目の前の少年に対して構えた。
その様を見ただけで、少年はうっと詰まったように体を仰け反らせた。自分から見せろと言ったわりには、用意の悪いことだ。

この少年からはあの元や、先ごろに手を合わせた接輿を上回る威圧を間違っても感じない。
彼らと対等に戦ってみせたことをひけらかすわけではないが、やはり自信とした感じている可解斗には、この少年を前にしても体は全く滾ってはこなかった。
なので可解斗は、少し型を見せてやればいいかと思い直していた。
そのとき、可解斗の首が途端に熱くなった。
延髄に衝撃を感じたのはその直後で、既に目の前には地面が迫っていた。受身を取る間もなく、可解斗の体は前倒しになっていた。
「あ、れ？」
末端が痺れきってしまい、全く言うことを聞かない。どうやら絶妙な位置を打撃されたらしい。何とか首を起こしてみせるのだが、その辺りが可解斗の限界だった。
こんな不意打ちを、まさか食らってしまうなんて――。

元や接輿の時に感じた気の充溢を、今はまるで感じない。何もかもが抜け落ちてしまい、体が冷え冷えと萎縮してしまっている。
起き上がろうとする可解斗を、まず目の前にいた少年が足で遠慮なく蹴りつけた。顔を掬う形で足の甲が振り抜かれ、顎を跳ね上げられた可解斗はそのまま横に転がって仰向けになる。
「な、何だよ。脅かしやがって！」
さらに足で踏みつけるその少年に釣られて、他の者達が用意していた帽などを加えて可解斗の身体を打ち据えていく。
四方八方から飛んでくる足やら棒やらと、せめて可解斗は身体を丸めながら耐え忍ぶ。
「ほら、龍を出してみろよ。ほらあ！」
煽りながら、さらに拳足が振るわれる。それに可解斗は一切答えず、ひたすら蹲っている。
その姿が、さらなる嘲笑を買うことになる。
「うわ、コイツ本当に龍出せねえでやんの。だっせえ」
「そんなんで豢竜氏になれるわけねえじゃん。ばっかじゃねえの」
何かの鬱憤でも晴らすように、可解斗一人を打擲しながら口汚く罵り倒す。

## 苛虐竜：二

その他罵詈雑言の限りが可解斗に浴びせられるが、中国語は世界的に見てもこうした罵り言葉のレパートリーが豊富なため、その半分も彼には理解できなかった。

「お前、元さんに勝ったなんて嘘だろ。どうせ天袁さまに取り入ったんだ。日本人って、そういうの上手いんだろ？」

とてもざっくりとした国民性批判がよほどツボだったのか、彼らは一様に声を上げて笑い転げた。その様には憤りよりも、まず異様な印象を受けてしまう。

腕の隙間に入り込んだつま先が、唇に押し付けられる。頬の辺りが引っ張られて、柔な唇の肉が張りを失うのが分かった。

そして口の中に、熱い鉄の味が広がる。

しっかりと歯を噛み締め、股を締め、肘を曲げてひたすら丸まる。今はそれくらいしか、可解斗には出来ない。

何故なら、力が不思議なのほど湧かないからだ。元や接輿と戦ったときの快活な気が、今はまるで現れてくれない。

（何で、何でだ？）

そう自分に問いかけたところで、返ってくるのは、矢継ぎ早に振るわれる少年たちの暴力だけである。

本来の自分なら、元や接輿と戦ったときの自分なら、こんな子供が何人集まろうと物の数ではない。実際、後ろから襲われるまでの可解斗はそう感じていた。

それが今、寄って集って殴られ蹴られ、良いように弄られている。あの気があれば、あの滾りがあれば、こんなことにはならないのに――。

「……ったく、丸まるだけなのかよ！」

打ち疲れが出始めたのか、それとも飽きたのか、蹴りなどが如何

にも乱雑になったのを見計らって、可解斗は這い転がるようにしてその場から遠のいた。
木を背にして立ち上がると、口に溜まった血を吐き捨てる。幸い急所には殆ど食らっていないので、何とか身体は動いてくれるだろう。
ゆっくりと右拳を顎の下に置き、左拳を目の高さまで上げて僅かに前へ出す。七流、五の流れ、火である。
「何だよ、まだやんのか！？」
自分たちから仕掛けておきながらの恫喝は、余りにも身勝手極まりない。しかしそれも、可解斗は許してもいい気がしていた。
こうなれば、相手の歳など関係ない。これほど苛烈な態度を差し向けられたら、こちらも相応のことを返さねばならないだろう。
みしりと鳴るまで拳を握り、可解斗が一歩だけ前に出る。申し合わせたように、それと同じ分だけ、彼らが後ろに下がる。
「だらあ！」
堪らず飛び出した一人に合わせて、可解斗は踏み込み様の左拳を走らせる。一直線の最短距離で打ち抜き、動きを止めて返す刀の右拳を叩き込む。

そこまで展開を描いていた可解斗にとって、その後の状況は受け入れがたいものだった。
相手の顔を捉えたはずの左手が、虚しいまでに空振っている。しかし相手の顔は既に、自分の真横に迫っていた。
「え？」
声を上げて驚く間もあればこそ、次に襲ってきたのは、右の弧拳だった。正面から打ち倒され、可解斗の後頭部が木の幹にぶち当たる。
何が起こったのか分からないのは可解斗だけではなく、殴った少年もであった。
可解斗の冴えない頭の中を、疑問と確信が明滅する。

これは何かの間違いだ。偶然に過ぎない。偶々外れて、偶々ぴたりとタイミングが合い、倒されたに過ぎない。何故なら今回は、後ろからの奇襲でも何でもない。普通に、真っ当に、当たり前に、倒れているのだから。

「う、うおお！」

頭の中身を振り払うために吼えて、さらに可解斗が少年に食らいつく。高い蹴りの二連撃である『龍環腿』を繰り出し、その顎を狙う。

少年がひょいと身を屈めただけで、左の足先が彼の頭上を掠めていった。

まさか最初の一撃から外れるとは思っておらず、蹴り足を引き戻すのも忘れて可解斗は呆ける。

そのだらしなく半開きの口に、少年の狙い済ました突きが放たれて、鼻骨を押し潰す。後方に弾かれながらも、血が糸を引いて伸びる。

もはや可解斗の頭は混乱をきたしていない。顔の中心に突然現れた激痛に、その中身が漂白されてしまっている。

しばらく少年は自分の拳と可解斗とを見比べていたが、やがて何か得心したらしく、勝ち誇った顔で彼を見下ろして言った。

「なんだ、あんた、弱いんだ」

そして今度は構えを解き、悠然と歩み寄る。

鼻の痛みから立ち直った可解斗が、今度は右の振り打ちを行う。元の蛟を薙ぎ倒した、あの拳である。

振るわれる拳に、少年は何ら恐れる様子を見せず、すいと顎を引いて軽く仰け反る。それだけで、可解斗は平衡を失って体が泳いでしまう。

十分に可解斗がよろめいたのを見計らって、少年は顕となった可解斗の右脇腹をつま先で蹴り上げた。肋骨の防御がない部分に、堅い靴が沈んでいく。

「おがあ――」
訳の分からぬ悲鳴を上げて、可解斗は腹を押さえて蹲ってしまった。痙攣する内臓がやたらめったらに神経を掻き乱し、満足に呼吸することもままならない。
えずくたびに汚らしく唾を吐き散らし、胸の辺りが不自然に震える。
何が起こったのか。どうしてこうなったのか。まるで分からない。分かりたくもない。これまで龍を倒してきたのに、こんな子供に遅れを取るとはどういうことか。
納得がいかないものの、では全く身に覚えがないかといえば、そんなことはなかった。
これは可解斗が日本に居たころ、常日頃に感じていたものに似ていた。焦燥とも、悔恨とも呼んでいい。煮えた鉄を臍から流し込まれて、そのまま内臓を焼き尽くされるような蟠り。そういうものが、今の可解斗の身体には宿っている。

思えば可解斗は、人と戦って勝ったことなど皆無であった。ただ七流の型だけを習練した可解斗は、対人戦では無類の弱さを発揮することになる。
――七流は、龍を倒す技。
父の言っていたことが裏付けられたと同時に、これ以上なく明確に突きつけられる敗北。龍には勝てる。何とか勝負にはなる。しかしこと人間に関して、七流は適切な手段ではない。
七流は、人に勝てない。龍のために積み上げられた特殊な術理は、ある意味で対人戦闘のような戦闘環境には耐え切れないのだ。
「おい、大したことないぜ。不意打ちなんて要らなかったんだ」
手で寄るように促されると、他の連中もぞろぞろと可解斗を取り囲んだ。
そのうち特に威勢のいい一人が、可解斗の身体を引き起こして木に叩きつける。

「どうした？　また構えてみろよ？」
そしてわざと間合いをあけて、可解斗を誘う。
言われたとおり、可解斗はもう一度『火』の流れの構えを取る。
その瞬間、腕と腕の隙間に拳が捻じ込まれる。
可解斗の顎が派手に上がり、打ち抜いた手で首をがっしりと押さえられたと思ったら、鳩尾に膝が叩き込まれていた。
「うげえ――」
先程のつま先蹴りの衝撃も抜け切らぬうちにまたも腹を痛打され、可解斗は堪らず先ほど取った昼食を口から撒いた。
「きったねえな、こら！」
嘔吐中の頭に拳が横殴りに叩きつけられ、吐瀉物を引いて可解斗が倒れる。消化未了の昼食が気管を塞ぎ、激しく咽てのたうちまわる。
寄って集って一人を弄ぶ。何の謂れもない、不当な暴力だ。
そう訴えるのは簡単だ。しかし、今この場では何の意味もない。
なるほど自分は悪目立ちしていたのかと、可解斗は胎児のように丸まりながら、ぼんやりと思い浮かべた。
突然現れた日本人。当代随一の呼び声高かった豢竜氏の息子。劉家の正統。龍を呼ばず、素手にて龍を屠る奇怪な技。
それは他の豢竜氏にとって興味であると同時に、異常であり、異質であり、異物だったのだ。
初めてここに来てから感じていたことが、ようやく表面に出てきただけのことだ。陰ながら向けるのではなく、直接に届けられるだけのことだ。
異なるものを疎外するのは、集団として当然の行動原理だ。当たり前に行き着く結論だ。
――そんなもの、防ぎようがない。
あらかた腹の中身を出し終わり、やっと深めの呼吸が可能になった。
のっそりと可解斗が立ち上がると、連中は輪を縮めて逃げ場を潰

していった。

## 苛虐竜：三

そのとき、わりと近くの草むらから、大きく踏み分ける音が響いた。
「元さん！？」
音のした方に目を向けた一人が、驚愕も顕に叫び、他の者がが釣られて身を竦ませた。
その中を元が悠然と歩み寄り、少年達を一様に眇めていく。
「あの、これは、只の稽古で……」
取り繕うように言われた言葉に、元は辛辣な顔をして言った。
「つまらん言い訳してないで、とっとと行け。いいか、こういう、俺の顔に泥を塗るような真似、二度とするなよ」
言われた少年は見る間に顔色を蒼白にし、頻りに頭を下げて逃げるように林を後にした。一人が動けばそれに続くのが彼らの常らしく、他も数珠で繋いだかのようにぞろぞろと林から出て行った。

「……あのう、ありがとうございます」
呆と立ち竦みながら、可解斗はそれだけを伝えた。元は聞いているのかいないのか、少年達が残した棒やらを丁寧に拾い上げている。
「別に、お前を助けたわけじゃない。監督生として、言っておかねばならないんだよ」
「監督生？」
「年少部の奴らを監督するのさ。いい点数稼ぎになる」
元の説明に曖昧な頷きを返すと、それきり会話が途切れる。
居た堪れなさに耐え切れず、可解斗は徐に頭を下げた。
「助けていただいて、本当にありがとうございました」
再び礼を言うと、まるで先程の少年達に倣うように、逃げるような忙しさで元から離れようとする。
「おい、待てよ」

立ち去ろうとした可解斗の手を、元が無理やりに掴んで止めた。
元は無遠慮な眼差しで、可解斗のつま先から頭までを眺める。そして見るからに眉をひそめながら、
「龍は殴れても、人は殴れないのか？」
咎めるような視線と口調で、言った。
ぎくりと可解斗の体が揺れて、元の方へと向き直る。もう彼に、ここを早く辞そうという気はない。
「殴ろうとしましたよ。でも、全然当たらないんです」

手が意図せず小刻みに揺れる。自分の言ったことに自分が煽られて、可解斗はさらに歯を軋ませている。
「お前、何言ってんだ？　俺の蛟をぶっ倒しておいて、それはないだろ」
「そんなこと、言われたって……」
事実なのだから、仕方がない。可解斗は本気で当てにいった。相手が年下とはいえ、恥ずかしながら全く遠慮をしない一撃だった。
それでも届かず、一方的に打ち据えられる結果となった。七流が、人に対する技ではない故に――。
それをいちいち他人である元に教えるのは、さらに恥を上塗りする気がして、可解斗には憚られた。
「お前、手を抜いてたのか？」
「だったら、こんなことにはなりませんよ」
だらしないまでに震えた情けない声で、可解斗は小さく答える。
元は甚だ納得いかないといった顔つきで睨みつけてくる。
いくら元に責められても、それで自分が強くなるわけでもないし、七流が変わるわけでもない。ただその視線を耐え忍ぶしかない。
要領を得ない可解斗に飽いたのか、元は何も言わずに来た道を戻っていた。可解斗はその姿が消えるまで、しばらく林の中から動くことが出来なかった。

それから、年少部の者達によるいじめは、より陰惨の程を高めていった。
可解斗が殆ど無抵抗なことを良いことに、悪いときには二十人近くで囲んで袋にすることもあった。
彼らにとっては無抵抗だが、可解斗もきちんと手を出している。しかしそれは拳法を習っている彼らからしてみれば、あまりに拙いもので、間違っても掠ることすら有り得ないものだった。
その内に彼らも巧妙になり、目に見えて傷が出る部分を選ばず、服に隠れる腹や足を狙うようになっていった。
腹から昇る痛みで、夕食が上手く喉を通らない。度重なる腹部への打撃が、内臓を弱らせてしまっているのだ。
その内に血尿でも出すことになるのではと、可解斗は本気で不安になっていた。
しかしそれを、誰かに言いたくはなかった。とはいえ言うとすれば、従姉の深麗以外にいないのだが――。
深麗には世話になっている手前、これ以上心配をかけるわけにはいかない。そうするとやはりこれまで通り、孤塁の身としてがんばるしかない。
日本での可解斗は、これほど明確な敵意を向けられた経験がなかった。良くも悪くも目立つ存在ではなかったので、目を付けられなかったのである。
なのでこうした場合の有効な対処が浮かばない。誰にも相談できず、気をやるほど思い悩んで自分の中に溜め込んでいく。
部屋に帰った可解斗は、道着に着替えて軽く机をどかすと、出来た空間に陣取った。そして姿勢を正し、一律の調子で呼吸を続ける。
七流、一の流れ、龍である。
夜半にもこうして七流に励むのは、日本にいたころからの習慣であった。

七流がまたも役に立たず、日本で感じていた悶絶が再び蘇る。熔鉄を流し込まれているような、たまらなく身を悶えさせる暗い熱が、ひたすら蓄積されていく。

どこへも発散されない。解き放つ当てがない。何故なら可解斗の拳足は、掠りもしないのだから――。

同じ当たらないのなら、虚空に向かって型を振るうほうが、まだ救いがある。

溜まり続ける煮えた蟠りを少しでも癒すため、可解斗は七流の型を磨くことに夢中になっていった。

さすがに彼らも寮暮らしで管理が厳しいらしく、夜中に教われるようなことはなかった。

幾ら振ったところで、繰り出したところで、これは人には届かない。歳の低い彼らにすら届かない。

型をなぞる度、腹の底にある蟠りの輪郭がじくりと滲みる。引き裂かれた肉の割れ目に似た鋭敏な反応で、可解斗の精神を苛む。

以前なら、七流の型をなぞっている間、可解斗は何も考えずに没頭できた。しかし今は、振るうたびに心を苛まれ、己の無力をまざまざと見せ付けられてしまう。

それを振り払うため、さらに七流に没頭するのだが、蟠りは一向に晴れず、むしろ大きくなっていくように感じていた。

床の上に池でも作るかのように汗を流したところで、ようやく可解斗の鍛錬は終る。身体と床を拭いて着替えると、あとは泥のように眠りこけてしまう。

半端に体力を残すと、睡眠の最中にも蟠りを持ち越してしまう。こうして倒れる寸前まで身体をいじめておけば、自分の悩みとは関係なくスイッチを切るほどの簡単さで眠れる。

今の状況では、この睡眠こそがまさに可解斗の癒しだった。

## 苛虐龍：四

次の日も、可解斗は林の中でいつものように打たれていた。
唯々諾々と連れてこられて、まんまとぶたれる。分かっているのなら行かなければいいのだが、何故かそういうわけにはいかない。
虐めから逃げるのが、納得いかないのである。悪いのは相手だ。自分には一切の非はない。だから逃げるのは理にそぐわない。
その頑なさに付け込まれているのも分かっているのに、可解斗はそれを振り払えずにいた。
もう何発殴られて蹴られたのか、数えることも億劫だ。七流の技を返すこともなくなり、ただの的と化している。
「おいおい、何かやれよ。気取ってんじゃねえよ」
意味不明のやっかみに小突かれても、可解斗はやり返さない。ただ俯かず、目の前にいる少年の顔を見つめていた。
「気持ち悪いんだよ。見るな、クソが」
鼻っ柱に思い切り拳骨がめり込み、軟骨が潰れた。熱い鼻血が口の中まで滲み込んでくる。

それでも可解斗は、視線を変えようとしなかった。さらに顔へ拳が振られるが、むしろその目つきは険しさを増していく。
まだ可解斗は、決心がつかない。だからこうして打たれるに任せている。しかしそれも、いつまで続くか分からない。
これまで耐えていたからといって、これからも耐えられるとは限らない。
大きく引き絞った右拳が、可解斗の鳩尾を勢いよく突き上げた。
横隔膜が痙攣し、衝撃が胃を直撃する。そのまま破れてしまうのではないかと思うほど、内蔵が震えているのが分かる。
競りあがるものに逆らわず、可解斗は胃の中身を吐き出した。口の中が酸っぱい匂いに包まれて、それがまた吐き気を促す。

誰かが、蹲る可解斗の横腹をつま先で蹴り上げた。胃がさらに凹み、生暖かい泥のようなものが口から零れる。
何かに頭を押されて、可解斗は自分が吐いたものの中に顔を埋める。上から掛けられる言葉など、今さら聞き取れない。頭を踏みつけられながら、腹を小突かれる。その都度、発作のように身を震わせて吐瀉物が漏れ、じんわりと広がっていく。

吐いても、吐いても、まだ吐くことが出来た。というよりは、何かが自分の中に残っているような気がした。
消化未了の食べ物よりも臭く、おどろしく、汚らしい塊が、身体の中心に居座っている。
いっそ吐き出したい。そうすれば楽になれる。痞えが取れてすっきりするはずだ。
なのにそれは出てきてくれない。生半なことでは、外に出てはくれないらしい。
もう可解斗は、辛抱の限界だった。彼は頭に載せられていた足を握り締めた。
何事かと呆ける相手を、そのまま下に引きずりこむ。この蟠りを吐き出すには、こうするしかなかった。
「うわあああ！」
自分の頭を踏みつけていた少年を無理やり引き倒し、馬乗りになってがむしゃらに拳を振り下ろす。
むしゃぶりつくようにして相手を押さえつけ、殴られながらも殴り返す。今度は的確に可解斗の拳が相手に届いていた。
自分よりも体格の小さい相手に、容赦なく拳を振り下ろす。今まで自分を痛めつけてくれた相手を征服する。
少年達が可解斗を取り囲み、離そうとして引っ張ったり蹴りつけたりする。しかし可解斗はいくら叩かれようが、お構い無しに組み敷いた一人の顔だけを狙う。

七流の技など、これっぽっちも使っていない。ただの喧嘩である。技も何も関係ない。こうなれば体格、体力の問題である。技術などいらない。

「ひあああっ！」

言葉にならない叫びをあげながら、可解斗は少年を殴りつける。

一発一発を打つ度に、可解斗の中にあった蟠りが解けていく。痼りが取れて、溜飲が下がる。

これで同じだ。自分をさんざ痛めつけた、彼らと同じだ。これで対等になれたのだ。もう言い逃れはできない。いじめられたという大義名分は霧散した。一方的な被害者を装って同情を引く真似は許されない。

何故なら可解斗は、もういじめられていないからだ。

「やめろ！　もう、やめて！」

組み敷かれていた少年は、とうとう許しを請うてきた。打ち返していた手が休まり、顔を包むように組まれている。

可解斗は覚えず、その顔を綻ばせた。

これだ。これが聞きたかった。これが欲しかったんだ。可解斗はとうとう腹の底に居座っていた蟠りが完全に崩れ、跡形もなくなるのを感じていた。

当然だ。誰だって殴られるのは嫌だ。自分も嫌だったのだ。今の相手の心を、手に取るように可解斗は理解できている。そして、その願いは往々にして踏みにじられることを、可解斗はよく知っていた。

人が心の裡から発した懇願をこそ裏切って、嗜虐は完成を見る。

顔の前で交差された腕を引っ掴んで解き、頭突きを振り降ろす。堅い額が鼻骨を押し潰して、鼻血が炸裂したように広がる。

熱くぬめる血が、可解斗の顔を濡らす。自分のものではないそれ

は、驚くほど熱かった。
赤は気を昂ぶらせる。牛だって赤い布を見れば興奮する。人も同じだ。赤くて熱くて鉄臭いそれを浴びると、何故だかもっと、もっとそれを浴びたくなってしまう。
別段、可解斗は加虐的な性癖を有していない。血見たさに小動物を虐待したり、自傷行為に奔ったりもしない。ましてや数人で一人を袋叩きにしたいとも思わない。
ただ、自分のことを虐めた相手を心ゆくまで殴りつけ、請う声を無視してさらに拳を振り下ろすことに心の充足を感じるほどには、可解斗も歪んでいた。
気がつけば、可解斗はまた草むらの上に寝そべっていた。どうやら他の連中に押し倒されたらしい。まだ未練がましく小突かれているが、そんなものはまるで気にならない。
視界の隅で介抱を受ける少年の姿が、可解斗を満足させる。人の手を借りねば起き上がることも出来ないらしい。いい気味だ。いい様だ。これがお前らのしてきたことだ。
まだ足りない。でも、今はいい。もう身体が動かない。だから見逃してやろう。今度は全員を、倒して、殴って、謝らせて、それでも殴ろう。

## 苛虐竜：五

ぞっとするほど背中に寒気を覚え、可解斗はゆっくりと目を開いた。

それからどれだけ時間が経ったのか。全く覚えがなかった。自分が気絶していることさえ分からなかったのだから、それも仕方がないだろう。

切れた唇や鼻から流れていた血は既に黒く固まり、動かすとばりばりと音を立てて草の上に落ちた。

鼻の奥に詰まった血のせいで、息の通りは悪い。口の中には乾きかけの唾と血がへばりついて、動かすのも億劫だ。

それでも、可解斗はしばらくこのままでいたかった。身体の不快感と反比例して、心は軽やかでさえあった。

ようやくいじめっ子たちに一矢報いたのだ。ただ虐められるだけの存在ではなくなったのだ。七流の技ではなかったけれど、自分の拳で、自分の力で、人を屈服させた。

「くふっ、ふふ……」

どれだけ心が澄んでいようと、可解斗は年下の人間を馬乗りになってひどい目にあわせた。それは曲げることの出来ない事実だ。

誰に憚ることもない事実だ。咎められようと、罵られようと、構わない。それはあの少年に勝ったのだという、何よりの証拠だからだ。

それは可解斗を喜ばせこそすれ、落ち込ませ、反省を促す役には立たないだろう。

一頻り勝利の余韻に浸った可解斗は、節々が軋む身体を引きずって、寮へと帰っていった。

今日は鍛錬を怠ってしまったが、泥のように眠れることに変わりはなさそうだ。

翌日、可解斗は珍しく講師のほうから話しかけられた。休み時間になったら職員室に来いとのお達しだ。
その時点で可解斗は、言い知れぬ不安を抱いていた。
授業が終わると、可解斗は講師に従って談話室を訪れた。そこにはやはりと言うべきか、年少の者達が三人ほど席に座っていた。その内の一人は、可解斗が昨日しこたま殴ってやった相手である。まだそれと分かるほどに、顔が腫れている。
無論、可解斗も負けず劣らず顔を腫らしている。
「石竜可解斗。昨日、彼らと組み手を行ったそうだな？」
「……組み手？」
一瞬、何のことか分からず、可解斗は聞き返した。その仕草が講師の気に障ったらしく、机をこれ見よがしに叩いて彼に詰め寄った。
「組み手と称して暴力を振るわれたと、彼らは言っているんだ」
そこまで言われて、ようやく可解斗も合点がいった。どうやら、はめられたらしい。

講師が言うには、昨日、彼らは歩いていたところを突然話しかけられ、組み手をしないかと誘われた。そして草むらまで連れ込まれ、組み手が行われた。
体格でも上回る可解斗に勝てるはずもなく、降参したのだが、可解斗はそれを聞き入れずに組み手を無理やり続けさせたと言う。
何とも巧妙な言い訳だ。所々に真実が散りばめられているのがいじらしい。昨日の夜、彼らが額を集めて考え抜いたのだろう。三人寄らば文殊の知恵とはよく言ったものだ。
「組み手は推奨しているがね、こういうやり方はよくない。それくらいは分かるだろう？」
それはよく分かる。可解斗とて、あれが組み手だなどとは口が裂けても言わない。多くの意味で組み手ですらない、恥ずべき行いで

ある。
「組み手なんて、やっていません」
「じゃあ、何をやったんだ？」
可解斗は口を噤んだまま、机の上に視線を落とした。いざ問われてみると、あの状況を言い表す言葉が見つからない。いじめだったのか？　それは馬乗りになって殴る前の話だ。では喧嘩か？　それもまた綺麗過ぎる気がする。組み手はまず有り得ない。
何も言葉が出てこない。ちらりと彼らに目を遣ると、わざとらしいほどに怯えてみせる。
今ごろ腹の底では、自分たちの策の嵌りようを誉めそやしていることだろう。こうして可解斗が答えに窮している様が、彼らの強かさの現われなのだから。

堪らず、可解斗はぐうっと唇を噛み締めて、湧き上がる恥じらいと憤りを耐え忍んでいた。その様を観念と取ったのか、講師は手を引いて立ち上がった。
そのとき、談話室のドアが開け放たれた。
「失礼します」
挨拶もそこそこに、その人物はずかずかと歩み寄ると、可解斗の背後に至ったところで立ち止まった。
「元、一体どうしたんだ？　今は授業中だろう」
現れたのは、元だった。
「監督生として、ご報告したい義がございまして」
可解斗や年少の者達の驚きをよそに、元は講師からの問いに、はきはきと答え始めた。
「彼らがこの石竜に対して、集団で不当な暴行を加えていたのを、自分は何度か目撃していまして――」
つらつらと淀みなく宣言されたのは、この場の理解を覆すものだった。
年少の者達は、思わず椅子を蹴って立ち上がっていた。

「私は現場に何度か立ち合い、その都度にやめるよう諌めておりましたが、このような事態を防ぐことが出来ず、申し訳ございませんでした」
「ユ、元さん！？　な、何言ってるんですか？」
年少部の者達は一様に唇を戦慄かせ、顔から血の気を失わせている。彼らにしてみれば、尊敬する先輩に裏切られたという心地なのだろう。

そんななかで、可解斗は泰然として座っていた。状況の遷移に頭が追いつかず、何の反応も示すことが出来ないでいたのである。
「石竜は年少が相手とあっては、間違っても怪我をさせてはいけないと気遣い、耐えていたそうです」
これには可解斗も驚きを隠せなかったが、何やら自分に有利な材料であると考え、とりあえず鉄面皮を取り繕うのが精一杯であった。
「ご存知の通り、彼は素手で龍を倒せますからね。本気で相手をしては、殺してしまう」
冗談交じりな言い方に、可解斗はどこか責めたてられるようなものを感じた。
「待て、元。そんな話は聞いていないぞ。彼らは組み手だと――」
「監督生として事実を申したまでです。判断はお任せします」
毅然と教師の言い分を切り捨て、立ちはだかる。こういうとき、むしろ言葉を尽くせば尽くすほど嘘の色が濃くなってしまう。天地神明に誓って恥じるところ無しと、大仰に構えて見せるのが効果的なのだ。

結局のところ双方お咎め無しとなり、可解斗と元は二人して部屋を辞した。
「監督生も、やっとくもんだろ。俺の信用が高くて助かったな」
元がそのような軽口を叩いてきても、可解斗は愛想笑いの一つも浮かべずにいた。なぜ元が自分をわざわざ庇うような真似をしたの

か、意図が分からなかったからだ。
「ありがとうございます。今度も、助かりました」
意図が如何なるものだろうと、助けられたことに変わりはない。
とりあえず可解斗は、頭を深く下げて礼を言った。
「ああ、そうだな。俺がいなかったら、日本に返されてたな」
「やはり、返されちゃうんですか？」
「そりゃあ、モノに成らないとなれば、切り捨てるのが道理だろう。ただでさえお前は悪目立ちしてるから、色々と恨みを買ってるぞ」
薄々感づいてはいたのだが、きちんと言葉にしてもらうと、絶望らしきものが肩に降りてくる。
やはりそうだったのかと、すとんと腑に落ちるような心地でもあった。
「そうだ。助けたついでだ。ちょっと付き合え」
「あ、はい」
などと軽く答えて、可解斗はほいほいと元についていってしまった。

## 苛虐竜：六

「これくらい奥まってればいいだろう」
元は草を踏みしめながら、辺りを見回している。そこは学舎から離れた、龍の巣の近くにある草原であった。
「あの、元さん？」
「何だ？」
可解斗に問われても、元はまるでとぼけるように問い返すだけだった。しかしいい加減、可解斗にも元が何をしたいのか分かっていた。
「ウチは把式は推奨されてるが、やはり私闘は建前上、禁止されている。特に龍を使ったとなれば、これはもう即座に田舎へ返される」
豢竜氏たるもの、龍を私闘などに用いるべきではないとし、龍を不当に運用することは処罰の対象となる。見習いのときにそのような振る舞いをすれば、すぐにでも学舎を追い出され、二度と豢竜氏になる修行を受けることは叶わなくなる。
それは可解斗にも薄っすらと分かる。だが何故ここで、どうして自分に話すのか、それが分からない。
「何で？　何でまたやるんですか？」
元と可解斗は、一度立ち合っている。そこで可解斗は七流の技を如何なく発揮し、元の操る蛟を打ち倒していた。
「やっぱり、納得いかないんだよ。俺の龍を倒しておきながら、年少部の奴らにいい様にやられるってのは、道理に適わないだろ」
談話室で見せた優等生然とした態度など、もはや見る影もない。ぎりぎりと軋む歯の音が聞こえてきそうなほど、元は顔をくしゃくしゃに歪ませている。
元の言い分は、可解斗こそがずっと感じ、抱え込んでいたことだ。その発露として、あのように無様な殴り合いを演じることとなった

のだから――。
「あいつらが勝てたんだ。俺が勝てないのは、おかしいんだよ。絶対におかしいんだよ、お前」
怒り振り払うように撒かれた符から、水の飛沫が立ち昇る。たちまちそれは霧となり、元と可解斗の間を断つ。
やがて風に飛ばされて霧が晴れると、そこにはあの蛟が陣取っていた。
またも相対した蛟は、この前の傷などもう窺えず、全快となっていた。鱗の艶や蛇腹の張りなど、見るからに健やかである。
呼び出されて早速、喉の奥でごろごろと稲妻を鳴らしながら威嚇してくる。
ぐんと、何かに体を突き上げられたかと錯覚するほど、可解斗の体が強く揺れた。否、揺さぶられたと言うべきか。
静かに、一定の調子で、可解斗は呼吸を繰り返す。七流の基本となる導竜法である。
すると今まで忙しなく元の様子を窺っていた態度が、すっかり消え失せてしまった。
「どうだ？　腹は決まったか？」
姿勢良く佇む可解斗を、正面から元が見据える。それを待っていたのだと言わんばかりに、身体から喜色が漏れ出しているのが分かる。

久方ぶりに味わった滾りは、殊更強く可解斗の身体を突き動かそうとする。今にも腹の内が爆ぜてしまいそうだ。それを発散する方法は只一つ――龍を倒すことだ。
「決まりました……」
言って、可解斗は右の拳を腰の横に、左の掌を肩から突き出し、蛟に対して構えを取った。
「これで、いいんですよね？」
「おう。それでいいぞ。その調子だ。それを、崩すなよ」

ゆらりと元が手を差し伸べて、蛟は堰を切ったように可解斗へと傾れ込んだ。
そこへ可解斗は、手を突き出した。握り締めた拳骨を剥き出しにして、向かい来る蛟の、その頭に正面から――。
可解斗の拳が、突き刺さる。口を開けていた蛟の喉の奥まで、拳が入り込んでいる。代わりに蛟の口が、可解斗の肩まで食らいついていた。音を立てて可解斗の肩の肉が歪む。
しかしそれ以上の行動はない。可解斗もまた蛟の顎に手を掛け、噛み砕こうとするのを阻止している。
「ぬうあ！」
気合を吐いて、可解斗が右腕を横に捻った。蛟の口からくぐもった音が響き、次いで血の泡が吹き零れる。喉に突き入れた拳を解き、その手で中の肉を掴むと、可解斗はそれごと腕を捻り、ごっそりともぎ取っていた。
蛟が頭を震わせている。機とばかりに可解斗は膝を沈ませ、左手を下に潜らせた。このまま貫手で逆鱗を刺し貫く。必殺の貫手が僅かに掠めていくのと、可解斗の身体が浮き上がるのとは、殆ど同時だった。
人間で言うところの、反り投げに当たるのだろうか。蛟は大きく背を仰け反らせて、可解斗を高々と放り投げていた。
「おおおあああ！」
誰にともなく叫びながら、可解斗は中空を泳いでいた。眼下では緑色が猛然と過ぎってゆく。

まるで弾丸だなと考えるくらいには、可解斗は冷静だった。真上に放られるよりは、まだやりようがある。
自分の臍を見るように身を屈め、腕で頭を抱え込む。そうして可解斗は、草むらに叩きつけられた。ざうと小気味よく、草が鳴る。
柔な草が根元から折れて、可解斗の転がる道を開ける。草むらの端にあった木の辺りにきて、ようやく可解斗は停止した。下が草で

なかったらと思うとぞっとする――そんなことに考えを巡らす余裕は、可解斗にはなかった。
もう目の前には、あの蛟が居座っていた。
鞭に似た尾が霞みながら追ってくる。先端の方など、速過ぎて判然としない。屈んだ頭を掠めたそれが木の幹を直撃し、その部分が大きく白木を覗かせる。
しかし可解斗は下がったわけではない。まんまと尾の薙ぎを避けながら、さらに蛟へと近づく。屈めていた身体を伸ばしながらの振り打ちが、蛟の横腹に入る。蛟の長い腹が捩れて、歪に凹む。
同時に、可解斗の体がまたも遠くに吹き飛ばされていた。
「がはあ！」
胸郭に受けた衝撃で、可解斗は激しくえずく。何かの攻撃を受けた胸の辺りが、ぐっしょりと濡れていた。
「み、水！？」
そう言えば、龍の巣の池にいた龍の親子を、深麗は蛟だと言っていたことがあった。その龍も、今の蛟のように水を操っていたような気がする。
なるほど龍と言うのは、こういう芸当も出来るのか。馬鹿力だけで神代の獣は務まらないらしい。

中空に固められた水が、弾丸よろしく可解斗に殺到する。一箇所に留まっていては鴨撃ちである。水の射線から逃れるように、可解斗はひたすら走る。後ろからは木が傾いで倒れるような音が響くが、努めて無視して水の弾から遠ざかる。
このまま避け続けていても埒が開かない。可解斗は決心すると、決して蛟とは正対しないよう激しく体位を入れ替えながら着実に間合いを詰めていく。頭が草に隠れるほど屈み、狙いにくい場所を取りながら蛟の身体に近づく。
上から降りかかる水弾を左の回し蹴りで弾き、返す刀で右の踵が蛟の逆鱗を捉えた。打ち震えるような会心の手応えが、右足から電

流のように昇ってくる。
可解斗の目の前で、水が凝固を始める。
突然に形成された水の一発が放たれる。寸前で腕をかざして防ぐが、その身体は大きく弾かれてしまう。
蹴りにいった勢いをそのままに食らい、可解斗の胸郭が腕ごと沈み込む。圧迫された気管がぜい鳴を上げて、うまく呼吸が行えない。
しかし蛟も似たような状況だ。急所である逆鱗を下から蹴り抜かれ、まだ痛みに悶えている。
一人と一匹は自身の体調と相談しながら、ゆっくりと身体を起こす。それは申し合わせたように、殆ど同時のことだった。

その最中、耳によく通る金切り声が原に届いてきた。
「元、可解斗さん。何をやってるの？　やめなさい！」
その場に響いたのは、悲壮を極めた叫びだった。何も知らずに聞いただけでも、心がささくれ立ってしまうほど、そこには深麗の心が込められていた。
「深麗さま……」
龍の巣の方向から現れた深麗は、すぐに元へと詰め寄った。
「こんな人気のないところで、龍を使って私闘とは。恥を知りなさい！」
傍らまで近寄られて怒鳴られようと、元は一切の視線を深麗に寄越さない。可解斗と蛟の戦いから、目を離すことが出来ないのだ。
「これは、蛟の望みでもあるのです」
しかし聞こえてはいたようで、元は隔意を押し留めるように顔を強張らせて答えた。
「あいつが強いのか、弱いのか。納得がいくまで確かめなくちゃ、いられないんです」
「もう決着はついたでしょう。下がりなさい。これ以上恥を晒すつもりですか？」
「晒していません」

きっぱりとした口調で、元は言った。
「晒していません。これから晒すのです」
その言い切る様に二の句が継げず、深麗はその場に立ち続ける。
最早止めることは叶わないと知り、今すぐにでも白を呼び出したい衝動を抑えながら、二人の男を見守っていた。

## 苛虐竜：七

蛟と可解斗が、打ち合う。水の弾を、あるいは拳を、または尾を、脚を、互いの体に叩き込んでいく。

「出鱈目だ。出鱈目だよ。お前、出鱈目だよ！」

蛟と共に戦いつつ、元は罵倒でもしなければ、とてもではないが正常な精神を保つことが出来なかった。

自分と同じか、体格で言えば一回り小さく、年少部の者達に虐げられていた虚弱な男が、自分の間近で龍と対等に戦っている。

見るのは二度目とはいえ、元にとってそれは甚だ信じがたく、悪夢に近しい現象であった。

夢なら早く覚めて欲しい。この男ごと、全てが嘘だったと、消えてなくなって欲しい。

「おおあッ！」

咆哮と共に放たれた拳が、蛟の頭を横殴りに叩きつける。その勢いに蛟の体が傾いで、地面に倒れこむ。

単なる人間の拳である。あの年少の者を殴った拳が、今度は一撃で龍を地面に倒れ伏せさせる。

あんな代物を人間がまともに食らえば、只では済まない。年少の者は多少顔を腫らすくらいだったが、本来なら一撃で頭蓋が陥没するだろう。

何か、何かがおかしいのだ。ペテンか、さもなければからかっているとしか思えないほど馬鹿馬鹿しい仕儀である。こんなものをまともに信じられるわけがない。

だから元は、確かめに来たのだ。この奇怪な現象がどうして起こるのか、それを知るためにもう一度可解斗の前に立った。

当の可解斗は、先ほどまでのおどおどとした気配を完全に吹き飛ばし、まさに龍の如き猛々しさで轟然と振る舞っている。何で戦う

のかと問うてたくせに、いざ龍が現れればたちまち気を逆らせて、自分の方から食って掛かっていた。
可解斗の連撃を、蛟は身をくねらせて避け、撓る尾の先で腹を突き上げる。龍の三分の一ほどの体格しかない可解斗は、為す術もなく宙に舞い上がる。
バネ仕掛けのように蛟は蛇腹を撓ませて、可解斗の右腕の付け根に喰らいついた。しゅるしゅるとその体が可解斗を包み込むと、そのまま自由落下に身を任せる。
蛟に絡まれた可解斗は首だけを露出させている。如何にも固定されていないその首から落ちれば、自分と蛟を合わせた重量がそこに集中することになる。
これは決まる。その確信に思わず元は拳を握り締めた。無論、首の拉げた可解斗の姿を見たいわけではないが、今は彼の無事云々よりも単純な勝利を喜びたい。
体を完全に固定されたまま、可解斗は落ちてゆく。
寸前、蛟の体がぐるりと転がった。蛟の鱗が地面の方を向いて――。

草いきれを薙ぎ倒して、一人と一匹が打ち付けられた。
可解斗が体位を入れ替えて、首から落ちるのを防いだのだろう。とどめとはいかなかったが、まだ蛟の攻めは終っていない。その長い身体で締め上げればいいのだ。
蛟の体が、徐々に震えを帯びてゆく。それはもう、痙攣と称していい類のものであった。
複雑に絡んだ蛇腹と腕、可解斗の胸元に抱えられた蛟の頭が、歪に締め上げられている。
七流、七の流れ、水。蛇咬。長い体を持つ龍に対抗するために組み上げられた関節技である。胸元に抱えてから手で顎を押し、首を百八十度捻る。その状態で胸筋と上腕で喉を押し潰す。
可解斗と蛟は細くなった呼吸を繰り返しながら、互いの体を締め

上げてゆく。蛟のとぐろが小さくなれば、可解斗の腕が狭まる。
間近に顔を寄せて牙を剥き、過剰に緊張した筋肉が膨れ上がる。
その様子を見た元が、その顔から色を失くしていた。

龍に体を締められて、何故未だに生きていられるのか。というより、どうやって人の形を保っているのか。
少なくとも元の知る龍と言う存在は、このように人の腕で組み伏せられるような存在ではない。人間などには及びもつかない万古の聖獣のはずである。だからこそ、それと共にある豢竜氏は、尊き人種として扱われて然るべきなのだ。
自身の認識がゆっくりと崩されていく様を、元は蒼白とした顔で眺めていた。
「くそっ！」
思い直し、元は裾から符を抜き放つ。今は自失している場合ではない。蛟が苦しんでいる。自分の龍が追い詰められている。ならばそれを助けるのが、豢竜氏の役目だ。
元の存在に気がついた可解斗が、一瞬、元のほうに視線を寄越した。
符を動かす手が止まる。その目は、およそ人のものとは思えなかった。初めて龍に会ったときに感じた原始的な感情が、突然に元の頭に去来する。恐怖、畏敬。どのように言い繕おうと、その視線の力に、人が抗えるはずも無い。
手が止まったのは一瞬だったが、可解斗にとってはそれで十分だった。
蛟の頭を解くと、腕で踏ん張って胴体を引き抜き、素早く足で蛟を蹴って飛び退く。そこまでが一つの動作であった。
再び離れた可解斗は、柔らかな掌を蛟に向け、ゆるゆると波に揺られる草のように漂わせる。
七流、七の流れ、水。当身を廃し、立ち捕りを主眼に置いた流れ

である。掌に釣られて体もまた揺れ動き、それはまるで一条の狼煙に似て、ひどく頼りなさげである。
拘束から解放された蛟が、地を蹴って牙を突き立てる。
むしろ可解斗は身を退いて、ゆるやかに手を伸ばす。
瞬間、蛟の頭が地面に突き刺さっていた。その時だけ、二人の動きがぴたりと止まる。
人間のように表情など窺えないはずの蛟だったが、当惑しているのだと分かるほどに呆然としていた。
しかしそれも長くは続かない。再び牙を剥いて翻り、可解斗に襲い掛かる。
可解斗は矢継ぎ早に飛び掛る蛟を、たちどころに投げ捨ててゆく。その牙や尾が掌の先に届くか届かないかの絶妙な瞬間、既に可解斗は体を入れ替え、蛟の頭や腹を地面に叩きつけていく。
そのうち、蛟の牙の隙間から、真っ赤な血が滴り落ちてゆく。如何に堅牢を誇る鱗で守られているとはいえ、自身の膨大な力を空かされ、そして返されているわけだから、損耗しないはずがない。
これまでの喉元に食らいつくような進撃が嘘のように、可解斗は落ち着きを払って蛟の前に立っている。
以前の把式と、今回の立ち合いで、可解斗はみ蛟の動きを見切っていた。故に蛟の攻撃をいなし、あまつさえ投げ捨てている。
蛟は、血の絡んだ喉がぜい鳴を上げており、いかにも苦しそうである。対する可解斗も所々の服が破け、その下の皮膚がばっくりと裂け、あるいは赤黒く腫れている。
如何に動きを見切っているとはいえ、全くの無傷とはいかない。一枚一枚が鋭く尖る龍の鱗は、触れる角度を間違えればたちまちこちらの肉をごっそり抉ってくれる。
しかし双方全く退くところを見せず、あまつさえ蛟は血痰を吐き散らしながら吼えて威嚇する。
それに応えるように、今度は可解斗の方から前に走り出した。顎を地面に擦らせるほど低く伏せ、まるで扁平な虫のように這い寄る。

ここで、決めるつもりである。
蛟は全身をくねらせた勢いで、尾が地面すれすれを薙ぎ払う。鋭い鱗が草を刈り取って舞い上げてゆく。
草と同じ運命を辿りたくなければ、尾を回避するしかない。横に逃げるか、上を飛ぶかすれば何とかなるだろう。しかしそれを――幾ら獣とはいえ――龍が察していないはずがない。
上へ飛んで逆鱗を蹴り上げたいが、身を捩ると同時に蛟の顎は遠のいている。一飛びで届く距離ではない。横に回ったところで、尾が追いついて巻きつき、今度こそ腹を締め上げられるだけである。
可解斗は迷いなく、蛟の目の前で立ち止まった。ちょうど、尾が当たる位置である。
「ぎひゃあ！」
蛟が威勢の良い鳴き声を上げて、尾の先端に力を込めた。丸太のような蛟の尾が、可解斗の横腹に叩きつけられた。
可解斗の体が、真横にずれる。草を踏みつぶし、二本の轍が出来上がっていた。それでも、彼は吹き飛びはしなかった。
横腹を叩いた尾を、可解斗は右腕を回して抱え込んでいる。
「くひっ」
口吻をめくり上げて、可解斗が笑う。今この龍の運命は、まさに彼の手の中にある。

龍の中には、蛇と生態の似る種類も存在する。特に蛟はその類であり、習性までが蛇と酷似している。
そんな蛟の腹目掛けて、可解斗は左の貫手を突っ込んだ。
丈夫な龍の肉の中に、可解斗の右手が深々と入り込んでいた。まるで最初から、その場所に割れ目でも存在していたかのようだ。
事実、可解斗が手を入れたそこは、蛟の生態上どうしても存在する肉の割れ目であった。
割れ目の中にずぶずぶと、可解斗は手を潜らせていく。そこまで

してもまだ、蛟はさらに尾を絡ませるどころか、二撃目の準備もしないでいた。
それも無理からぬことだろう。蛟は体を突っ張らせ、がくがくと揺れる顎を上に向けて空を仰いでいる。
過剰な痛覚の信号を受け取った脳が、処理を超えてパニックを引き起こしているのが、ありありと見て取れる様相である。
可解斗が手を入れた場所こそ、蛟にとってはある意味で逆鱗よりもデリケートな部分であり、急所に他ならなかった。
「おおっ！」
気合を吐いて、可解斗は肉の中に突っ込んだ左手を、ぐるりと捻った。そして、重くくぐもった破裂音のようなものが静かな草原に響き、深麗の耳にまで届いていた。
ずるりと取り出した可解斗の左手には、赤々とした血と、眩いばかりに白い粘液とが絡み付いていた。
可解斗が手を入れ、そして握り潰したのは、蛟の陰茎であった。
蛇の陰部というのは半陰茎（ヘミペニス）と呼ばれる特殊な形状をしており、勃起時には陰茎が二股に分かれるのである。そして平時は肉の割れ目の中に収納され、外部の刺激から保護されている。
その他の動物たちと変わらず、龍の陰部にも多くの神経が集中している。そこに過剰な刺激を受ければ、斯様な仕儀となるのは当然であった。
あまつさえ半陰茎の片方を握り潰されれば、龍と言えども意識を保ってはいられない。
見る者の心を不安たらしめる痙攣を繰り返し、蛟はその体を草むらに横たえたまま、もう起き上がる意思さえ見せようとはしなかった。

元はすかさず蛟の許へ駆け寄ると、その状態を確かめるように手を当てる。痛ましいその姿を見ていたのもつかの間、元は取り出し

た符の中へと、蛟をしまい込んだ。
「死んじゃいないよ」
可解斗のほうを見ずに、元が言った。その声音には、どこか満足した色がこもっていた。可解斗は深く息をつき、構えを解く。
事が終わったのを安堵する深麗とは裏腹に、元と可解斗は塑像のごとく佇んでいる。お互いの健闘を讃えようともせず、怒りをぶつけるでもなく、草むらの下にある地面へ視線を落としている。
「……もう、あんな真似はやめろ」
ぽつりと、元が言った。可解斗は、なにも答えられなかった。
誰が悪かったとか、何が正しかったとか、そういう高尚な次元の話ではないことを、可解斗は知っていた。元はただ、自分が貶められるのが我慢ならなかったのだ。この戦いの前にも、そう宣言していた。
自分が負けた可解斗が、年少の者たちに負けるのが、どうしても堪えられなくて、納得できなかったのだ。

だから試した。可解斗と、自分のことを。こうする以外に、元は確かめる術を持たなかった。
可解斗も同じだ。こうする以外に証明する術を持たなかった。だからすんなりと応じてみせた。ふっかけられた喧嘩を、何の抵抗もなく受け入れた。
俯いていた可解斗の視界の端に、元の靴が映る。顔を上げると、元は目の前に立っており、真っ直ぐに可解斗を見つめていた。
気恥ずかしさで、可解斗は思わず目を背けそうになる。だがそれさえも許さない強さが、元の目には宿っていた。
「お前は強い。そう、思わないか？」
可解斗は悄然と、首を横に振った。
「思いません。強ければそもそも、いじめられていない」
そして断固とした口振りで答える。
「正直だな」

元は言いながら、可解斗から視線をはずした。そのまま横を通り過ぎて、屋敷のほうへと歩き去っていった。
「石竜」
後ろ髪を引かれた思いで、可解斗が振り返ったとき、元がちょうど彼に呼びかけた。
「またやるぞ。蛟が治ったら、また、やるぞ」
「はい」
それだけの答えを元は大きく頷いて聞き届け、満足そうに口の端を上げた。
背後から深麗が駆け寄る音を聞きながら、可解斗は元の後ろ姿を見送った。

## 把式流：一

すっかり元（ユン）に懐いた可解斗は、昼食を共にするのが日課となっていた。

「そういえばお前、豢竜大会には出るのか？」

「はい？　何ですか、それ」

「大会だよ、大会。劉家の後継を決めるんだ。お前も一応は劉家の直系なんだから、とりあえず出るのが筋なんじゃないのか？」

立て続けに並べられた聞きなれぬ単語の数々に、可解斗は泣き笑いのような顔を浮かべて首を傾げるしかなかった。

「深麗（センリ）のお嬢様から、何も聞いてないのか？」

「いえ、それが……最近は顔も合わせてくれないんです」

どうも先のいじめの一件から、可解斗は深麗に避けられている節があり、交わす言葉も少なくなっていった。以前なら深麗のほうから話しかけてきてくれたものだが、今では可解斗のほうから話しかけるようにしている。

それでも、何かと理由を付けられてそそくさと退散されるので、まともに会話が出来ないでいた。

「僕、嫌われてるんですかね？」

「そりゃそうだ。いきなり現れて、何の審査もなく門弟に入って、しかも深麗のお嬢と親しげとあっちゃあ、やっかむどころの騒ぎじゃない」

今更、何をか況やとばかりに、元は可解斗の弱々しい問いを一笑に付した。

「他の人が嫌ってるのは、僕だって知ってますよ」

こちらも、うんざりとした様子で呟く。

ついこの間まで、年少部の者達に陰湿ないじめを受けていた可解斗である。幾ら人付き合いが苦手で察しが悪いとは言え、そのくら

いのことには考えが至る。
「でも、深麗さんは違うって、思ってます」
「けっ。知った口を抜かすじゃないか」
「そんなつもりじゃ……」
慌てて否定しようとした可解斗は、元の顔を見てその気を失った。
元の顔はむしろその反応を楽しむように、ほくほくと緩みきっていた。
「確かに深麗さんは、そんなこと考えんよ。むしろ家族が増えるって、喜んでたからなあ」
そんなことを深麗が他の人間に語っていたというのは、可解斗も初耳だった。確かに面と向かって話さすような内容ではないだろう。
なるほど深麗が自分のことを気にかけてくれるのは、そうした事情があったのかと、可解斗は腑に落ちる気分だった。
「とはいえ、考えてみればお前はここに来たばかりだからな。大会には出られないのかもしれない」
「来たばかりだと、やはり具合が悪いんですか？」
元は言いにくそうに悩む。可解斗を気づかっているというよりは、説明の複雑さに困っているようだ。

「その大会ってのはな、劉家の後継を決めるために行われるわけなんだが……」
「それじゃあ、深麗さんはそれに勝たないといけないんですね」
「いや、そうじゃないんだ。というより、それじゃまずいだろ？」
一体何がまずいのか、可解斗には分からなかった。
「だから、それで万が一、後継になる人が負けたらどうするんだ？」
「ど、どうするって、負けたんだから、それは仕方がないのでは？」
元は大きく息を吐き、
「それで済むわけないだろう。あくまで祭典なんだ。これで優勝した奴が、本当に継ぐわけじゃない」
と、さも可解斗の考えの浅さを指摘するように、肩を竦めて言っ

た。
「じゃあ、後継を決めるわけじゃないんですね」
「昔はそういう形だったんだよ。でも今は……なあ？」
などと同意を求められても、それこそここへ来たばかりの可解斗には共感しようのないことだ。
とはいえ、元の言いたいことは理解できた。この大会はあくまで、劉家の後継が出てきたことを祝うための、祭典だということだ。本当にそれで後継を決めるわけではないらしい。
「でも、深麗さまと白なら、優勝出来るんじゃないかな？」
いまいち他の豢竜氏の力量や、深麗自身の力量が分からない可解斗は、曖昧に頷くだけだった。
「やっぱり、深麗さんは強いんですか？」
「同年代で勝てる奴は、まずいないな。大人でも、いい勝負をするだろう」
如何にも訳知り顔で解説してくれた元に、如何にもそれらしく頷きながら、可解斗は昼飯の小龍包を頬張った。

龍の巣に程近い林の中、深麗は白と共に鍛錬に励んでいた。それはまるで、何かに急き立てられるような焦燥を孕んだ、不安を募らせるほど苛烈なものであった。
事実、深麗の心はここ最近、ある事柄に占められて、圧迫されていた。
可解斗と元の二度目の立ち合いを目撃したあの時から、深麗の心はざわめいて治まることがなかった。
元の操る蛟を、二度も真っ向から倒してのけた可解斗の姿は、思い返すだけで今も怖気を禁じえない。
方術も仙術も遁甲も使えないというのに、龍と対すれば、まさに龍のごとき荒々しさで正面からがっぷり四つに組み合い、打ち据え、投げ飛ばしてみせる。

龍と共に生きる豢竜氏から見ても、可解斗の戦いぶりは異常だった。むしろ如何なる職能よりも龍を深く理解している豢竜氏だからこそ、可解斗の異常さが理解出来る。

人間が素のまま、呪法魔術の類も身に付けず、あまつさえ武器の一つも帯びずに龍と相対するのは、無謀を極めた蛮行と言わざるを得ない。

豢竜氏は龍を操るということで、力関係としては龍よりも上かのように誤解されるが、そんなことは天地が逆さになっても有り得ない。あくまで豢竜氏は、龍に寄り添い、龍を世話し、龍とともに生きることで、その力の一端を貸してもらっているだけに過ぎない。

そこのところの理解を間違えば、すなわち龍の膨大な力を、人間がそのまま被ることになる。無論そうした理解が足らずに、犠牲となる豢竜氏も少なくない。

そうした犠牲の中で、豢竜の技は磨かれていったという側面もある。

しかし、可解斗の戦闘は、豢竜の技とは明らかに一線を画している。豢竜氏にとって龍とは頼もしい仲間であり、恐ろしい隣人である。その機嫌を損ねないよう気を使うことはあれど、その頭を殴りつけるようなことはまずない。

そもそも人間の膂力で龍に与えられる衝撃など、たかが知れている。あの堅固な鱗に包まれた彼らにとっては、痛痒にも感じないのだろう。

それが可解斗の場合となれば、鱗を拉ぎ、尾を挫き、首を締め上げるという現象を起こしてしまう。

何もかもがおかしい。龍を殴りつけるのもおかしければ、本当に龍を突き飛ばしてしまうのもおかしい。

そのおかしさが、これから自分に向けられるかもしれないと思うと、深麗は心の平静を保つのが難しかった。

戦慄く唇を押さえるために、右手を添えるのだが、その指さえも

震えてしまっていた。あの龍を一撃で吹き飛ばす一撃を、万に一つも自分が被れば、恐らく人の形を保っていられないだろう。
しかし勝たなければ。豢竜氏ですらない可解斗に、劉家豢竜氏の正統である自分が負けるなんて許されない。それに豢竜大会に出るのは、可解斗だけではない。中国全土から集められた、深麗と同じ歳の豢竜氏が鎬を削るのだ。
あくまで祭典に過ぎないそれを、勝ち抜く意味はないのかもしれない。
それでも、深麗は手を抜くつもりはないし、負けるつもりもない。狙うは優勝それのみである。
既に過去のものとなっている豢竜氏を再興するのが、深麗の悲願である。そのためには強い豢竜氏、強い劉家のイメージを確立させねばならない。

自分以外に、誰がその旗を担えようか。いや、誰にも担わせるつもりはない。劉家正統である自分が力を示さなければならないのだ。
不意に、深麗の頬の生暖かいものが触れた。見れば、白がぐうっと顔を寄せて覗き込んでいる。
「心配しないで、白」
ぱちりと開かれた眼に不安の色を見て取った深麗は、それをかき消すように白の頭を撫で回す。
表情の皆無な蛇の白も、幼少から家族同然に接してきた深麗にしてみれば、これほど表情の豊かな動物はいないと感じられる。
「大丈夫よ。大丈夫……」
白を撫でるたびに、自分の中にあった不安こそが浮き彫りになっていく。
負けるのは、それほど怖くない。だが、白が負けるのが怖い。自分の白が負けてしまう様を見るのが、深麗は何よりも怖い。
負けられない。負けたくない。白を負けさせたくはない。
「勝とうね、白」

くすぐったそうに優しく喉を鳴らし、白は深麗の頬に口を寄せる。

その日、可解斗は深麗、元とともに天袁に呼び出された。何でも重要な話があるということで、直々に伝えたいとのことだった。

程なく通されたのは、天袁の書斎であった。紫檀の机に収まる祖父の姿は、堂で見たときとは違う威圧を秘めている。

その後ろには、影のように信達（シンター）が付き添っている。彼は可解斗が入ってきたときの一度だけきりりと眇めてきたが、すぐに目を伏せて佇立する。

「可解斗よ、豢竜大会のことは知っておるか？」

「はい。聞いております」

そのことなら、既に元から聞かされている。元は可解斗が出られないから話がないのだといったが、その推測はどうやら外れたらしい。

「それに出てみんか？」

やはりそういう話か、などと可解斗が得心していると、後ろに控えていた信達が声を裏返して叫んだ。

「天袁さま！？　それは……」

素っ頓狂に言い縋る信達を、天袁は片手で制する。しかし信達の進言は止まるところを知らない。

「彼はまだここへ来て、半年ほどしか経っておりません。それに成績から言えば、お世辞にも大会に出られるようなものではありませんよ」

「じゃが、元を倒してのけたとあっては、他に推すものがいなかろう」

「ですが彼は、龍を操れないのですよ。豢竜氏ですらない」

「龍を操るだけが、豢竜氏の役目ではない」

正に正論で返されて、さしもの信達も口を噤む。その間に、可解

斗はぐっと腹に力を込めて、天袁をしっかりと見据えた。
「出ます。出たいです」
断固とした口調で、可解斗は言った。その態度に信達が厳しい視線を寄越したが、今さら気にするまでもない。
「開催は来月だ。備えを怠るなよ」
「はい！」
話はそれで終わりらしく、可解斗はそのまま踵を返して部屋を辞した。その背に、信達が天袁にまたも進言しているのを感じたが、それはもう自分の気にするべきことではないと切り捨て、静かに戸を閉めた。
自分の部屋へと帰る中途、可解斗は知り合いの後姿を見つけて声を掛けた。
「深麗さん！」
その艶やかな黒髪は、まさか見間違えるはずがない。果たして振り向いた顔は、深麗であった。
「僕、豢竜大会に出ることになったんですよ」
早速、天袁に言われたことを嬉々として報告する可解斗の様子を、深麗は困ったような伏し目のまま聞いていた。

やがて伝えることがこれといって無くなると、深麗はこくんと首を傾げて小さくお辞儀をした。
「すみません、練習があるので……」
深麗はやんわりと手をかざし、そのままそそくさと歩き去ってしまった。
出来れば把式のときのように、何か助言を貰いたかったのだが、やはり可解斗は避けられているようだ。
何か自分が、深麗の機嫌を損ねるようなことをしたのだろうか。可解斗には一向に心当たりがない。ならば開き直れるかといえば、むしろ逆に、そんなことさえ覚えていないということが失礼に思えて、ますます心が恐慌に陥っていく。

よくよく考えてみると、思い当たる節が全然無いでもない。そもそも深麗は、可解斗が豢竜氏になることに反対していたし、元との二度目の立ち合いでは、彼女の制止を無視してしまった。

深麗が可解斗を嫌いになる要素は、考えてみれば結構な量だけ存在していた。どれも今すぐに挽回することは臨めないだろう。

せめて、豢竜大会までには仲を修復したいものだ。もしかすればその大会で、深麗と戦うはめになるかもしれない。そんなとき、蟠りを残していたくない。

しかしこれと言える方策も思いつかず、可解斗は煩悶としながも七流の修行に明け暮れることとなった。

## 把式流：二

やはりと言うべきか、可解斗は深麗との仲を直すことなど出来ず、うやむやなまま大会当日を迎えてしまった。

その日、劉家の屋敷には多くの外来客が訪れた。一人二人が門から出入りするのは、可解斗も見かけたことがあったが、山の裾まで列を成している光景というのは、圧巻の一言に尽きるものであった。

豢竜氏の家柄として最も栄えている劉家だからこそ出来る祭典であるというのも、これならば納得のいく話しだ。

続々と入ってくる列を眺めている可解斗に、いきなり走り寄る人影があった。可解斗が身を退く間もなく、その人物は目の前に迫っていた。

「あんたか、征竜さまの息子ってのは」

無遠慮に覗き込んでくる大男の声を受けて、他の連中もぞろぞろと誘われるように可解斗の傍へ寄ってくる。

何が起こったのかと可解斗があたふたしている間に、彼は黒山の人だかりに囲まれてしまっていた。皆は口々に「ほう、これが征竜の……」とか、「おやまあ、征竜の旦那にそっくりだあ」などと好き勝手なことを言ってくる。

「皆さん、父と知り合いなんですか？」

「知り合いもいるが、そうじゃないのもいる。そんくらい、あんたの親父は有名だよ」

ここ劉家の中では、もううんざりするほど父親である征竜の武勇伝を聞かされたが、外から来た者達から聞くと、また違って新鮮に感じられるものらしい。

初めに寄ってきた大男は、そのごつい腕で可解斗の肩を叩きながら言った。

「ところで、あんたはどんな龍を使うんだい？」

微かに逡巡したものの、可解斗は正直に、
「僕は、龍を使えません」
と、答えていた。それが豢竜氏を目指すものとしてどれほど恥辱に値するか、今の可解斗なら十分に理解できていた。
皆は可解斗の言葉が聞こえなかったように一拍置いてから、盛大に笑い出した。
「さすが当代随一と言われた豢竜氏の息子だ。謙遜が上手いなあ」
全くもって謙遜など含んでいないのだが、そのように取ってもらえたらしい。しつこく言い募って誤解を解くのも面倒なので、可解斗はその場で適当に言葉を濁すことにした。
どの道、大会で立ち合えば嫌でもばれてしまうのだから、ここで急ぐことはない。
会場へ向かう彼らに力なく手を振って見送り、可解斗も支度を済ませるために寮の部屋へと急いだ。

「これより、豢竜大会を開始する」
寨主である天袁が開催を継げ、豢竜大会が始まった。
豢竜大会は、劉家の後継に相応しい豢竜氏を決めるための大会であり、その昔は実際そのような形で争われたらしい。しかし昨今では、少し事情が違ってくる。
既に数を少なくしている豢竜氏同士が、殺し合いに等しい争いを起こすのはご法度となっている。そのため実際に劉家の後継を決めるのではなく、劉家の後継に決まった豢竜氏の力量を試すための場となっていった。
出場する豢竜氏は、総勢八名。皆、年の頃は十八から二十五と、比較的若い。
後継のお披露目の意味合いが強いこの大会では、出場者について厳しく制限、あるいは審査する。実力が一流であることは大前提だが、年齢は後継となる者の前後五年以内と決めてある。より実力を

拮抗させ、戦いを充実させると共に、実力がより分かりやすく提示できるというのが表向きの理由だが、実際は後継の勝率をなるべく上昇させる制度であることは言うまでもない。

しかし、必ずしも後継が勝つとは限らないのが、この大会である。これだけ保護されていても、実力が足らねば敗北するのは当然の摂理である。実際、過去にもそのような大会は存在していた。

深麗は祖父の演説を聞きながら、流し目で他の出場者を観察する。

黒竜江省から来た黒（ヘイ）は、翼を持つ龍である烏龍を用いる。その隣は朱（チュウ）。代々、火龍の扱いに定評のある家系の出である彼女は、若輩ながら豢竜氏として目覚しい活躍をしている。

そしてもう一人は、呉（ン）。蛟の系統に当たる蜃を操る。

奥にいる巨体は、大会最年長の成（シン）。竜生九子の一種である饕餮（とうてつ）を駆る実力派だ。その隣は同じ河南省の出身である英（イン）。彼も竜生九子の一種、睚眦を扱う。

深麗と同じ劉家豢竜氏の出である元。彼の操る蛟も、決して油断できる相手ではない。

そして、深麗と反対の端にいるのが、彼女の従兄弟に当たる石竜可解斗。厳密に言えば、彼は豢竜氏ではないのだが、天袁の強い後押しがあり、今回の出場と相成った。

贅沢を言えば、可解斗には特に出てほしくなかったと深麗は考えていた。それはかつて彼女が、彼と元の把式を心配したのとは違っていた。

ただ、負けたくなかったから、出てほしくなかったのだ。確かに負ける可能性はあるが、それは他の出場者を相手にしても言えることだから我慢が利く。深麗が心配しているのは、そこではない。龍を用いていながら、龍を用いていない者に負けることが、何より恐ろしいのだ。

もしそんなことになれば、恐らく自分の誇りは形を保てない。一

体自分でもどのような行動に出てしまうか、全く予想がつかないのである。
（いいえ、そんなこと、考えなくていいの）
全ては、勝てばいいのだ。この八人のなかで最も力を有した豢竜氏であることを証明すればいいだけなのだ。負けたときのことに考えを巡らす必要はない。
備えは万全だ。なんの怠りもない。今日この日、自分のためだけに調えられた舞台に上るべく、深麗は積み重ねてきたのだ。
深麗以外の全てが、脇役であり観客だ。彼らは深麗の勝利に花を添えるために、深麗の勝利を誉めそやすために存在する。
――ただ、一人を除いて。
深麗の視線は、可解斗ただ一人に集束していた。
彼だけがこの舞台において、これといった役を与えられていない。いや、与えることが出来ないというべきだ。その性質が特殊であるが故に。
可解斗は深麗と同じ劉家の正統でありながら、深麗や他の豢竜氏と違い、龍を操ることまでの実力を備えていない。それでも出場を許されているのは、龍さえも制することが出来る拳法を有するためだ。
何をとっても扱いかねる属性ばかりつけた、厄介者である。当然、深麗も彼のことを持て余している。
幸い、深麗と可解斗が当たるとすれば、それは決勝戦だ。それまでに可解斗は二人の豢竜氏を倒してみせなければならない。
あるいは、そこで倒されてくれればいいのに。
従姉妹である自分が手を下すよりは、扱いかねる属性と正対するよりは、そのほうが深麗にとって幾分も楽であった。
後ろ向きな思考でも、深麗の気力は一切萎えない。深麗は勝たねばならないのだ。豢竜氏の未来のために、自身の力を誇示しなくてはならないのだ。
それでも万が一、可解斗と深麗が相対することとなれば、手は抜

かない。従姉妹として、豢竜氏の力を余すところ無く伝えるのが、深麗なりの優しさであった。

## 把式流：三

自分の出番が迫り、可解斗の心臓は今にも突き破らんほどに高鳴っていた。最初の把式は、可解斗と呉との対戦であった。門のところで可解斗に一番早く気がついた、あの男である。

伝え聞いたところによれば、呉は若いながらも豢竜氏の間で知られるほどの実力派らしく、大方の予想は彼の勝利で固まっているらしい。

少なからず、事前情報の少ない可解斗に期待する声もある。劉家の後継であり、並ぶ者の無い稀代の豢竜氏、征竜の息子であるという噂がまことしやかに流れ、一体どんな龍を用いるのかということが関心の的になっていた。

そうして期待を、可解斗は申し訳なさそうに聞いていた。残念ながら、可解斗は未だ龍を呼び出し、操るといった芸当は出来ない。それどころか方術・仙術の初歩的なことさえままならずにいる。

既に魔術呪法の類を、可解斗は切り捨てていたた。龍を操るのに必要だとしても、一向に構わない。つまり、龍を操れなくても構わない。

そんなことをしたくて、可解斗はここにいるのではない。

全ては七流を活かすため。龍を倒すために父が作り、可解斗に授けたこの武術を顕すために、ここにいる。他人の期待など、歯牙にもかけないでいいのだ。

ただ、改めて観衆が居ることを意識すると、思わず緊張してしまう。元との最初の把式の時は、舞い上がっていたのでそこまで意識が回らなかった。

「石竜可解斗！」

名を呼ばれ、把式場に上がる。広々とした空間を、ぐるりと観客が囲んでいる。自惚れではなく、皆が自分に好奇の視線を寄越して

いるのが感じられた。
「呉！」
同じく呼ばわれた呉の姿が見えた。可解斗より一回り大きな体躯に、人懐っこい笑顔が乗せられている。
どくんと、一層強く胸が高鳴った。これから戦う相手を見つけて、体が否応無しに準備を整えていく。
先程の高鳴りを最後に、心臓はゆるやかな拍動を保ち、体中の強張りが抜けていく。柔らかくなった肉は鋭敏となり、可解斗の意識を隅々まで伝えてくれる。
心身の充実振りに、可解斗は心の中で強く頷く。これならば、自分の思い通りに体を動かすことが出来そうだ。何も出来ずに逃げ回るような無様な真似だけは回避できるだろう。
「始め！」
審判の合図を受けて、可解斗はすぐに構えを取った。両の掌を相手に向けてゆるく差し出し、右足を引いて荷重をかける。
七流、七の流れ、水。拳足などの打撃を一切廃した、柔の流れである。まずはこの流れで、相手の出方を窺う。無論、既に呼吸は位一の流れ、龍のものとなっている。
可解斗が構えている間に、呉は巻物を抜き放っていた。まるで刀剣の如く鋭く懐から飛び出したそれを、呉は器用に解いてばらまき、中空に円を描いた。
途端、内側を向いた巻物の字面が、一斉に白い煙を噴き出した。それはもうもうと立ち込めながら把式場を大きく占めていく。
可解斗は動かない。動く必要がない。これから現れるものこそ、可解斗の待ち望んだ相手だ。倒すべき、七流を揮うべき相手なのだから。
ほどなく煙が晴れ、現れ出でた姿は、いわゆる龍ではなかった。
「……貝？」
思わず可解斗は、暢気にそんなことを呟いた。

今、彼の目の前にいるのは、黒々とした艶を持つ巨大な二枚貝だった。
「行け、蜃！」
呉が一声掛けると、貝を身を震わせながらばくりと貝殻を開いて叫び上げた。鈍重な牛を思わせる低音が、可解斗の腹を底から揺さぶってくる。
そのまま開いた貝殻を器用に動かし、蜃はぐんと体を上に引き抜いて飛び上がった。
可解斗の周りの地面が、俄かに黒く陰ってゆく。
「おあ！？」
横っ跳びにその場から退いた可解斗だったが、蜃の着地による衝撃を受けてバランスを崩し、地面を転がる羽目になった。
それでも呼吸のリズムは崩さず、すぐに立ち上がって蜃に向かって構える。見れば、蜃の下りた場所は大きく沈み込み、その重量の程が推して知れる。
あれを食らうのは、如何にも拙い。蛟や天禄などの攻撃も尋常ではなかったが、蜃のそれは、単純な威力で言えば一桁か二桁ほど違っている。これは流石に、受け止められない。

貝殻をぐらぐらと揺らし、蜃は可解斗に向き直る。再び飛び上がろうと貝殻を開いた時、可解斗は先んじて飛び出した。
落下攻撃が危ういのならば、そもそも飛び上がらせなければいい。飛び上がろうとする動きの機先を制してしまえばいい。
開こうとする貝殻目掛け、可解斗が真上からその踵を落とした。その勢いで貝殻が下に弾かれ、可解斗もまた跳ね返えされる。
体を入れ替えて足から着地した可解斗は、ぐらりと僅かに姿勢を崩す。
（硬過ぎる。蛟の比じゃない）
じくじくと痛む右の踵を、庇うように後ろへ下げる。
蛟の顎を打ち抜いた踵でも、蜃の貝殻を断ち割るには至らなかっ

た。あの黒い外装は、龍の鱗を上回る硬度を誇るらしい。やはりあれも人智を超えた龍の眷属なのだと、可解斗はようやく実感した。
閉じかけていた蜃の貝の隙間から、どろどろとしたものが漏れてくる。
蜃とはその名のとおり、蜃気楼を作り出す妖怪である。一説には蛟の仲間だと言われており、蛟の精が土の中で五百年を過ごすと、蜃となって現れるとされている。
白い煙はたちまち揮発の程を高め、地を這うばかりではなく、もうもうと立ち込めていく。
別に味も匂いもしないが、可解斗は一応手で口を覆って下がる。やはり敵の吐き出したものである以上、身体に取り入れるのは抵抗があった。
そうしている間に、蜃の黒々とした巨体が、白い幕の中に隠れようとしていた。
いくら煙で見えないとはいえ、相当に巨大な貝である。そうそうに見失ったりはしない。
そんなふうに考えていた可解斗だったが、数分とせずに考えを改め、煙を掻き分けるように進む。
蜃どころか、周りが何も見えはしない。前に出した自分の手が白く煙ってしまうくらいの密度である。
どうやらこの煙は蜃を隠していたのではなく、可解斗を包み込んでいたらしい。泰然と構えている間に、まんまと敵の策略に嵌ってしまったようだ。
まずいことになった。可解斗は恐々として今さら辺りを見回した。
何ら対策が思いつかない。いくら払っても煙は一向に消える様子はない。よしんば、音だけを聞き分けて相手を捉えると言った離れ業くらいしかやることがない。
だがそれも、聞き間違えたらその時点で終わりだ。あののしかかりを食らったら、潰れるというよりは跡形も無く消し飛んでしまう。

恐らく何が起こったのか思いを巡らす間もないだろう。
それはそれで助かるのだが、やはり安穏と待つというのは如何にも忍びない。
可解斗はきゅうと尻を窄ませ、体幹を一気に締め上げた。ぎりぎりと鳴るほど肘と膝を内転させ、ゆっくりと緊張を解きながら息を吐く。
後に残ったのは、緩みつつも正された、立ち姿だった。
十流、四の流れ、木。まさに木の如く身体を真っ直ぐに立たせる、導竜法の発展である。
もはや口だけではない。全身で吸い、全身で吐く。これ以上なく正された体にごうごうと気が入り込み、凝縮されていく。
この流れの目的は、単に姿勢を整えることではない。自然と己を照応せしめ、遍く流れる気運に身を委ねることにある。
不意に、可解斗の感覚が危うくなる。まるで自分という形が、針で突かれた風船のように割れて、中身が零れてしまう寸前の危うさである。
身体が、滲んでいく。白い靄に視界の閉ざされた今では、如実に体感できる。
明らかに感覚が広がっているのが分かる。五感が、自分の取り入れた気を伝い、周囲へと出て行ってしまう。そのまま蜃を捉えるまで、ひたすら可解斗は姿勢を正し続ける。
十流が、発揮されている。その事実が、可解斗の闘志をさらに高めてくれる。このまま一日中突っ立っていてもいいくらいに、心身が充溢する。
すい、と何かが撫でる。それは遠く、広がりきった感覚の端から届いたものだった。
（……上から、来る！）
気が可解斗の中を奔り抜けた。びりりと肉を弾くそれに従い、可解斗はその場から飛び退いた。
途端、可解斗のいた場所の靄が、押し潰された。巨大な黒い塊に

よって、跡形もなく散らされていく。
蜃の落下による衝撃波が、可解斗にも届く。ぐんと引っ張られるように後ろへ飛ばされ、何とか身体を捻って均衡を保って着地する。
あとずさるつま先が轍を刻み、これより下がってたまるかと踏ん張る。その都度に轍は食い込みを深くして、可解斗の足には力がこもってゆく。腕まで地に付けて、さながら四足獣の如くに身を屈めて耐える。
衝撃波が、収まり始める。そして可解斗は、これまで溜めていたものを放つように、真っ直ぐ飛び出した。

瞬く間に蜃へ肉薄した可解斗が、右の拳を引き絞る。背が相手に見えるほど捩じり、左足で大きく震脚する。
「があっ！」
突進の勢いそのままに、右正拳突きを繰り出した。
遠雷でも落ちたかのような音が、堂の中に幾重もこだまする。
蜃の身体が、後ろへ転がっていた。ごろりと仰向けになった貝殻には、一条の亀裂が真ん中を走っている。その隙間から、じくじくと赤いものが湧き出していた。
「蜃！」
呉がその顔を引きつらせながら、ヒステリックなまでに蜃の体を窺う。その様はとても、まだ戦いを続けようという者の態度ではない。
審判もそれを察し、すぐに勝ち名乗りを上げた。
「勝者、石竜可解斗！」
審判の声を聞き、拳を突き出したままだった可解斗は、ゆっくりと余韻を噛み締めるように引き、腰へ納めて残心を済ませた。
可解斗の放った拳は、正龍拳。木の流れにおける唯一の技である。
限界まで正した姿勢と呼吸で身体感覚を鋭敏にし、相手の動きを見切り、絶妙の間に撃する。ただそれだけの技である。
だが、平時に放つそれとは訳が違う。通常の流れよりも気を充満

させて放つ拳は、一撃で文字通り、龍を屠ってみせる。
慎重に呼吸を繰り返し、自分の身体の中から少しずつ気を抜いていく。焦って無理に抜くのは、却って負担が大きい。
ようやく身体が元の重みになったのを見計らい、可解斗はそそくさと試合場を後にした。

## 把式流：四

一回戦の最後となり、大鳥として深麗が試合場に上がる。ただそれだけで観客がどよめき、まだ始まってもいないのに激しい熱気が充満する。

この大会は、深麗のための大会と言っても、過言ではないだろう。劉家期当主の実力を計る祭典なのだから、皆の期待を一身に受けるのは必定と言えた。

その期待に、自分は応えなければならない。それどころか、期待以上のものを提示しなければ、これからの劉家、さらには豢竜氏を背負ってはいけないだろう。

初戦の相手は黒（ヘイ）。彼もまた既に壇上に上がり、開戦を待っている。

やがて審判が用意を整え、高々と上げた腕を振り下ろした。

「始め！」

深麗は静かに符を取り出し、ふわりと床に落とす。はらはらと舞うそれから白の蛇腹が飛び出し、深麗を中心にぐるりととぐろを巻いた。

その威容に、むしろ観客は気圧されて静まってしまう。窓から取り入れられた陽光を受けて濡れるように光る鱗の集まりは、さながら贅を凝らした白磁の像である。一身の全てが白に覆われ、正に名の通りであった。

見られている。皆に、見られている。今度の後継はどうだ？　なるほど白蛇とはな。さてうまく御せるものかな？　訳知り顔の連中の口に何が上っているのか、いちいち聞かなくても分かってしまう。

それでいい。そうして注目するがいい。どれだけ見られようと、期待されようと、応える覚悟は出来ている。

対するは、翼の生えた龍、烏龍を操る黒である。大きさから言えば明らかに白に分があるものの、翼を用いた機動力は侮れない。

侮るつもりも、油断するつもりもない。そして、負けるつもりもない。

ここには勝利しか置いていかない。勝利しか取り上げない。他の全ては、相手にくれてやる。

「行こう、白」

くうっと高く嘶いて、白がそれに答えた。蛇腹を引きずって進む白に倣い、黒も烏龍に下知を下した。

「キャヒイイイ！」

劈くような声を張り上げて、烏龍が舞い上がる。天井すれすれを、目も眩むような速度で激しく旋回している。

やはり黒ほどの豢竜氏ならば、こういうところは外さない。烏龍の特性を生かした、実に基本的な戦法だ。

翼を生かして敵の攻撃の届かぬところまで上昇し、縦横無尽に飛び回って相手に攻撃を加えるのが、烏龍やそれに似た龍の常識的運用である。

ならばそこからの行動も、実に常識的なものになる。

鋭く尖った爪が、ぴたりと深麗に合わせられて落ちてきた。

それを白が間に入って防ぐ。湾曲した鉤爪が白の肉に食い込む。

白は呻き声一つ上げず、むしろ自分の身体に取り付いた烏龍に口を向かわせた。そのまま咥え込んでしまおうという腹積もりだ。

烏龍もそれを感じ取ったのか、慌しく羽ばたいて爪を抜き取り、またひらりと舞い上がる。追って白が蛇腹を伸ばすが、烏龍の羽ばたきには追いつけない。

深麗にも、そろそろ黒、もとい烏龍の狙いが見えてきた。

徹底した豢竜氏狙い。高い機動力を活かした作戦と言ったところか。相手の龍とはまともにやり合わずあしらい、隙を突いて豢竜氏を襲う。

機動力を生かす基礎的な運用までは良かったが、その後は良くな

い戦略だと、深麗は素直に思った。
確かに豢竜氏との戦いは、龍を操る豢竜氏自体を狙うのが定石と言える。それぞれが一騎当千の獣である龍に比べれば、単なる人間の身に過ぎない豢竜氏の方が脆い。
故に、豢竜氏だけを狙う戦略は、決して悪くない。だが深麗は、そんな戦い方は嫌いだった。
豢竜氏が相手にするのは、何も豢竜氏ばかりではない。むしろ他の場合が多い。中国全土に蔓延る妖怪たち。方術仙術を用いて悪事を行う妖術師。それらを打ち倒すことも、豢竜氏の大事な使命である。
ならば、脆い人間一人を倒して終わりと言う戦い方は汎用性を欠く。そもそも、龍を用いておいて戦略を云々すること自体が間違いなのだ。
龍はそれ自体で強いのだ。戦略などと言う人の理屈で、龍を縛っていいわけがない。そんな浅はかな行いは、却って龍本来の力を台無しにしてしまう。
「……白」
豢竜氏の仕事は、龍の邪魔をすることでは断じて有り得ない。龍の力――神代の力を過不足なく発揮させる手助けをすれば、それだけで事足りるのだ。
「払いなさい」
深麗の令に、白が身を震わせて答える。
白が深麗を中心にとぐろを巻き、ぎりぎりと身を撓ませる。白い鱗の中に潜む強靭なバネが、引き絞られていく様が見えるようだ。
動きを止めた白に、烏龍が容赦なく爪を立てる。通り過ぎ様に爪が潜り込み、ざっくりと赤く引き裂いていく。
真っ白だった白の体から、容赦なく血が飛沫を上げる。如何に生命力に優れた白蛇とはいえ、止むことの無い烏龍の爪に晒されて、傷を治す暇も与えられないのでは、回復のしようがない。

それでも白は微動だにしない。己の主人である深麗の包むとぐろに、寸毫の間すら生じさせない。
「ヒヒャアア！」
烏龍が嘶き、一際高く、遠く離れる。うんと加速をつけた鉤爪の一撃で、白の胴体を輪切りにする算段だ。
これまえ以上に加速した烏龍が、風を切って降下する。
そのとき、ようやく白の体が蠢いた。
堂の中に、血の飛沫がばら撒かれる。巻かれたはずのとぐろが、一気に解き放たれた。
旋風のように回転する白の尾へと、烏龍が突進していく。必殺を期して行った降下は、おいそれと止められるものではない。
血風を伴って旋転する尾が、烏龍を幾度となく打ち据える。打撃の連環から抜け出そうと羽をバタつかせるのだが、それが却って同じ場所に留まる助けとなり、連続して尾を食らい続ける。
とうとう烏龍の体が地面に叩きつけられ、黒が駆け寄った。すぐに烏龍を符の中にしまい、審判に対して首を振る。
その意を汲み取った審判が、深麗に向かって手を差し伸べる。
「勝者、劉深麗！」
深麗は思わず、小さく手を握り締めていた。
まずは危なげなく一勝を取れた。この調子で、あと三回だけ勝てばいいのだ。
「簡単、簡単、簡単……」
白の頭を撫でながら、深麗は言い聞かせるように何度も呟いた。白の体に付いていた傷は、見る間に癒えてゆく。水面に広がる油膜のように、白磁の鱗が元の姿を取り戻してゆく。既に、次の戦いの準備は万全だった。

深麗の把式を見ていた可解斗は、改めて戦慄する思いだった。白の戦いぶりを見るのは二度目だが、身震いを誘う何かがこみ上げて

くる。
幾ら斬り付け、抉られようとも瞬時に回復してみせる超常の生命力。果たして自分にあれが破れるのかと自問しても、答えは返ってこない。
恐らくは殴れるし、蹴りも届くだろう。蛟さえ殴りつけてみせた可解斗だ。そのくらいの芸当は出来ると、今では確信している。
だが、そこから先はどうだろうか？　あの白の生命力を空っぽに出来るほどの力が、自分には宿っているのだろうか？　よしんば宿っているとして、それを上手く白に伝えられるだろうか？
「勝ったみたいだな、石竜」
煩悶と悩んでいると、いきなり後ろから肩を叩かれた。その声は、可解斗のよく知るものであった。
「元さんも、おめでとうございます」
振り向いて、可解斗は元に頭を下げた。
大袈裟だな。元は肩を叩きながら言った。彼もまた大会に出場し、可解斗や深麗と同じく初戦を突破していた。
「お前の次の相手は？」
「えっと……英（イン）という人だそうです」
たどたどしく思い出しながら、可解斗は言う。
実のところ、可解斗は次の対戦相手のことを考えていなかった。その心は、今しがた見た深麗のことに割かれていた。
「ああ、あいつか」
「知ってるんですか？」
「前に仕事で、一緒になったんだ」
それを聞いて、可解斗の心が少しだけ動く。やはり次に戦う相手となれば、少しでもその概要を知っておきたい。
「どんな人ですか？」
可解斗は、表情を押し隠して問うた。しかし、そんなことくらいでは隠しきれるはずもなかった。
「知りたいか？」

語尾を上げて覗き込んでくる元は、分かりやすいくらいに顔を歪ませている。
「知りたいです」
それを正面から見つめ、今度は何も隠そうとせずに言う。日本に居た頃の可解斗であったなら、この時点で目を逸らしていたことだろう。
今は、きちんと見れる。多少、迂遠にしてしまいがちだが、相手の目はきちんと見ることが出来る。
「嫌だ。公平じゃないだろう」
すっぱりとした口調で、元は切り捨てた。言われてみれば然りである。相手のことを知ると言うのは、戦いに置いては重要なことだ。

しかしこの場はあくまで大会。自分の力を試す場である。相手に勝つだの負けるだのは、二の次と言っていいのかもしれない。それよりも重要なのは、全力を出し切ること。自分の出来ること全てを、その場その時に発揮することである。
「お前、もう少し食いつけよ」
今度の元は残念そうに顔をしかめている。嫌だと言ったり食いつけと言ったり、何とも忙しい人だな、と可解斗はぼんやり思っていた。
「いいです。元さんの言い分には一理あるんで、会った時の楽しみにしておきます」
「ったく。真面目くさりやがって」
軽く肩にパンチを食らわせて、元はにやけていた。
ふと時計を見れば、次の試合の時間が迫っていた。可解斗は軽く体を動かして、調子を確かめる。蜃を叩いて踵や拳を痛めていたが、それも気にならないほどに小さくなっている。
「じゃあ、そろそろ……」
立ち上がった可解斗の裾が、ぐいと引っ張られる。思わずよろけた体が、元の腕に抱えられた。

「負けんなよ。次勝てば、俺とだかんな」
次に可解斗が勝ち、元が勝てば、二人は次の試合で戦うことになる。実現すれば、可解斗はとうとう元と三回も戦う羽目になってしまう。
どう返したものか、可解斗は良い切り返しが思いつかず、とりあえず笑って頷いておいた。

## 把式流：五

またも逸る動悸を抑えつけながら、可解斗は壇上に登る。先に待っていた相手――英の向けてくる視線は、心なしか険しく感じる。もしかすれば、先の可解斗の戦いを見て、警戒を強めたのかもしれない。油断し、軽んじられるよりは幾分もマシな反応である。

可解斗は導龍法を繰り返し、開戦のときを今か今かと待ち構えていた。

「始め！」

審判の声とともに、英が腰に差していた小刀の鯉口を切ると、そこからするりと、まるで端から脇にでも控えていたかのように、一頭の犬が彼の前に躍り出た。

よく見れば、それは犬ではなかった。形それ自体は犬か、あるいは狼と言えるのだが、所々に異様な肉の盛り上がりが窺える。捲れ上がった口吻から垣間見える牙は、一つ一つが刀の如くに鋭くて太い。

あんなもので噛み付かれたら、ぞぶりと骨肉がまるごと喰らわれてしまうだろう。あの口に対して、腕の防御は何ら意味を成さない。

その龍が向ける眦は、今まで会ってきた龍の比ではない。如何に龍眼と言えど、蛟も、白も、天禄も、辟邪も、さすがにこれほどの眼光を有してはいなかった。

その喰らい殺すような眼差し。犬や狼に似た体。これが音に聞く睚眦（がいし）というものか。

可解斗はこれまでに学んだ知識の中から、その龍の名前を照覧した。

睚眦とは、龍の子の一種であると言われる獣である。その気性は極めて荒く、自ら好んで争い、人や他の獣を殺すことを性とする。さらに睚眦の字はどちらも眼を表し、転じて怒り睨むことを指すよ

うになったという。
眼の化け物。なるほどその射竦めるような睨みは、他の龍と一線を画すものがある。
「行け！」
英の合図と同時に、睚眦は嘶きを上げて走り出した。猛進してくる龍を前にして、可解斗はゆるりと掌を前に差し出す。
睚眦の気性を受け流し、あるいは受け止めるように、優しげとも言える仕草で前に出る。
「あがああ！」
突き出た口が一直線に、可解斗の喉だけを目指して走り来る。可解斗は臆することなく、その頭目掛けて掌を突き出した。
睚眦の鼻っ柱を平手で押さえ、突進を切る。空かされた睚眦は、今度はその手に噛み付こうとする。
そしてふわりと、軽く手を上げる。それを追って、睚眦の頭が高く上がった。睚眦の柔い喉が、顕となる。
「ひゅ――」
短く呼気を吐いて、左の指を尖らせる。腰の辺りから飛び出したそれは、湾曲した軌道を描いて睚眦の喉を抉った。返す刀で右の手刀を首に叩きつける。
喉と首を打ち据えられ、たまらず睚眦は呻いて下がる。
翻って、可解斗は今しがた睚眦に当てた右の手刀をまじまじと見つめていた。
どうも調子が出ない。力の乗りと言うか、腹の底にある滾りがいまいち足りていない。蛟や天禄を打ったときは、肉を絶つほどに打ち抜いた手応えがあったはずだ。
特別に睚眦が堅いのか。それとも自分が何かしくじったのか。
打つ際にも特段の失敗は感じなかった。いつもの通り、いつもの踏み込みで、いつものタイミングで打っていた。こうしてやろうといちいち考えるまでもなく、体が七流をなぞるようになっている。

失敗などしようはずがない。
一抹の不安は感じるものの、それで手がとまるはずもない。離れた間合いを詰めるように、踏み込んでの後ろ回し蹴りを行う。
風を鳴らして繰り出された踵が、何にも当たらず通り抜ける。その空虚な手応えが、可解斗に怖気を走らせる。
睚眦の体が、股下から覗き込んでいる。眼もそうだが、開かれた口のきらめきが眩しい。
「ひい！」
可解斗は小さく、歯の隙間から息を吸い込んだ。
右脚を戻しながら、左の腕刀を落としに掛かる。睚眦が狙っているのは、可解斗の股間だ。そんなところをあの牙でぞろりと撫でられたらと思うだけで、身の毛がよだってしまう。
持ち上がる睚眦の頭を、腕刀が横から強かに叩いた。横っ面を弾かれて、睚眦は大きく首を捩じりながら吹き飛んでいく。
その口からは、血が糸を引いていた。遅れて、可解斗が堪らず膝を折る。
牙に太腿を撫でられ、服ごと肉が持っていかれている。今そこを触れば、凹んでいることが分かるだろう。無造作に食い破られた箇所が血を吹いて、左の足が真っ赤に染まっていく。
見るまでも、触るまでもない。炎のように立ち昇る激痛が、傷の程を如実に伝えてくれる。このまま股の辺りから熔けて、脚がもげてしまうのではないか。そのまま中身も痛みで熔けてしまうのではないか。
「そんなこと、有り得ない……」
深い、洞穴の底からにじるような声が、自然と口を付いた。
この程度の痛みで、熔けてしまうものか。もげてしまうものか。
これっぽっちの熱で、死んでしまうものか。
これほどの熱よりも、可解斗は熱いものを抱えている。腹の底にごろりと無造作に据えられているものは、痛みより何より可解斗の体を焼いて苛む。

ようやく、可解斗の腹がじりじりと燃えてくる。導竜法の呼吸を繰り返す度に、抉られた傷を打ち消すほどの熱が醸成される。
腰の辺りを押さえていた手を外し、可解斗は構える。拳を眼の高さまで上げて、中心に絞り込む。
十流、五の流れ、火。打撃に特化した激しい攻めを旨とする構えである。
踵を浮かせてリズムを取るたびに、足元のの泥濘が増えていく。だがそんなことに一切頓着せず、今度は可解斗のほうから睚眦に向かって飛び出した。

大事な一触目。可解斗は拳を鼻先にばら撒いた。
巧妙に頭を振ってそれを避けた睚眦が、またも下方から寄り来る。凝りもせず股間狙いだ。
ちょうど昇ってきた睚眦の顎に、可解斗の左膝がぶち当たっていた。カウンターで命中し、一撃で見事に下顎が拉げている。
それでも牙を剥いてくる睚眦の頭に、左右の振り打ちをお見舞いする。
迅速の連撃がぶるりと睚眦を揺さぶり、たたらを踏んでいる間に可解斗は大きく踏み込み、深く腰を落とす。
横に薙ぎ払う回し蹴りが、睚眦の頭に命中する。高い角度から切り落とすように行われたそれは、睚眦の頭を床に叩きつけた。
可解斗の左足から漏れる血と、自身が吐き出した血とで、睚眦の頭がみどろとなる。
起き上がる睚眦に向かって、可解斗がさらに蹴りを放つ。つま先をうんと伸ばした前蹴りで喉を突き、右の肘を脳天に振り下ろす。
さらに左の振り打ちをかまし、首を真横に突き飛ばす。
「がああっ」
可解斗の拳足が、的確に睚眦を打ち据える。
まるで動物を虐待しているような絵面だが、そうではない。そうあるべきではない。戦っているのは、龍と人なのだ。

誰一人、声を上げるものはいない。皆が目の前の光景を、息を呑んで見入っているのだ。
豢竜氏であればこそ分かる異常。龍と人ががっぷり四つに組み合い、打ち合う様など在り得ない。在ってはならない。その常識が覆っている。

元は唸りながら、可解斗の把式を食い入るように見つめていた。周りを見れば、他の者達も目を離せないでいる。
自分は今まで二度ほど間近で目撃してきたが、こうして離れてみてみると、その異様が浮かび上がるような気がした。
「気持ち悪い……」
元の隣にいた豢竜氏の娘が、一言だけ呟いた。
確かにその感想は、元も大いに賛同するところである。人間のくせに龍と同等に、真っ当に戦う様は、ある種の禁忌、もしくは倒錯したものを感じさせる。
誰だって、そうしたいのだ。豢竜氏なら、一度は思う。龍と、思う存分やり合ってみたいと。まるで人のように、まるで龍のように、がむしゃらに戦いたいと。
その理想が、眼前に提示されている。手の届く場所まで近づいてくれている。だが、まさか手に入れようとは思わない。
これは豢竜氏にとって、触れるべきではない禁忌だ。龍を操る誇りを根底から揺さぶる異常だ。そんなことが出来たら、もう豢竜氏ではない。
「しょ、勝者、石竜可解斗！」
審判の止めが入り、ようやく可解斗も止まる。崩れ落ちる睚眦を英が抱きとめる。
その様を冷然と見守ってから、可解斗は悠然とした足取りで試合場を後にした。
足の抉れは、瑕疵ほどにも思ってはいないようであった。味気な

いまでの勝利が、可解斗の成熟ぶりを表しているように思える。元は腹の底から、体の熱が逃げていくのを如実に感じていた。

果たしてこんな体調で、万全に戦えるのだろうか。元にはとんと自信が湧かなかった。

## 把式流：六

深麗の相手は、饕餮（とうてつ）を操る豢竜氏であった。
竜生九子の一匹である饕餮は、あらゆるものをむさぼる貪欲な怪物である。頭は人に似、目は脇の下から睨み、口から虎の歯を覗かせて、嬰児の如く泣き喚いて食らうと言う。
鉄のような鈍い色をした肌を全身にまとっている饕餮は、持て余すほどの巨体を揺らして寄り来る。あの蜃に迫るほどの大きさだが、動きは如何にも鈍い。
気性からして貪欲な饕餮は、己が食らいたいものを食らおうとするため、総じてわがままに育つ場合が多い。豢竜氏がうまくそれを統制してやらねば際限なく肥え太り、その動きを鈍らせてしまう。
饕餮は特に扱いの難しい龍の一種だが、それだけに強力である。あらゆる魔物を食らいつくすその様は、魔除けとして古代から珍重されてきた。わがままであろうと、太っていようと、その大きな体と何もかもを食らう口は、十分に脅威である。
本来は竜生九子などは、龍の紛いとして豢竜氏の間では倦厭されてきた。だが龍の系統である以上、その技術は応用できる。

年々、豢竜氏の質は落ち、こうした龍の紛いに手を出すものも少なくない。むしろ深麗個人としては、豢竜氏としての幅が広がっていくのだと考えており、好意的に捉えている。しかしそれが豢竜氏の衰退と同時して行われるのは、やはり耐え難い。
既に白を呼び出しており、準備は万端。全て調っている。
「始め！」
審判の合図と共に、深麗は白に令を下した。波乗りのようにうねる白が、饕餮に対して大きく回りこむ。
動きの遅い饕餮は、白の激しい遷移を追いきれない。
容易に背後を取った白が、饕餮の首に横から噛み付いた。顎を外

して不自然に広がった口が、饕餮の寸胴な首を挟みこんでいる。
「おおがあああ」
饕餮は必死に振り払おうとするのだが、その肥満体型のせいで手が届かない。その間に白の口が見る間に狭まっていく。さらに長い体を巻きつけ、白は饕餮の体を締め上げ始めた。
「ぎゃひいいい！」
みっともないほどの叫びを上げたのは、白のほうだった。
白は締め上げていた体を自分から振りほどいてしまう。
尾の先からずるずると血を引きずり、白は饕餮を睨みつける。その尾は、もう半分以上が無くなっている。
饕餮はまだ旨そうに白の尾を咀嚼している。それでようやく彼の食欲に火がついたのか、脇の下にあった目がこれまで以上に大きく見開かれる。
魔を退ける眼。古来から青銅器に刻まれてきた饕餮文そのままの厳つさで、白を睨みつけてくる。
「ごあああ！」
掴みにきた饕餮の腕に白が噛み付き、それを無理やり咥えて引き倒した。

巨大な質量同士が遠慮なくぶつかり合う。その迫力は畏怖を通り越して、思わず血湧き肉踊ってしまう。
やはり、こうでなくてはならない。龍と龍の戦い、豢竜氏同士の戦いは、こうでなくては――。
「深麗さま、相変わらず素敵すぎるぜ……」
体中に包帯を巻きながら、元はしみじみと呟いた。
「そういえば元さん、試合どうだったんですか？」
太鼓を矢鱈に打ち鳴らされたような空間で、元の隣にいた可解斗は訊ねた。
「……けた」

「え！？　何すか？　聞こえませんよ！」
「負けたよ！　二回戦敗退だよ！」
可解斗の把式を見たときの動揺をそのまま持ち越してしまった元は、元が着替えから返ってくるよりも早く負けてしまった。
殊更伝えたいことではなかったので黙っていたのだが、いざ訊ねられるとそれこそ動揺してしまう。
「ところで元さん、休まなくていいのかい？」
早めに負けはしたものの、手酷く痛めつけられていた元は、大仰に包帯を巻いている。
可解斗だけでなく、他の者達にも心配されているのだが、当の本人はそれが煩わしいらしい。
「これ見る以上の薬があるかよ」
お前もちゃんと見とけ。次やるんだからよ。元に無理やり首を曲げられ、饕餮と白の激突に目を向ける。
確かに、目の前の光景以上に豢竜氏を奮い立たせるものなど無いだろう。かく言う可解斗も思わず拳を握り締め、腹の底に力を込めていた。
何より、音がいい。どしん、ごちん、がしゃん。空気を破るほどに重苦しい音がいい。このまま自分の中にある諸々が、綺麗に破れて無くなってしまうようだ。それが気持ちいい。
「深麗さん、頑張れ！」
気がついたときには、もう叫んでいた。
「勝って、勝ってください！」
可解斗の応援に答えたのは、白の嘶きであった。

深麗は既に、勝利を予感していた。
白の尾は完全に復元されている。如何に体を食われようが、白の生命力はたちまち復元してみせる。単なる消耗戦ならば、この白に勝てる龍などいない。

対して饕餮はただただ白ににじり寄り、腹のところにある大きな口を差し向けるだけだ。よほど白の味が気に入ったのだろう。だが肥満体系の饕餮と、きりりと引き締まった蛇腹を持つ白では、体の速度に大きな開きがある。食われるも何も、饕餮の攻撃は殆ど白に届いてはいない。

白が饕餮の動きに慣れ始めたのもあるが、饕餮の動きが明らかに鈍っている。どう考えても体力の限界が近いと見て取れる。

きちんと節制して厳しく育てないから、そんな無様を晒すのだ。勿論、深麗はそのように白を甘やかしたりはしていない。毎日定量、決まった時間に決まっただけの量しか与えない。そして自分も白と同じように、決まった量を決まった時間に食べる。

そうでないと不公平であり、何よりも龍と心が離れてしまう。どちらかと言えば、そのほうが豢竜氏として致命的だろう。

(最後はあの技で決めてみようかしら)

今の圧倒ぶりなら、勝ち方まで演出できるかもしれない。

一応は白にも、技と呼べるものが備わっている。

どちらかと言えば魔術に近い上に相性によってとてもよく効いたり、全く効かなかったりするので、その辺の見極めを間違ったらむしろ不利に働くという、正直言って使い勝手は良くない技である。

「白、お哭きなさい！」

深麗の指示を受けて、白は蛇腹を震わせる。秘中の技を繰り出す準備を整え始める。

饕餮に効くかどうかは怪しいが、既に十分痛めつけたのだ。駄目押しくらいには働いてくれるだろう。

白の叫びが放たれれば、この場にいる龍たちはその影響から免れない。間近にいる饕餮は言わずもがなである。

よしんば気がついて、鈍い饕餮の動きではすぐに止めに入ることは出来ないだろう。

これにて決着と相成る。深麗が勝利を前借して、その高揚にほく

そ笑んだ。
「モオオ――」
いよいよ白が啼き始めたとき、ごうと物凄い音が重なった。
「え！？」
深麗は顔を引きつらせたまま、呆然と白が饕餮に押し倒されるのを眺めていた。
白が啼き出した直後、これまでとは比べ物にならぬ速度で饕餮が動き、その体ごと白にぶつけていた。
目の前で正に白が食われていくなか、深麗は呆然と佇立していた。
まさかこのような隠し玉を持っていたとは、全くの想定外だった。あの鈍重な動きから、先程の弾丸に優る突進をどのように想像すればいいのか。
何をどう指示すればいいのか、まるで思いつかない。このままでは審判に負けを宣言されてしまう。急がねばならないことは分かるのに、考えはひたすら上っすべりだ。何の取っ掛かりも見つけられない。

そうこうしている間に、白の頭が饕餮の口に飲み込まれた。
「白！？」
深麗の悲痛な叫びが、審判にとって決定的なものだったらしい。腕を振り上げて、まさに勝ち名乗りを上げようとしている。
「勝者――」
「ガギャアアアア！」
審判の声を掻き消して、饕餮が喚き散らす。思わず審判が手を止めている内に、饕餮は見ているものを不安たらしめて余りある痙攣を繰り返していた。
やがて頭頂がもぞりと膨らみ、真っ二つに割れて勢いよく血が飛沫を上げた。一際太い血の流れが飛び出し、どろどろと饕餮の体を這って壇上の降りる。
その姿に、深麗は見覚えがあった。全身が血みどろになっていは

いるが、それは間違いなく自分の龍――白であった。
饕餮の体内を食い破り、白が姿を現したのだ。
遅れて、饕餮が後方へと倒れこむ。もはや身じろぎ一つ起こしはしない。
「勝者、劉深麗！」
審判の声を聞いて、深麗はやっと白の許に駆け寄った。急ぎ血を拭い、その顔を撫で回してやる。
今回は、超回復力を有する白のおかげで何とか拾えた一勝だ。自分はまるで役に立っていなかった。むしろ邪魔さえしてしまった。
豢竜氏にあるまじき失態だ。劉家の後継が聞いて呆れる。自尊心を満たすために龍を動かそうとするなど、恥ずべき行いだ。
深麗は白の体を符の中にしまうと、逃げるように壇上を後にした。実際、穴があったらすぐさま飛び込んで蓋をしてもらいたい気分だった。
こんな自分は、これから可解斗と戦うのだ。龍を素手で圧倒する人間と、戦わなければならないのだ。
ゆっくりと頭を振るい、そんな考えを払う。考えずとも、すぐにその答えは出る。残酷なまでに力強く、確かな答えが出てしまう。
深麗の、勝利と言う形で――。

先ほど恥を晒したにもかかわらず――だからこそ、深麗は自分の勝利を信じている。
信じずには、いられなかった。
突然現れた、深麗の従弟。そのことを聞かされたとき、彼女は驚き、そして喜んだものだ。
深麗の両親は、既に亡くなっている。兄弟もいない。親戚はいるが、そう親しくはない。
そして告げられた、新たな家族の存在。彼女の父の弟である征竜の息子が、日本で暮らしていると言う。天袁は彼をここに招き、豢竜氏として育てたいと言った。

最初、深麗は反対した。日本で普通の生活を営んでいたものを、無理やりこの世界に引き込むのは忍びなかった。その一方で、会いたいという気持ちも存在していた。あの征竜の息子。自分の従弟。それは深麗の関心を引かずにはおかなかった。

新しい、家族。自分だけの、自分のための、自分の家族。

その家族に、深麗は龍をけしかけようとしている。存外、彼女にとって可解斗の存在は軽いのかもしれない。多少は血の繋がっているとはいえ、まだ会って一年も経っていないのだから、無理もないのだろう。

仲が問題なのではない。血の繋がりも関係ない。參竜氏としての成功も、違う。

戦いたいのだ。試みたいのだ。挑みたいのだ。受けたいのだ。自分の家族を、あの可解斗を――。

「白、勝てるよね。私は、勝てるよね？」

龍にこんなことを聞く自分は、何と惨めな存在なのだろう。それでも、構わない。一人で戦うわけではないのだ。白と一緒に、戦うのだ。

可解斗は一人だ。自分が傍からいなくなれば、本当に一人だ。たった一人で、彼は龍に挑むのだ。

勝てる。勝つ。勝たねばならない。ただでさえ一対二。そして龍対人。勝って当然の当たり前。

そう思えば思うほど、深麗は自分の体が震えてくるのが分かってしまう。

可解斗が相手となれば話は違う。あれを人間として扱うことが間違いだろう。龍とまともに遣り合って、しかも勝てる生物を、果たして人間の範疇に納めるべきかどうか疑わしい。

あれと戦うのだ。自分と白は、あの化け物とこれから戦わねばならないのだ。そして、勝たねばならないのだ。

簡単に押し潰せそうでいて、こちらが踏みにじられそうな気もす

る。そのどちらでも、ないという気もしている。
「白、白……」
吸い付くような白磁の鱗に、手を這わせて縋りつく。自分の震えを龍に伝えてしまうようにして、深麗は体を寄せる。
くうっと、白が喉を鳴らす。揺れる喉が、深麗の体まで震わせる。
自分から沸き上がる震えとは、一線を画すそれが、深麗の臍の辺りまで伝わっていく。
「行こう、白」
白が高い嘶きを、勝ち鬨の如く上げた。

## 把式流：七

いよいよ決勝となり、壇上では可解斗と深麗が向かい合っている。目の前の可解斗は、ひどく困り果てた顔をしている。どうやら今さら深麗と相対すると言う事実に気がつき、それを持て余しているようだ。

「あ、あの……深麗、さん」

しかもこれから戦おうと言うのに、にへらと笑いながら声さえ掛けてきた。

まるで初めて可解斗が連れてこられた夜のことを、深麗は思い出してしまいそうだった。ここ最近の成長は目まぐるしいが、根本のところは変わらないらしい。

「勝ちます。私が、勝ちますよ」

可解斗の方を向いて、深麗は強く言い放った。そういえば、可解斗と会話をするのは久し振りだと、深麗は気がついた。会話と呼べるものかどうかは、甚だ疑問だが――。

「そうかも、しれません……」

意外にも、可解斗は悄然としながら頷いた。てっきり深麗は、否定してくるかと思っていた。

「深麗さん、強いから」

「はい。だから、勝ちますよ。勝ちますからね」

この場にいる全員に言い聞かせるように、強く言葉を吐き出す。

ああ、と可解斗が呻く。若干、顔が赤い。

「初めて、深麗さんの声を聞いた気がします」

今度は深麗の方が。顔を赤くする番だった。耐え難いほどの火照りを感じ、思わず目を背ける。

「絶対、あなたに勝ちます」

視線を下に落としたまま、もう一度、深麗は言った。

「開始！」

二人のやり取りなど斟酌せず、審判は把式を始めた。

可解斗がゆるりと構えを取り、深麗は符を抜き放つ。

早速呼び出された白はその体を巻いてとぐろを成し、可解斗を見下ろしている。蛟のように水を操らないし、天禄たちのように雷を打ち出さないし、睚眦ほどの眼力もない。

そんなものは、いらないのかもしれない。ただひたすらに力を、龍と言う存在をそのまま顕せれば、このようになるのかもしれない。

足の感覚が無い。本当に今、自分が立っているのかさえ分からない。足元から昇る震えで、何も分からない。

嫌ではない。こういう震えは、嫌いではない。震えが腹に至ると、可解斗の体にぼうっと熱が灯る。それは野火の如く血管を駆け巡り、肉という肉を焼き焦がして違うものに変えてしまう。

龍と戦うための、熱い熱い体に、作り変えてしまう。何もかもが、そのまま入れ替えたように変わってしまう。

毛が逆立つ。皮が痺れる。もう、止まらない。

低く、そして真っ直ぐ、可解斗は白へと飛び出した。高い位置にある白の頭に、いきなりの龍環腿を繰り出す。

翻る白の頭を通り越して、可解斗の足が空を切る。そこへ跳ね返るのは、大きく開かれた白の口である。

二連の蹴りから、さらに体を捻って飛び出す縦の後ろ回し蹴り――臥龍尾が、白の上顎を突き上げる。

見事命中して白の頭が上を向き、反動で可解斗の体は下の落ちる。何とか飲み込まれるのは防ぐことが出来た。

「おおお！」

着地ざま、可解斗は目の前にあった白の蛇腹に拳を叩き込む。銅鑼を打ち鳴らしたような音を上げて、白の体が後ろにずれた。

左の追い突きで追撃をかけるが、可解斗の踏み込みと同時して、白の尾が振るわれる。

打ち出しかけていた左腕の軌道を無理やり変えて、ぐっと固めて頭の横に置いた。そこへ狂いなく、白の太い尾が横殴りに叩きつけられた。
足からまるごと引き抜かれたように吹き飛ばされ、可解斗が試合場の端まで転がる。
切れた口から、つつと血の筋が垂れる。可解斗はそれを拭い、すぐに立ち上がった。まだ頭の中がぼんやりとして心許ない。防御を挟んでなお、脳を揺らされてしまった。気絶しなかっただけ御の字というものだ。
白が自身の体を目一杯に伸ばし、尾を振り下ろしてくる。今度は間合いが遠い。むしろよく見えるし、落ち着いて対応できる。
右斜めに僅か踏み込み、尾の叩きつけを見切ると、可解斗は降ろされた白の尾に足を掛けた。
七竜の歩法、龍伝を用い、白の頭へともう一度近づく。そうはさせまいと、白は嫌がるように身を捩って振り落とそうとする。
複雑にうねる白の体を、まるで熟練の波乗りのように御して、可解斗は執拗に食い下がる。
「きひゃあっ」
いよいよ間近に迫った可解斗に、白の方から牙を剥いた。
白の頭を左手で押して無理やり捌き、右の手刀を横から振り抜いた。それはぐわりと開いた頬の肉を、喉の辺りまで一直線に引き裂いた。
白の右頬から首の付け根までが捲れ上がる。白い鱗に下にある赤々として瑞々しい肉が覗いている。
「がぎゃあ」
苦しそうに呻きながらも、既に回復が始まり、傷が塞がりかけている。
可解斗は白を引き裂いた手を戻さず、そのままさらに奥へと突っ込んだ。喉の裏にある堅い何かを求めて、肩までを押し込んで肉の

中を弄る。
傷が完全にふさがれ、可解斗の腕は白の体に囚われる形となった。治癒していく肉が盛り上がり、可解斗の腕を圧迫する。
「ぬうう！」
肉の盛り上がりに負けぬよう、さらに右腕へ力を込める。口から取り入れた気を丹田で回し、腕に流入させる。
暴れまわる白を押さえ込み、右の手は必死に感触を求める。この尋常ならざる生命力を有した化け物を殺すための、必殺の感覚を――。

ごりっという固い感触が、可解斗の背骨まで貫いてくれる。これそこ、求めていた感触だった。
柔い喉の肉に、思い切り爪を立てた。ずぶりと指が沈み、固いものが自分の手の中に収まっている。
「くおおおお」
白の鳴き声が、一際高まっていく。
その手の中にある固いものを、力いっぱい握り締めた。
手の中のそれは狭まり拉げ、用を成さなくなったのが可解斗にも分かった。白は声の一つも上げられず、総身を突っ張らせて試合場に横たわる。
白の喉から手を伸ばし、その背骨を握り潰していた。さらに駄目押しとばかりに、可解斗はそのまま右手を引き抜き、脊髄を喉の穴から引きずり出した。
「だあああああっ！」
脳天が爆裂するほどに、白が叫び上げる。生きたまま極太の神経を潰され、なおそれを引きずり出されるというのは、龍にとっても慮外の激痛であるらしい。
「がああ！」
可解斗は最後に右手を勢いよく振るい、太い脊髄を捻じ切った。剥き出しになった神経の表面を血が滑り、てらてらと水晶のように

輝いている。
脊髄の切れ端を放り捨て、可解斗はゆっくりと構えを戻して残心する。
勝った。これで終わりだ。
しかし一向に審判の勝ち名乗りは上がらない。
それもそのはず、可解斗の背後で、蠢いている。巨大な質量が、もぞりと身悶えて起き上がる。
白が、再び首を起こす。飛び出していた脊髄がずるずると喉の奥に収まっていく。
蛇の生命力とは、これほどか。感動する心と共に体を満たしているのは、震えであった。恐怖とも、狂喜とも呼べるそれは、やはり腹の底から湧きあがっているらしい。
覚悟を決めたように、可解斗は白に向き直り――すぐに首が跳ね返った。
斜めに振り下ろされた尾の先が、可解斗の顔面を的確に捉えていた。首どころか体ごと吹っ飛び、壇上を鞠のように跳ね転がる。
首が捻じ切れてすっ飛んでいかなかったのは、全くの幸運だ。むしろ白の攻撃など予測していなくて、弛緩していたのが幸いした。身構えていたら、筋肉を緊張させていたら、頚動脈ごと断裂していたことだろう。

背中が見えるかと思うほど回転した首筋に、可解斗は手を添える。首がきちんと収まっているのか、一応は確かめておかねば不安だったのだ。
「キヒャアアア！」
すっかり調子を戻した白が突進してくる。脊髄が飛び出したのに、もうそんなことを感じさせない躍動感を取り戻している。自分は顔を打たれただけでこの様だと言うのに。
再び尾が振りあがる。今度はきちんと目で追えていた。しゃがみ込んだまま横に飛び、転がって態勢を整える。

白に向き直ったときには、既に尾がこちらへ近づいていた。
向かい来る尾を踏みつけ、可解斗が白の頭に迫る。
白も予想していたのか、大きな口を開いている。既に構えていた手刀を戻し、思わず可解斗は白の上顎を押さえ、飲み込まれるのを防いでいた。下顎は足で押さえ、ちょうど白の口に挟まれる形となる。
中々に滑稽な様だが、本人は至って真面目である。暗く湿った蛇の咽喉が、今にも飲み込まんとしてぜん動を繰り返しているのだから。
「んにににに……」
可解斗を咥えたまま、白は自分の頭を思い切り振り上げた。可解斗は内臓の競り上がりを感じながら、微動だに出来ない。
一瞬の浮遊感を感じたと思ったときには、彼は床に叩きつけられてた。
「あ」
背中に強かな衝撃を受けると、既に可解斗の視界は暗転していた。

## 把式流：八

全身がどろどろにぬめっている。柔らかくも激しく動き周囲が、自分を運んでいるのが分かる。

白が頭を叩きつけた衝撃で、どうやら白に飲み込まれてしまったらしい。このまま胃まで運ばれて、溶かされてしまうのか。そんな最後はなおのこと御免被る。

可解斗は激しく動く。呼吸さえままならないので、いちいち細かく考えていられない。とにかく手足を四方八方に伸ばして、何とかこれ以上進まないようにする。

こんな状態では、腰の入った拳足など望むべくもない。何度も殴り蹴りしてみるが、丈夫な咽喉は全く破れる気配を見せない。そうしている間も、順調に可解斗の体はぜん動運動に従って運ばれていく。

咽喉から伝わる拍動が、一際強まった。

ここだ。ここで行かねばならない。ここで残りの力を注ぎ込むべきなのだと言うことだけは、酸欠気味の頭でも理解できた。

余力を残したり、綺麗な勝ち方に拘る必要はない。拍動が強い部分に爪を立て、咽喉の肉を引っつかむ。

それだけでは足らず、今度は引っつかんだ肉に歯を立てた。

呼吸もままならない口に白の血が入り込み、可解斗の体を満たしていく。導竜法の出来ない体が、龍の血肉で賦活される。

可解斗は龍の肉を食らいながら掘り進む。爪で掻き、歯で削ぎ、出口を求めて一心不乱に肉を抉る。

白が苦しみ、のたうっているのが分かる。びたりと肉の壁に包まれながら、縦横無尽に振り回されている。それでも可解斗は血を飲みながら、肉を食らいながら、時にはそれを吐き出しながら、形振り構わず喉を破る。

「うがあ！」
とうとう気管の肉壁を食い破り、可解斗は外に顔を出す。とはいえ気管の外なので、白の腹腔でしかない。それでも狭苦しい気管よりはまだマシだ。
突き破った穴に手を掛ける。無理やり穴を広げながら、何とか咽喉からの脱出に成功した。
可解斗の顔のすぐ横では、硬い筋肉の塊が絶えず脈動している。彼をそれを躊躇いも無く、両の手でぶちぶちを引き千切り始めた。
脊髄で駄目なら、次は心臓である。気道に寄り添うように蠢いていたそれから伸びる動脈を、手当たり次第に破っていく。さらに近くにある肺臓にも手を潜らせ、手探りで掻き回す。

心臓を破り、腹腔に血が溢れた。むしろこれで溺れてしまいそうだ。
もはや気道を破った時とは比べ物にならないほど、白が身を捩っている。自分の身を床に叩きつけ、中にいる可解斗を押し潰そうとしている。しかしそれはむしろ腹腔内の可解斗をあちこち移動させる羽目になり、その度に可解斗は自分の近くにある臓腑を手当たり次第に傷つけていく。
血とは異なる生臭い匂いが、腹腔内に充満する。腹の熱さがもたらす興奮でその気持ち悪さを振り払い、右の肘を背中まで引く。
こんな狭苦しい状況で、果たして体の捻りが溜めを生み出すのか疑問だが、やっておいて損はないだろう。
そろそろ本当に、血の池に溺れてしまいそうである。これではがむしゃらに肉を裂いて脱出を図った意味がなくなってしまう。
「シッ――」
可解斗は短く小さな呼気を吐き、内臓を踏みつけて足場とし、思い切り肘を振るった。
出っ張った骨の先でこそぐように行われた肘撃で腹膜がばっくりと裂け、ついで筋肉が割れ、開いた傷口に血の濁流が殺到した。そ

の流れは可解斗も飲み込み、外へと押し流した。
「げへっ、がは！」
鼻に口に詰まった血を除き、急いで呼吸を整える。導竜法を再開し、失われつつあった気血を体の中で呼び起こす。
見れば、血溜まりの中で蹲っている可解斗と同様、白もまた体を横たえて動こうとしない。可解斗のまんまと飲み込んだ白だったが、結果としては白の体内がずたずたに掻き回されることとなった。
すぐに腹の傷は塞がったが、まだ白は動き出さない。内臓を文字通り踏み拉かれた損傷は、さしもの生命力をもってしてもおいそれと回復するものではないらしい。

先に可解斗が体を起こす。回復力でいけば白が有利なのだから、自分から動いて先手を取るほか無い。
可解斗に反応してか、白も少しずつ身を起こす。やはりというべきか、容易に勝たせてはくれないらしい。
事ここに至って、もはや出し惜しみは無意味だ。後は何もかも吐き出しつくして、相手と比べてしまうしかない。
ふと、白の後方にいる深麗と目が合う。
何て視線を、送ってくるのだろう。恐々と祈るように手を震わせ、唇を戦慄かせている。そんな姿は中国に来てからこっち、全く見たことがない。
あんな顔に、自分がさせているのだ。自分の恩人は今、この戦いを不安と恐慌の中で見守っているのだ。
（もうすぐ、終りますよ。深麗さん）
ただ深麗のために、戦えばいい。あれほど臆面無く勝つと言ってのけた深麗のために、自分は戦えばいい。
可解斗に勝てると信じている深麗のために、可解斗は深麗の白と戦う。
どっしりと踵と腰を下ろし、より背筋を立てて構える。完全なる正中線を顕す構え。十流、四の流れ、木である。

まるで強風のように、ごうごうと気が自分の中に流れ込んでくる。開ききった気孔が絶え間なく吸気し、可解斗の中に力を凝らせる。

龍に向けるべき、龍の力を――。

弓弦を引き絞るように右腕を背まで回し、反対に左の掌を突き出す。まるでそれを照星に見立てて、白へと狙いをつけるようにぴたりと据える。

白は、そんな可解斗をひたすら見つめていた。丸々とした蛇の目が光を照り返しながら、ゆったりと蛇腹を引きずって近づいてくる。

距離が、狭まる。目の前にいる白の体が、徐々に大きくなっていく。可解斗はただ自分の左手を見据え、視線を一切外そうとしない。

時たま覗く赤い舌と共に、しゅうしゅうと掠れる音がする。白の呼吸の音だろう。いちいち気に留めずとも、はっきり聞き分けることが出来る。

ふと鑑みれば、自分の息も、筋肉の脈動も、津液の流動も、みな手に取るように把握できていた。

それが、可解斗を安心させる。目の前に迫る龍などいないかのように、心は清々として揺らぎが無い。むしろ、龍を前にしているからこそ、これほど平らかな心地で臨めるのかもしれない。

だとすれば、自分はまた、十流を身につけたのかもしれない。より深く、大きく、父に近づいたのかもしれない。

絶え間ない導竜法に、僅かな乱れも起こらないと確信できる。時間をかければかけるほど、自分に力が宿っていくのが実感できる。可解斗は何とも落ち着きを払い、ただ白の訪れを待っていた。

無論、これが必殺の一手になると、可解斗は思っていない。もはやそんなことは、慮外へと吹き飛んでいた。

勝算などいらない。どうせならこのまま、あの大きな尾に潰されても構わない。しかしここで何かの残してしまうのだけは、堪えられなかった。今まで世話を焼いてくれた深麗に対しての、これ以上ない裏切りのように感じていた。

ここに置いていく。力も、技も、覚悟も、感謝も、渾然にして龍の体に置いていく。それが可解斗から、深麗へ向けたせめてもの手向けに思えた。

右手に何かが凝り固まっていくのが分かる。白もまた蛇腹を撓め、力を凝らせている。

照星に見立てた左手を通して、白と目が合う。狙いがぴたりと、こちらに定まっている。

もはや準備は整っている。いつ来てもらっても構わない。

前触れ無く、白の体がずるりと伸びた。それは鋭く滑らかに、可解斗へと向かい来る。

可解斗は突き出した左手一本で、白の頭を受け止めていた。その反動すら力に変えて、半歩踏みしめる。同時に、右の正龍拳が突き出される。

途端、堂が揺らいだ。

皆がその轟音に驚いている間に、白の体は壇上から転げ落ちていた。不自然に凹んだ頭部を晒しながら、だらしなく長い下を垂らしている。

事の顛末を見届けたものは決して多くはなかったが、右の拳を突き出したままでいる可解斗の姿を見れば、自ずと察せられた。

「勝者、石竜可解斗！」

漸う審判によって言い渡された宣言を聞いて、可解斗は残心を済ませ、深麗は膝から崩れ落ちて放心していた。

観衆も似たような反応で、誰一人として何も言わず、静まり返った堂の中は審判の声が未だに響いていた。

可解斗は残心を終えて一礼すると、通路の方へと足早に引き下がった。自失の体でいる深麗のことが気にはなったが、今となっては栓無いことと勤めて無視し、なるべく目を向けぬようにした。

通路に誰もいないことを確認して、可解斗はその場にへたり込んだ。疲労もあるが、それ以上に体を震わせているのは、手応えであ

った。
自身の力を限界まで振り絞り、七流を余すところなく発揮して、相手に勝つことが出来た手応えが、まだ体の中に渦巻いている。
最後に白を叩いた右の拳を、まじまじと見つめる。
七流が、活きた。自分が活かした。そして、活かされたのだ。
こうなりたくて、自分は生きてきたのだ。父の教えを守ってきたのだ。それがようやく、報われた気がした。

## 宿願龍：一

豢竜大会が終って鳴りを潜めたと思っていた可解斗いじめが、再び表面化しつつあった。

今度は年少部の者達に限ったことではない。ほぼ学舎ぐるみでのことである。

しかし今度は、可解斗も負けてはいない。あの大会で一応は優勝したことが、彼にとって大きな自信となっていた。

多少、陰口を叩かれようと、いちいち動じないでいられるだけの成長が、今の可解斗から窺えた。

「やはり納得がいかん。あのような輩を末席に置くことが、そもそも間違いなのだ」

苦々しく呟いたのは唐信。可解斗を連れてきた内の一人である。

やはり彼にとって、あの石竜可解斗という存在は、特別であった。自分が教えを請うた最強の豢竜氏、劉征竜の息子である。そう思えばこそ彼は、日本人であり、豢竜氏として育てられていない可解斗をここに連れてくる気になったのだ。

無論、それも不承不承ではあったが――。

唐信の連れてきた可解斗は、一応は豢竜氏としての修行を受け、この度は豢竜大会で優勝するほどの実力を持つに至った。

それが、唐信には甚だ納得の行かない現象であった。

可解斗はその大会において、全く豢竜氏らしい動きを見せなかった。しかも聞くところによれば、方術仙術の類を一切身につけておらず、多少は拳法きの筋が良いくらいの成績らしい。

そもそも龍を呼ばずに戦う豢竜氏など、見たことも聞いたことも無いし、認められるものでもない。そして可解斗は、まるで龍を呼び、龍と共に戦う豢竜氏を嘲笑うように、己の五体のみを条件にして龍を倒してのけた。

何とあてつけがましい行いだろうか。所詮、龍に頼らなければ、術に頼らなければ、お前ら豢竜氏は何も出来ないのだとでも言いたいのだろうか。

方術も仙術も使えないくせに、龍の一匹も呼べないくせに、征竜の息子のくせに――。

やり場のない怒りをひたすら溜め込んでいると、唐信はその肩を後ろから叩かれた。

「そう怖い顔をするな、唐信」

見れば、信達が朗らかな顔でそこに立っていた。

「また可解斗くんを見ていたのか。熱心だな」

図星を突かれ、険しかった唐信の表情がさらに峭刻となる。しかし信達は気にした風もなく続ける。

「全く、すごいよな、彼は。龍を用いずに、豢竜氏に勝ってしまうんだから」

「豢竜氏じゃないのなら、こんなところ、来なければいい」

「連れてきてしまったのは、俺達だよ」

それを言われると、さすがの唐信も二の句が継げない。命令とはいえ自分達があの可解斗を連れてこなければ、こんなことにはならなかったのだ。

豢竜氏が貶められるような事態には、ならなかったはずだ。

「命令だったんだ。仕方ない」

結局、その建前を持ってくることぐらいしか、唐信には出来ない。

「そう、それさ。何で天袁さまは、今更あの子を連れてきたのかな？」

「孫可愛さ、じゃないのか？」

それは唐信だけでなく、他の者達も認めるところだろう。事実、天袁は可解斗を優遇している。ぽっと現れた可解斗が、何の不自由もなく豢竜塾で過ごせるのも、そうした天袁の援助があってのことだ。

「それもあるだろうが、な……」

まるで下世話な端女のように、信達は顔をゆるりとにやけさせる。
「他があるのか？」
「いわゆる罪滅ぼしってことさ」
秘中の秘を晒すように言う信達だったが、聞いている唐信の顔はどこまでも冷め切っていた。

一体何の罪滅ぼしかは分からないが、他に付け加えるなら、そんなところだろう。予想が付いていた言葉だったので、唐信にしてみれば驚きようがなかった。
「大方、長らく放っておいてすまなかったと言うんだろう」
「いやさ、そうなんだが、どうして長らく放っておいたのか。それが重要だろ？」
やけにこの話題に熱心な信達を見て、唐信はようやく不審な心地になった。
平時の信達は、このように噂話の好きな人物ではないし、こうした話題を語らうことは稀である。そもそも同じ屋根の下、双子のように育った彼らには、そんな世間話など交わす機会がない。
「何を、知った？」
短くちぎるように、唐信は疑問を投げつけた。寡黙で言葉の足らない唐信だったが、こういう迂遠な物言いは、それこそ嫌悪の対象であった。
「接輿を、知ってるだろう」
信達の発した言葉に、唐信が細い目が徐々に見開かれる。
「接輿さまが、どうしたって？」
いちいち“さま”を付けて言い換える辺りに、唐信の感情が推して計れる。
「あの方に、会ったんだ」
まさかという思いに、唐信の眉根が釣り上がる。それは明確に怒気を孕んだ表情であった。
「あの人はもう、豢竜氏じゃないだろう。どうやって会ったんだ？」

「さあね。この前、俺の部屋にふらりと現れたよ」
「ここに来てたのか！？」
唐信の驚きも無理からぬことだろう。この劉家豢竜塾は、龍の巣を守るような形で配置されている。ただでさえ人を嫌い、仙境に住まう龍を守るには、それに見合った幽谷に居を置くほかない。
それはつまり、尋常な人間だけでなく、生半な方術師などでさえ、容易には入り込めない場所であることを意味している。
万に一つ着いたとて、豢竜塾は一度破門としたものを受け入れることはない。豢竜の技を継ぐのに不都合だと判断されたなら、その時点でこの山を追い出され、二度と門を潜ることは許されない。
「あの人なら、別に不思議じゃないさ。遁甲においては、征竜さまをも凌ぐと言われた術師だぞ」
遁甲とは、方術や仙術を用いて遁走し、凶を避け吉を得る技術の総称である。身を隠し、姿を変え、あらゆる防護をすり抜けて逃げ延びる術である。

この技術において、接輿はかの有名な道士である左慈に擬えて誉めそやされていた。信達に言わせれば、このような仙境も、劉家の屋敷も、彼を阻む機能を持たない。
「それで、何を話したんだ？」
「誘われたよ。密猟をやらないかって」
唐信は信達の言葉を慎重に吟味すべく、十分な間を置いた。
「密猟に関わっているという噂、本当だったのか」
龍の密猟は、昨今特に豢竜氏を脅かす問題である。
漢方、料理、武具、美術品と、その用途が多く、しかもどの分野に置いても第一流の品として扱われる龍の取引は、豢竜氏によって規制されている。
成長に悠久の時間を要し、その数も希少である龍は、万古の時代から豢竜氏が管理してきた。市場に出回る龍の製品は、須らく豢竜氏を通して取引されるのがもはや常識となっている。

しかしそれが、脅かされつつある。豢竜氏の定めた取引条件を不服とし、自ら龍を狩り、格安で取引しようという輩が出てきたのだ。
現代の著しい技術の発達や、中国マフィアの台頭、それに伴う資金源の模索など、理由は様々に折り重なっている。
豢竜を生業とする者にとっては、商売敵も甚だしい。これまで先達が培い、養ってきたものを土足で踏みにじる連中だと、唐信を始め多くの豢竜氏は理解している。
それは信達においても同様のはずだが、今の彼の語り口に、そのような感情は見受けられなかった。
「断った、よな？」
計るような目つきで、唐信は質す。知った仲であるはずなのに、どこかうそ寒くなる気配を、信達が放ってくる。
なので質す口調も、どこか余所余所しい。
「いや、断ってない。まだ返事を保留してある」
使命に篤い豢竜氏が聞けば、憤慨するを待たぬ言葉である。唐信もまた豢竜を誇りとし、それを生業とする以上、信達をきつく戒めねばならない。
――ならないはずなのに、言葉が出てきてくれなかった。
「お前、何を……」
そこまで言って、唐信は信達の後ろに人影があることに気がついた。
思わず椅子を蹴って立ち上がる。今までこの部屋は、自分と信達の二人だけであった。扉を開ける音も、窓から忍び込む気配も皆無であった。
なのに何故、第三者がここにいるのか。
「大きくなったなあ、唐信」
人影は目深に被っていたハンチング帽を取ると、さも親しげに話しかけてきた。
その声音、調子。何もかもが往年のままであったため、唐信はすぐにでも人影の正体に思い至った。

「せ、接輿さま！？」
遁甲術の権威である接輿にしてみれば、他人の虚を突いて現れる程度のことは、造作も無いのだろう。
「いちいち構えるな。堅っ苦しいところは、昔と変わらんようだ」
それこそ昔と変わらぬ冷やかしが、心地よく唐信の体に染み渡っていく。
しかしすぐに心を入れ替え、唐信は懐に手を差し入れた。
――否、差し入れようとした。
その動作が、接輿の右腕によって阻まれている。
一体いつ近づいたのか、そしていつ腕を握ったのか、全く察知させない所作であった。
「昔のよしみだ。俺の話を聞いてから、追い出せばよかろう」
接輿はすいと手を離し、唐信から一歩退いた。もはや機を逸した唐信は、接輿と己との間にある隔絶を、歳を経た今を以って確認せざるを得なかった。

既に自分も三十の半ば、心身ともに充実し、技にも磨きをかけてきた。対して接輿は四十を超えている。技術も体力も、これから下るばかりの身だ。
それでも、唐信は接輿の底が知れず、龍を呼び出してけしかけようという心境ではなくなっていた。
自らも椅子を引き出して机を囲み、接輿はすっかりと落ち着いた体である。それも当然だ。接輿もまた幼年のころ、劉家の豢竜氏に引き取られ、ここで技の研鑽を行っていたのだから。
そして唐信や信達に術を仕込んでくれた一人が、接輿だった。
「用件は、何でしょうか？」
懐かしさを感じつつも、棘を孕んだ言い方で、唐信は尋ねる。長らく世話になった相手といえど、接輿は豢竜氏としての職を剥奪された身であり、ましてや龍の密猟に加担している。力の差があるとして、しかし友好的な態度を取る気にはなれない。

一方こちらはまるで構えることなく、ゆるりと寛いで唐信と目を合わせる。相変わらず嫌な目つきだと、唐信はうんざりした。
子供の自分にも、接輿は他人を無遠慮なまでに覗いてきた。今もそれは健在らしく、豢竜氏失格と言われた人間にしては余りにも澄んでいる瞳を、惜しげもなく向けてくる。
「俺と征竜の追い出された、本当の理由。聞きたかろう？」
誘うような口調と、澄み渡った目つきで、接輿は尋ねる。
「まあ、そう大した話ではないが……」
そう前置きして、接輿は唐信の返事を待たずに語り出した。
しかし唐信は、何の反論も出さず、ただ呆と椅子に腰掛けているだけであった。
すでに唐信の体から、接輿に敵対するという概念が抜け落ち、往年の兄弟弟子そのものとなって、彼の言葉に耳を傾けた。

## 宿願龍：二

その日は、特段に代わり映えの無い朝であった。いつもどおり井戸の水で顔を濯ぎ、道着に着替え、教室へと向かう。

しかし、何かが違う。静かは静かなのだが、どことなく落ち着かない。あるいは静かだからこそ、と言うべきか。

（陰口が、聞こえない）

一度思い至ると、いつも聞こえよがしに話されていた陰口が、今は殆ど聞こえない。

昨日の今日で、何故？　そんなことを陰口の対象だった可解斗が知るはずもない。取り立てて何かトラブルを起こしたわけでもなく、良い行いをしたでもない。すっかり慣れた日常の通りにしか、可解斗は動いていないはずである。

聞くに煩わしい騒音だったが、これはこれで無くなってみると、何だか物足りなく感じてしまう。その故無き消失も相まって、可解斗の意識が過剰になる。

いつもの通り、一番乗りで一番前の席に陣取り、可解斗は授業の開始を待つ。その間、昨日の授業内容に目を通しておく。

それでも、やはり落ち着かない。どこかこう、体の奥が雀躍してしまう。何気ない呼吸の一つ一つに、いちいち丹田が反応してくる。

まるでそれは臨戦態勢の、龍と相対したときの感触である。ずくずくと肌が粟立ち、怖気が皮膚の下で泳ぐ。

ぶるりと身を震わせて周りを見渡すと、可解斗は教室に一人だった。

確かに人が入ってくる気配は無かったが、それがそもそもおかしい。このくらいの時間になれば、もう半分くらいの席は埋まっているのが常である。

今日は祝日扱いだったのか。そんな連絡はとんと受けていないは

ずだ。自分だけ知らされなかったのか。さすがにそこまで露骨なことは今まで無かったはずだ。
とはいえ、祝日に登校してしまったところで、それまでである。騙されたと言えばその通りなのだが、特段に気にするほどのことでもない。
ならば授業の開始時間まで待って、本当に講師が来なければ部屋に戻ればいい。
感じていた怖気を努めて静め、ノートに鉛筆を走られていると、何やら慌しい靴音と共に教室の引き戸が荒々しく開け放たれた。
「いたぞ！　ここだ！」
入ってきたのは、いつも顔を合わせた同級生とは違う男だった。はて何事かと可解斗が首を傾げている間に、他の者がぞろぞろと教室に傾れ込む。
その様子を見て、可解斗はすぐに席から立ち上がった。彼らの手には刃物の類や、符が携わっていた。
「な、な！？」
突然のことに声も満足に上げられない可解斗を差し置いて、最初に教室に足を踏み入れた一人が、大刀を振りかぶっていきなり斬りつけた。
厚みのある刃が深々と机を抉り、椅子まで届く。しかしその頃には、可解斗の体は後方にある机の上であった。体中に驚きが回っていたものの、致命的な斬撃をむざむざ受けるほど可解斗は暢気ではない。しかしやはり驚愕は隠せず、顔が泣き笑うように引きつっている。
「……一体どういう、ことでしょうか？」
おずおずと訊ねてみる可解斗だが、やはりと言うべきか、生徒の一団からは何の回答も為されなかった。
これは、如何にもマズい。何よりこれだけの得物を受けられても、体が依然として滾ってこないのがマズい。
この場に龍の一匹でもいれば、少しは体が滾ってくるのかもしれ

ない。しかし龍を呼ばれたら呼ばれたで、状況がさらに容易ならぬものになるだろう。

そう思っていたら、突然後ろの引き戸が勢いよく破れ、長い肢体がずるりと入り込んでくきた。三つの爪が難なく机を引き裂き、尾を振るえば用具入れがくの字にひしゃげる。

（悪い予感は、当たるんだな）

牙をずらりと並べた口を開いて威嚇してくる龍に右手。黒板の前に屯する生徒達に左手を伸ばし、一応は構えてみせる。しかし同時に掛かられては、さすがに対処のしようが無い。

だがそれでも、体は熱くなる。冷や汗に粘ついていた背中さえ、腹の奥から滾々と出ずる熱に当てられて、一回り大きくなったような気になる。

実際、導竜法の呼吸によって心身が整えられ、血の巡りが良くなったのだろう。いきなり刃物で切り付けられそうだった先ほどよりも、自分の体が自分の意思で満たされているのが分かる。

状況は少しも好転していない。既に出入り口は二つとも封じられ、多勢に無勢。しかも得物を携えた者が多数。そして龍の存在。どれも可解斗にとっては否定的な要素である。

それでも、少しはやりようが出来た。選択肢が多少は広がりを見せてくれた。

「かあああああッ！」

泣き笑いの表情のまま、一気に可解斗は叫び上げた。まさに龍声と言うべき音声に、武器を携えた生徒達はおろか、龍でさえ僅かに身を竦ませる。

僅かでいい。その僅かでも捻出できれば、十全に過ぎる。

気勢を上げて一転、前に出ると見せた可解斗は、後ろへ飛び退いた。彼の雄叫びに気を逸らされた相手は、反応が一拍ほど遅れてしまう。

その間に可解斗はまんまと窓際に至ると、跳躍の勢いを殺さず後

方に踵を突き出し、難なく窓ガラスを蹴り破った。
それでいまさら体が止まるはずもなく、可解斗は割れた窓へと自ら身を投じてしまった。
すぐに生徒達が窓際に寄るが、落ちたはずの可解斗の姿は無い。それも当然である。この教室は龍の巣がある山に隣接しているため、鬱蒼と生い茂る木々に囲まれている。
落ちてしばらくはがさごそと枝葉も揺れていたが、もはや可解斗の一部たりとも視認することを許さないように塞がれている。
「探せ！　この高さだ。ただではすまない。劉家の血族を逃がすな！」
一人が指示を下すと、他は可解斗の落ちたと思われる地点へと急いだ。

既に落下地点から移動していた可解斗は、行く宛もなく身を隠し、思案をまとめようとしていた。
龍まで用いた突然の襲撃。これまでいじめられるようなことはあったが、これほど直接的で苛烈なやり方は初めてであった。
むしろこれはいじめ云々の類ではないのかもしれない。そのように考えれば、あの台詞にも納得がいく。
――劉家の血族を逃がすな。これは明らかに可解斗以外の人間も標的となっていることを示していた。
「何がどうなってるのか、まるで分からないなあ」
しかしあの言い様。まるで劉家の血族を襲うような口ぶりだ。実際、可解斗は一応、劉家の血統に連なる人間だから、狙われるのは道理かもしれない。
そもそも、これほど直截な形で襲われる道理が、可解斗には思い至らないが――。
（劉家の人間を襲う。下克上ってこと？　そしたら……）
襲われる道理は不明なれど、襲われる対象は既に判明している。自分のように劉家の血を引いている人間は、可解斗の知る限りで二

人しかいない。
劉天袁と、劉深麗。この二人以外に、在り得ない。
可解斗は身を低く保ち、頭を草むらから出さぬよう、天袁のいる講堂へと走り始めた。自分ならばいざ知らず、よもやこの二人があんな連中に後れを取る様など想像できないが、万が一と言うこともある。
それにならばこそ、彼らの元に身を寄せるのが、自分の安全を確保することにつながるだろう。
（義気千秋。報いるならば、今をおいて――）
他に無し。逃すべからざる機が、訪れている。
何だか自分はこんなことばかりだと、可解斗は自嘲気味にほくそ笑む。
自分で決断しているように見えながら、急速に展開する状況に流されているだけ。それとも決断する猶予が残っている分、これは自分の純粋な意思なのかもしれない。
それでもやはり、状況が可解斗に決断を迫っているのだし、自分で決めてもいるのだから、行うことに変わりはない。
深呼吸を一度。涼やかな森の生気を体に溜め込むよう行う。その速力をさらに増し、人目を避ける形で敷地内を慎重に進む。

## 宿願龍：三

可解斗が講堂に向かっている頃、深麗は講堂の扉の前にいた。
「一体、何の真似ですか。これは」
「不自由をさせますが、今少し辛抱を」
ただしそれは、剣呑な雰囲気での参上だった。
可解斗同様、突如不意を突かれて襲撃された深麗は、符や武具の類を取り上げられた状態で拘束されていた。それで十分と思っているのか、手足を縛られたり、猿轡を嵌められたりという徹底した拘束はされていない。
一応はまだ劉家の後継として敬われているのだろうか。しかしそれで今更、襲いかかってきた無礼を許す気にはなれない。
「やあ、ようこそお越しくださいました」
講堂の扉を開けていきなり出迎えたのは、先頃に可解斗と共に遭遇した密猟者だった。
「接輿！？」
「お見知り置きいただいて、恐悦の極み」
相も変わらず芝居がかった仕草が鼻につく。本来ならこのような輩、敷地に足を踏み入れることすら憚られるのだが――。
「あなたが、皆を唆したのですね」
そう考えればなるほど、いきなり深麗が拘束される理由も分からなくはない。龍の密猟者と豢竜氏は、いわば商売敵。それを潰しにきたのだろう。
ならば邪魔となるのは、宗家たる劉に属する人間だ。
「唆す？　私はただ、啓蒙しただけですよ。あなたがた劉家の、連綿と続く豢竜の歴史が、今の時代にどれほどそぐわないかをね」
それはつまり、自分の行っている密猟を正当化する文句なのだろうか。接輿の迂遠な言い回しは、過剰なストレスに晒された深麗の精神をさらに刺激する。

「そぐわない？　どういう意味ですか？」
「言ったこと、そのままですよ」
さらに弄うような言い様を重ね、接輿は深麗に近づいてくる。
「龍に寄り添い、人の世と龍の架け橋となる。聞こえはいいがその実、龍を独り占めしたいだけのことに過ぎない。豢竜氏の許可無くば、他の者は鱗一つ、毛の一本たりとも自由には出来ない。そのくせ法外な値を突きつけ、数も満足に寄越さない。こんなことがもう何千年も続いて、いい加減いやになるというものだ。
そしてこの旧態依然とした状況にうんざりしているのは、何も龍の消費者ばかりではない。豢竜氏自身もまた、代わり映えのない世界に閉塞を感じている」
あなたもそうではありませんか？　誘うような声音で囁くのを、深麗はその背に怖気を走らせながら聞いていた。接輿の言うことがいちいち的を得ているのが一つ。もう一つは、彼の声の調子それ自体である。
服を透けて肌を、それさえも抜けて体内を直接まさぐられるかのようで、生理的嫌悪をかき立てられずにはいられない。無論、それを狙ってのことなのだろうが、分かっていても術中にはまってしまうほどに、接輿のそれは巧緻を極めていた。
「私はその壁を打破しようと思っているに過ぎません。長年世話になり、多大な恩義のある劉家がこのまま衰退するのを、黙ってみるのは忍びない」
今まさに自分が衰退させているくせに、ぬけぬけとのたまう。その厚顔はやはり他人の神経を逆撫でて余りある。しかしその一方で深麗の中に、接輿の言葉に得心しているも事実である。
遅かれ早かれ劉家は、そして豢竜氏という職は、衰退せざるを得ないのだ。もはや人の世は、そのような職能を求めてはいないのだから。
夏王朝で宮廷に召し抱えられて以降、地位も規模も技術もゆるや

かに下って、いつ消えてもおかしくはなかったのではないか。接輿はただ、それをほんの少し早めただけに過ぎないのではないか。
ならば自分に、劉家に連なる自分に、彼を責める言が吐けるだろうか。
「密猟と言うと聞こえが悪いが、我々はより適正な値で龍を提供しているだけです。そもそも、龍はそのような管理を望んでいない。人の世と龍の橋渡し？　そんなもの、人の都合に龍を付き合わせる方便でしょう。今さらそんな方便など要りません。人は龍が欲しい。ならば手に入れればいい。大仰な題目を掲げるよりは、そのほうが潔いと、皆も思っているようですから」
矢継ぎ早に投げかけられる言葉の一つ一つが、深麗の肌を打擲する。
確かに豢竜氏の職は、ある種の偽善をはらんでいる。龍と人の中を繋ぐ。聞こえはいいがしかし、そんなものが今の世に必要かと言えば、言を待たない。

元より龍と人との関係は、人がひたすらに龍に憧れ、求めるという一方的なものである。龍の側からしてみれば、迷惑も甚だしい。それを少しでも解消すべく、なるべく軋轢を無くして付き合えるよう取り計るのが、豢竜氏の役目であった。
しかし古代の世と違い、ただでさえ数の少ない龍はさらに減じ、龍と人との繋がりなど在って無いが如しである。人は昔ほど龍を求めないし、龍はそもそも人に関心を持つことが少ない。
ならば豢竜氏も、その活躍の場を追われるのは必然である。
「そうだ。もはや劉家など必要ない！」
叫び上げ、大きく差し出された接輿の手の先を、深麗は自然と目で追った。そして、接輿の言葉に頷きかけていた心が、一気に冷めて引き戻される。
「おじいさま！？」
講堂の奥の奥、玉座に収まっているのは、深麗の祖父、劉天袁で

ある。しかしそれは、彼がまだ生きていた頃の名。今となってはもう、その名で呼ばわるものの居るかどうか。
胸から細身の太極剣を生やして、さながら木に打ちつけられる人形のように、天袁は大人しく座している。
「ああ、ああ！」
心の均衡を失い、駆け寄ろうとする深麗の体を、脇に控えていた男たちが上から押さえつける。
その取り乱し様を、さも嘆かわしいと言わんばかりに首を振り、接輿はその傍らに座り込んで滔々と語りかける。
「致し方無かったのです。何事も、けじめというのは肝心でして。ご容赦、いただけますよね？」
疑問を投げかけているにも関わらず、それは答えを全く必要としていない調子である。
「深麗さん！」
突如激しい叫び声と共に、横合いの扉が突然に弾け飛び、そこから一人の男が闖入してきた。
「石竜、可解斗……」
忌みしげに、唐信が呟いた。突入する算段をつけた可解斗が、漸う罷り越したのである。

その場を睥睨し、まず目に入ってきたのは、男数人に取り押さえられた深麗の姿。
恩人である彼女を救わんとして乗り込んだ可解斗は、些かの逡巡も見せずに突進した。
しかしその間に、接輿が立ちはだかる。
「退け！」
可解斗の脅しを、くふりとした笑いで受け流す接輿。その笑みは先ほど深麗に向けていた厭世的なものではなく、親しいものを迎える暖かみを宿していた。

「退かぬよ。私は、君を待っていたのだから」
そんな意味深な台詞を待たず、可解斗は接輿の首めがけて、飛び上がりざまの足刀を繰り出した。
風を切って向かい来る足先へ、むしろ接輿が一歩だけ踏み出す。
ごうと耳元を掠めるも、命中には程遠い。それは繰り出している可解斗本人が自覚していた。
そしてひたりと、可解斗の顔を手が覆う。その手を払おうと右手を振るったとき、既に可解斗の頭は真下に向かって落下していた。蹴りの勢いをそのままに後頭部を打ちつけ、意識が一旦途切れる。
すくい上げるように差し出された接輿の手は、つっかえとなって可解斗の体勢を崩し、真下に投げ落としていた。
「おかしいと思ったんだ。あの接輿さまが、あんな奴に遅れを取るなんて、ありえない。もしそうだったとして、三味線を引いてるに決まってたんだ」
唐信がさもおかしそうに嘲るなか、未だ床に倒れ伏せている可解斗に、接輿は容赦なく踵を蹴り込んだ。顔面がさらに沈み、脚気検査の要領で足が跳ね上がる。
「があっ！」
その勢いを利用して身を起こし、後転して可解斗が体勢を直す。
この場には龍がいる。導竜法によって取り入れる龍気は、幾らでもある。
「龍気があるから負けはしないと、当て込んでいるのかな？」
まさに図星を突かれても、可解斗の動揺の色はない。それを上回る熱が、彼の中で醸成されている。
「来たまえ。征竜の作った技、もう一度見せてみろ」
言われなくても、そのつもりである。今度は左掌底掬い打ちから右手刀へと繋いでゆく。しかしそのいずれもが、寸で見切った接輿の前を空しく過ぎる。
右を振り切った隙間に、するりと侵入する接輿の足先。足の甲が顔の横から入り、的確に顎を揺らす。

ぐらつく膝を叱咤し、持ち直してから左の振り打ち。しかし如何せん足がついてこれず、さらに大きく体が崩れる。
大きく弧を描いて左拳が接輿の頭の上を過ぎり、代わりとばかりに接輿の左縦拳が顔の中心に刺さる。その一撃をきっちり当ててから、接輿がさらに体を進める。
左腕が折り畳まれ、引いた拳の代わりに今度は肘が突き出される。
「破ッ！」
八極拳の内の一つ、外門頂肘。さらに左足を間に挟み込み、右の手刀で腰を刈る七星蟷螂拳の斬腰。
肩口を思い切り床に叩きつけ、可解斗はなす術もなく倒れ伏せる。そこへ狙いすました踵の下段蹴り。人体のなかでも頑強を誇る踵の骨が頭蓋を押しやり、後頭部が床と接輿の蹴りとの間で幾度も跳ね回る。
脳漿を攪拌され、如何にも糜爛な視線がかろうじて接輿を見ている。しかしもうその目には力がない。あくまでゆっくりとたゆたい、恐らくは像もまともに結んでいないのだろう。
とどめとばかりに、接輿が右の足を振り上げた。太極拳の金剛搗碓である。
稲妻を思わせる震脚が、可解斗の頭を割れた床へと押し込んだ。

接輿が足をどかすと、取り巻きが一斉に喝采を送った。
今までその格闘で龍に勝利してきた可解斗が、まさに格闘で打ち倒される様は、さぞ爽快に映ったことだろう。
方々で声を上げて喜びあっていた連中が、徐々に静まってゆく。彼らの視線は、ある一点に凝縮されていた――接輿が今まさに抜き払いつつある、腰の剣に。
接輿は切っ先を可解斗の鼻先にぴたりと突きつける。こうなっては呆けていられなかったのだろう。可解斗は目の焦点を切っ先に変え、すぐにそれが何であるかを判じると、身を起こすこともままならない体を這わせ、少しでも接輿から遠ざかろうとする。

そんな可解斗に冷笑を向けて、逃げまどうネズミを追い立てるように切っ先をくゆらせる。
「深麗のお嬢さんは、反目しないなら受け入れる準備がある。非常に優れた素質をお持ちだからね。でも、君は駄目だ――」
「な、何で、ですか？」
可解斗は思わず、だらしない反事を返してしまう。
今さら何でもないだろう。接輿はそんな風に茶化しながら、ゆっくりと見せ付けるように剣を可解斗の眼球の前に据える。
「君は豢竜氏の――否、僕の、仇なのさ。君を殺さなくては、僕の宿願が成就しない。それに君は、皆に嫌われている」
言ってから同意を求めるように接輿が首を巡らせると、苦笑が輪となって可解斗を取り巻く。
完膚無きまでに打ち倒され、可解斗の心は臨界に達していた。このように窮した状況でこそ発揮すべき七流が、今はその欠片も顕現してはくれない。
親族の殺害。七流の敗北。そして今向けられている、故さえ知れない剥き出しの殺意。
横隔膜が無様なまでに痙攣し、導竜法の呼吸など望むべくもない。息を呑む音ばかりが続き、まともに吐き出すことが出来ない。従って、うまく吸うことも出来ない。
「うああ、ああああ！」
訳の分からぬ喚きを吐いて、可解斗はずるずると接輿から後ずさる。少しでも、あと少しでもと床を這うのだが、呼吸と同じく腕までが上手に働いてくれないらしく、それはささやかな逃避でしかなかった。
接輿が落ち着いて踏み出す一歩の方が、余程まともに距離を詰めている。
「みっともない。覚悟を決めなさい。ほんの一瞬だ。動けばむしろ過ってしまうよ」
本当に、親友の子供に話しかけるように優しげな顔で、接輿はゆ

ったりと切先を寝かせる。
それが振るわれたとき、自分の首が断たれる。刀を構えたのを見ただけで、分かってしまう。まだ一部たりとも斬られてはいないのに、どうしようもないほど如実に実感してしまう。

そのとき、一陣の豪とした、真白の風がなだれ込んだ。その圧力が接輿を薙ぎ払い、可解斗を浚う。
突如として顕現した白い大蛇は、その頭に深麗を乗せ、口には可解斗をくわえていた。
「深麗さん。これは、どういうことでしょうか？」
寸前で白の薙ぎ払いを見切っていた接輿が、遠く離れながら問う。
それは訊ねておきながら、まるで答えなど分かっているらしく、にたにたとした笑いを崩さない。
そんな意味のない問いを一顧だにせず、可解斗を咥えた白の頭に跨り、深麗は講堂の扉へと急いだ。白が撓めた体を一気に解放し、蛇腹を打って床を這い進む。
しかし既に扉も前は固められ、人と龍で垣が作られていた。例え劉家の息女である深麗といえども、そこを通すわけにはいかないらしい。もはや劉家を基盤とした権威に、彼らは何の価値も見出していないのだろう。
かつての仲間から睨み据えられ、深麗の中に一縷の迷いが首をもたげる。彼らは騙されている。操られているに過ぎない。それを打ち払い、はねのけて進むのは、劉家の、そして自分の勝手な事情を彼らに押しつけることになるのではないか。
深麗の持つ豢竜氏としてのたぐいまれ無い才覚が、このときばかりは災いした。彼女の僅かな心の動揺を受け取った白が、突進の勢いを弱めてしまったのだ。
「だめっ！」
声に出す暇もあればこそ、白が勢いを無くすのを見て取った豢竜氏達は、先手を打つべく前に出ていた。武具が、牙が、爪が、尾が、

深麗と白に迫り来る。
「蛟、退かせ！」
そこへ、元の一声が響き渡った。
命を受けた蛟は、あんぐりと口を開き、それを飛びかかろうとしている連中に向けた。
意識が白や深麗に向けられている連中は、予想外の方向から来る激流を防ぐ術など持ち合わせてはおらず、漂白するかのように部屋の隅へと押し流されていった。
さらに蛟は水を吐く口の向きをぐるりと変え、未だ扉の前に居座っている残りの連中へとその狙いを定める。
人と龍で構成された垣が、真横からの怒涛で押し流される。
水を眷族とする蛟が発生させた波濤で、扉も前にいる連中を退かしてみせた。
粗方の水を吐き終えると、蛟は扉に思い切り頭を叩きつける。まだ若いとはいえ、蛟とて龍である。その力の前に、蝶番は一度だけで砕けてしまった。
「深麗さま！」
そこで蛟と元が、開いた扉に身を入れる白にしがみついた。そのまま白は勢いを緩めずに飛び出した。驚きながらも寄り来る連中をみずちの激流で押し流しながら、彼らは学舎の外へと向かった。

## 宿願龍：四

「何をしている。早く追え！」
唐信が怒鳴り散らすと、蛟に薙ぎ倒された者達が何とか立ち上がる。
「ああ、いいよ。追うことはないから」
しかしすぐに接輿が呼びかけ、唐信も彼らも困った様子で固まった。
「出て行きたければ、そうさせればいい。この慌てようではいけないよ」
「しかし、良いのですか？」
信達が蒸し返すが、まるで取り合う様子を見せず、接輿は剣を腰の鞘に収める。
「大丈夫さ。彼らは、そう遠くへは逃げられない。ここへ戻ってきたいのだから」
「つまりは、仕掛けてくると？」
「それは分からないね。でも、待とうじゃないか。僕は待てるよ、実際、十年以上も待ったんだ。今さら慌てる心は無い」
もはや話している信達とも、唐信とも視線を合わさず、接輿は堂の舞台から降りる。もはや彼の興味を引くものは、この場からすっかり消え失せてしまったとでも言うかのようだ。
「もうすぐだよ、征竜。君の宿願、僕に受け止めさせておくれ」
誰にともなく、接輿は呟く。それはどこか恍惚とした色を帯び、ほんのりとその頬は上気してさえいる。
本当にもうすぐ、宿願が成る。征竜の宿願が成ったかどうかを、自分が確認できる。
その上で、彼――彼の息子の前に、立つ。それこそが、接輿の宿願である。

「深麗さま、お怪我は？」
気遣う元に首を振り、大事無いことを告げる。自分よりも、大事を迎えている人間がいる以上、ここで深麗が無様を晒すわけにはいかない。
白の口から吐き出された可解斗には、目に見える負傷はない。五体満足の健康体そのものである。接輿に打たれた傷はその実、殆ど後を引かないものだったらしい。
にもかかわらず、可解斗は深麗や元と一言も口を聞くことなく、膝を抱えたまま虚空を見つめている。
「可解斗さん、可解斗さん」
深麗が呼びかけると、かろうじて目線だけを寄越すのだが、それ以上の反応を示さない。ただその顔つきは、接輿に剣を突きつけられたときの戦慄をそのまま残していた。
まだあの講堂で起きた状況から、可解斗は抜け出せないでいる。体はここにあるのだが、見事に心を置き去りにしてしまったらしい。
「おい、石竜。いつまでそんな顔してる気だ」
痺れを切らして怒鳴る元を、深麗が掴んで制止する。
「いけません。まだショックから立ち直っていないのですから、そんな乱暴な言い方は……」
「つらいのは、深麗さまも同じでしょう。こいつだけ、こんな振る舞いをするのは、許せません」
「私は、平気ですから。大丈夫ですから」
深麗にそんなことを言わせているのが、自分であり可解斗だという思いが、さらに元の神経を逆撫でしていく。自分で自分の怒りを煮立たせて、彼は可解斗に詰め寄った。
「石竜、いい加減にしろよ！　深麗さまに礼の一つも言えないのか！」
深麗の制止を振り切り、元は可解斗の胸倉を掴んで無理やり立たせる。

元の顔が間近に迫ると、可解斗はくしゃくしゃに顔を歪め、嫌々と首を振って元の手を払おうとするのだが、それは如何にも弱々しく、まるで元を退かせる役を果たせない。

その様が、さらに元を苛立たせ、惨めな感慨さえ沸き起こらせる。自分を、自分の蛟を二度まで打ち倒した男が、こうしてみっともない姿を晒すのを、元は我慢できなかった。

元は間髪入れず、思い切り振りかぶった右手で、可解斗の頬を張り倒した。同時に胸倉を離され、支えを失った可解斗は、そのまま地面に倒れ伏せる。

「元、何をするのです！？」

追いすがる深麗を、元は一度だけぎっと睨みつけ、それからまた倒れている可解斗に視線を向ける。

「この状況で、そんな甘えた態度が通ると思ってるのか！」

それは可解斗に言ったとも、深麗に言ったとも取れて、二人は等しく身を竦ませた。胸に手を当てて強張る深麗に対し、可解斗は蹲ったまま元を恨めしげに見上げるだけであった。

「七流を生かすだの、龍を倒すだのと言っておいて、何だこの様は。ふざけるのも大概にしろ」

「そんなの、今、関係ないじゃないですか……」

ようやく口にしたのは、吹けば飛ぶような弱音でしかなかった。

「関係あるさ。お前、悔しくないのかよ。あんな仕打ちを受けて、黙ってられるのか。俺は悔しいよ。あの接輿とか言う奴に、いきなり仕切られて、天袁さまを殺されちまった。他の連中は賛同してるみたいだけど、俺は納得いかねえ。こんなの、納得できるかよ」

「じゃあ、どうしろって言うんですか！？　たった三人で、敵を討てとでも言うんですか！？」

声を荒げる可解斗を見て、元はしたり顔を向ける。

「ああ、やってやろうぜ」

何をかいわんや。うんざりと可解斗は吐き捨てる。

「無理だよ、そんなの。元さんは、あの接輿って人のことを知らないから、そんなことが言えるんだよ」
「そういやお前、前に一度やり合ったんだったな。今回は負けたが――なあに、次はこうはいかないだろ」
元の言葉に、可解斗は項垂れながら力なく首を振る。
「あんた、何を見てたんだよ。まるで通じてなかっただろ。遊ばれてただろ。今度は大丈夫とか、次は平気だとか、そんなのが通じる相手じゃないんだよ！」
講堂での立ち合いを思い出したのか、可解斗がまた身を震わせる。両の手で体を掻き抱くが、それでも心胆を寒からしめるのは止まらないらしい。半開きの口だけが、音も立てずに軋んでゆく。
「だからこそ、だろうが」
みしりと拳を軋ませて、元が獰猛な笑みを見せ付ける。元より筋の通らぬことを人一倍に拘る気性だ。あの接輿のやり口は腹に据えかねているのだろう。真っ直ぐで男らしく、傍から見れば好ましい性分である

だが、それを強要するのは、あまりよろしくないだろう。
「今のままじゃ勝てないかもしれない。でも戦わなきゃ、絶対に勝てないんだぜ。まずはあいつの前に立たなきゃ、勝つだの負けるだの言えないだろう」
もっともらしいことを目の前でほざく友人を、可解斗は冷ややかに見つめていた。その熱い言葉の一端さえ、可解斗の心には響いてこず、また腹の奥を揺さぶられるような感慨も沸かない。
「別に、元さんには関係ないじゃないですか」
差し伸べられた元の手から、可解斗は目を背けた。
「豢竜氏の仕事だって、ここだけじゃないんでしょう。敵を討つ必要なんて、無いじゃないですか」
言えば言うほど歯止めが利かず、どんどんと言葉が喉元から競りあがってくる。

正直なところ、劉家の人間でもない元が幾ら主張しようとも、可解斗にとっては白々しいものとしか映らない。
「ここまで逃げてこれたんだから、もう放っておきましょうよ。仇より何より、僕らの無事こそ大事なんじゃないんですか？」
「この腰抜けが！」
またも元が胸倉を掴んで立たせるが、今度は可解斗もただ掴まれるだけではない。同じように元の胸倉を掴み、元の額に自分の額を思い切り叩きつける。
「ああ、そうだよ。俺は腰抜けだよ！　ガキにいじめられるような腰抜けさ。今さら張る見栄なんか無いんだよ！
でもそれは、みんなも同じじゃないか。こうして逃げたんだ。怖くて逃げたんだ。みんな腰抜けでいいじゃないか！　誰も困りゃしないよ！」
俯いていた顔つきが一転、皺を寄せて歯を剥き、今にも噛み付かんばかりの表情で、可解斗は元に食って掛かる。
「元さんはカッコつけたいだけなんだろ。そんなことに俺達を巻き込むな。勝手に一人で突っ込めばいいだろうが。仇なんて言葉で、飾ってじゃねえよ！」
可解斗の思わぬ怒声に、元が鼻白む。それを図星と取ったのか、さらに可解斗は調子に乗る。
「行きたきゃ一人で行けよ。あんたが腰抜けじゃないのなら、俺がどうだろうと関係ないだろ」
ぎりぎりと歯を軋ませて元が睨みつけるものの、もう可解斗はそんな脅しを受け取らない。

言いも言ったり。これでもかと言葉を吐き出し、鬼の首でも取ったように笑う可解斗の頬を、深麗の平手が打ちのめした。
乾いた破裂音が、可解斗の頭の中で木霊する。
「深麗、さん」
かろうじてそれだけを搾り出すが、後が続かない。続けようにも、

その崩れてしまいそうな泣き顔を見せられれば、誰しも言葉を喉の奥まで戻してしまう。
「やめてください。そんな言い方、やめてください」
可解斗だけでなく、元までもが機を殺がれ、言い争いを続ける気概を失っていた。
そして滔々と、二人に語り聞かせるべく、深麗は口を開いた。
「接輿さんの言うことにも、一理あります。今の劉家の体制は、この時代にそぐわないのかも知れません」
「深麗さま、そのようなことは――」
元の言葉をやさしく手で制し、深麗は続ける。
「でも、だからといって、あのような行いを、是とすることは出来ません――それさえ、私が当事者だからという、勝手な被害者意識なのかもしれません」
「そんな言い方こそ、やめてください。深麗さまや天袁さまがこんな仕打ちを受ける謂れはない。奴らこそ元凶です。奴らこそ――」
「そうかも、しれません。でも、そうではないかもしれない。残念だけど、私には分からない。だから――」
曖昧としたことを言いつつも、深麗の顔はきりりと引き締まり、何かの覚悟を決め、押し飲んだと思われる表情を見せていた。
「誰に責があるのか、確かめにいきます。ただ、それだけです」
元も可解斗も、返す言葉は無かった。ただ元は頭を垂れ、抱拳で礼を拝し、恭順の意を示していた。
一方、可解斗は顔を顰め、唇を噛み、何か自分の体の内から競り上がろうとするものに、耐え忍んでいた。

天袁亡き劉家の屋敷は、不気味なほど静まり返っていた。既にここは尋常な豢竜氏の居る場所ではなく、接輿の指導の下、龍の密猟を執り行うための拠点へと姿を変えつつあった。
それだけ天袁まで続いた劉家豢竜氏の体制を、皆が不満に思って

いたという証左だろう。無論、接輿とて一度は劉家豢竜塾に籍を置いた身である。思うところも無いわけではない。
しかしそれらのことなど、接輿個人にとっては些事以外にの何物でもなかった。
既に他の豢竜氏連中は、密猟した際の分け前の取り決めに精を出している。今まで逐一劉家の伝統に則っていたそれらを、この際に自分達の都合に合わせて改善してしまえと、躍起になっているらしい。
膨大な利潤を生み出す龍だからこそ、その毒に浸からぬよう伝統に守られてきたのだが、ここへきてその防波堤は消え、自らを毒へと浸らせ、なお嬉々として豢竜の技を揮う。
利の聡い連中は、皆転がり落ちるように己を差し出す。特段、接輿が手を加えずとも、こうして豢竜氏が金の毒に当てられるのは時代の流れであり、時間の問題である。
「くくっ、くふふ……」
その様がおかしくて、憚ることなく笑う。伝統を老醜と切り捨て、新たな時代の先端を開くと嘯きながらも、実際のところは単なる頭の挿げ替えである。彼らは皆、自分がこの時代に生まれた幸運を悟り、この機を逸せずにいたことを誇るだろう。
そんな彼らをこそ、接輿は笑う。それは愚かしい。間違っているという考えが彼の中では支配的だった。

豢竜塾を追い出され、裸一貫から中国マフィアの龍ビジネスを新たなに開拓してきた接輿だからこそ、その裏も表も知り尽くしていた。
龍を守り、養い、寄り添うのではなく、自分達のために利用し始めたら、もう豢竜氏は終わりだ。まずその精神が死に、やがて技術が腐り、そうして体も衰えていく。他ならぬ接輿がそれを体感していた。それ以前に、龍に愛想を尽かされてしまうだろう。
伝統と言うのは、あれでなかなか考えられている。それも当然だ。

万古の昔から培われてきた自然の観察、龍の観察を元に作られてきた形なのだ。金に目が眩み、目前の利潤にしか意識が向いていない連中は、それを徒に覆すことが出来ても、それ以上のものは造り出せない。

その先達を担った接輿こそ、豢竜氏の風上にも置けないだろう。とはいえ、他の豢竜氏たちが後生大事に抱えてきた伝統も、それを振り払って初めて得られる大金にも、接輿は興味が無い。

伝統など、自身の技を留めるだけの意味しかない。そして日銭を稼いでいられれば十分だ。

要は、壊してしまいたかったのだ。劉家を、豢竜氏を、歪め貶めることこそ、接輿の心の形であった。

そのきっかけを作ったのは、紛れも無い――あの征竜の息子である。

「これが俺の罪滅ぼしだよ、征竜」

沸々と沸き上がる衝動が抑えきれず、哄笑となって弾け出る。

一体何が彼にこのような振る舞いをさせるのか、余人の理解を捨て置いて、接輿は玉座に腰を据えて待つ。自分の親友である征竜、その息子が戻ってくるのを。

## 宿願龍：五

敷地内の構造を隅から隅まで把握している以上、その虚を突くのは容易い。

家屋の脇を進みながら、しかし可解斗の心はまだ陰鬱に沈んでいた。あの方術士――接輿の相手を命じられたからである。

一応、可解斗は元と深麗の二人と対戦し、勝利を収めている。ならば最も手強いと思われる相手に、この三人の中で最も強き者を当てるのは当然の戦略だろう。

だからこその気の沈みようであった。また動き出せるまでに心の平衡を取り戻したとて、接輿に剣を突きつけられたときの体験は、どうしようもないほど可解斗の奥に刻みつけられている。

いざ立ち合いとなれば、それは大きな枷となることが目に見えている。その上に向かうというのは、無謀以外の何ものでもないと、当の可解斗が感じていた。

自分は、戦えるのだろうか。初めて接輿と戦ったときは、このような煩悶はなかった。切迫した状況だったこともあるが、それだけではない。可解斗自身、接輿に対しての期待を押さえきれなかったのだ。あれほどの強者を打ち倒せるのだという喜びが――勘違いとはいえ――体に満ちていたのだ。

今はそのときの快活さは、微塵もない。講堂での二度目の対戦が、そんなものの一切を可解斗から殺ぎ飛ばしてしまった。

接輿の隠された実力にひたすら脅え怯み、これまで積み上げてきた自信が、微塵に砕けてしまい、一欠片さえ留まることなくどこかに浚われてしまった。

それらを取り戻すのは、接輿に勝つほか無い。自分の納得できる非の打ち所のない勝利を彼から奪わねばならない。

しかし、そんなことに意味があるだろうか。そうして仮に接輿を

屈服させたとして、何があるのか。
結局のところ、天遠は死に、劉家豢竜氏の支配は瓦解したのは、よそ者である可解斗ですら察するところである。否、よそ者であるからこそ、退いた視線で見ているからこそ、それが分かるのかもしれない。
今更接輿一人を攻略したとて、それが変わるとは思えない。ならば考えるべきは、その先のことではないか。その先の未来こそ、自分たちは考えるべきなのではないか。
劉家の豢竜はたしかに形骸化した。しかし中国の各所には、こうした豢竜氏の施設が据えられている。そこに保護を求めるなりすれば、安全は保障されるだろう。そして豢竜氏である彼らなら、また新しく雇ってもらい、職に就けるはずである。
ここは復讐の念の忘れるべきだ。それが成就したところで、自分たちに何の益もない。むしろまだ若い命を、あたら無駄にしかねない行為である。
そこまで考えていながら、可解斗はその無駄な行為を行おうとしている。ろくな勝算もなく、確固たる目的もなく。
ここで可解斗一人抜けても、彼には他の豢竜氏の知り合いなどいない。故に助けも求められない。そこに元や深麗を見捨てる苦々しさが加われば、本心を偽ることも難しくない。
それに、可解斗の考えていることは、深麗も重々承知しているのかもしれない。だからこそ彼女は、これを復讐とは言わなかった。ただ単に、責を取るのだと言った。
だけどその責とやらは、まかり間違えば深麗がこそ取らねばならなくなるのではないか。現に彼女は、劉家による支配体制に間違いがあったと認めるような発言をしている。
（深麗さん、あなたは……）
いったい何がしたいのですか？　まさか可解斗にそんなことを面と向かって問いただせる度胸などあるはずもなく、成り行きに身を任せ、いたずらにその命を危険に晒す。ほかの二人がそうしている

からという、ただそれだけの理由で。
「可解斗さん、さあ早く」
深麗の声を聞いて、ようやく可解斗は、自分が沈思していたことに気がついた。故にその反応は如何にも鈍く、足元に転がる小枝にさえ注意が及んでいなかった。

「あ」
何とか叫ぶのは抑えたものの、踏み折られる枝の音は、度し難いほど鳴り渡った。
「いたぞ、あそこだ！」
音に即応し、近くにいた見回りが叫ぶ。
「この、馬鹿が！」
駆け抜け様に可解斗の頭を叩くと、元はそのまま彼の前に立ちはだかった。
「深麗さま、この場は私が引き受けますので」
その後はもう継がず、ただ元は懐から抜き放った符を構える。
「あなただけでは無理です。私も残ります」
「せ、深麗さん！？」
突拍子のない申し出に、元も可解斗も戸惑いを隠せない。
「あなたが行かないと、意味がないじゃないですか！？　誰が責を確かめるんだ？　僕じゃそんなの、判断つきませんよ！」
「あとで必ず行きます。だから可解斗さん、露払いをお願いしますよ」
この期に及んで、露払いも何もあったものではない。
「あなたは鬼札です。あなたこそたどり着けば、あるいは――」
「そんな、無責任すぎる……」
「いいから行きなさい！　私も行きます。必ず、必ず行きますから！」
泣き笑いの表情を取りながら、これ以上言い争うのは状況が許さないことを感じ取り、可解斗はすぐさまその場を離れた。

「嫌な役をさせてしまいましたね、元」
「そのようなことは、決して……」
元と深麗が態勢を整えている間に、一人が歩み出る。それはかつて、可解斗を苛めていた年少組の一人であった。
「裏切り者が、よくのこのこと顔を出せますね」
その口ぶりには、かつて向けられていた尊敬など微塵も感じられない。

「裏切りはお前らだろう。こうも見事に掌を返して。正気か？」
「むしろ元さん、みんなはあなたの正気を疑ってますよ。もう劉家に媚び売ったって、何にもなりはしませんて」
「媚び、だあ？」
まるで見当違いの言い様に、元は顔を歪めて吐き捨てる。提示された他の豢竜氏との断絶は、もはや修復のしようが無いものらしい。
「忘恩の輩ほど度し難いものはない。龍をファッション程度にしか思ってないから、そんなことができるんだな」
「そういう能書きは、これを見てから言ってくださいよ」
男がこれ見よがしに指を鳴らすと、周囲からずるずると龍が飛び出してきた。その数は見る間に増えていき、人の数に数倍するほどになっていった。
「元さん、見てよ。僕らもこんなに龍を操れるんだよ。あの苦しい修行が馬鹿馬鹿しいったらありゃしない。龍ってのは、こんな簡単に操れるんだよ」
恍惚と語る少年が手に持った端末をいじると、数匹の龍が途端に苦しみ出す。ばちばちと激しく空気の弾ける音が、ちょうど逆鱗の辺りから迸っている。
よく観察してみれば、現れた全ての龍に首輪らしきものが取り付けられている。どうやらその装置から電気が発生し、逆鱗を直接刺激しているらしい。
見るもおぞましい代物に、深麗は堪らず目を背ける。豢竜氏の思

想から言えば、痛みによって龍を従わせるなど恥ずべき行いである。一応は劉家で豢竜を学んだ輩がそのような行いを平然とやってのける様は、深麗にとっては正視に耐えない。

「それはな、操ってるんじゃない。操られてるんだよ」

「あんたは深麗さまに操られてるんだろうに」

皮肉に皮肉を返され、元の心が緊張を高めていく。

「見せてやるよ。本当の、人竜一体って奴を――」

元が符を抜き払い、ふわりと地面に落とす。たちまち真っ白な水蒸気が立ち上り、その只中から蒼緑の鱗を纏った竜が現れる。

すでに深麗も白を呼び終えており、その頭に飛び乗って辺りを見渡す。人間こそ五人かそこらだが、周りに屯する龍の数は二十や三十ではきかない。一人頭にして五匹強ほど担当しているらしい。

確かにこのような現象、尋常な豢竜氏にはまず行えない。一匹一匹への配慮が散漫となり、まともに言うことを聞かせられないだろう。それを可能としている技術は――例え豢竜氏の倫理に悖るとはいえ、称賛に値する。

確かにこれでは劉家のやってきたことを無駄と断じ、排斥したくもなる。

（いけない。こんな気持ちじゃ、ダメ）

劉家の人間ではない元が共に戦ってくれているのだ。自分が怖じ気付いてどうする。

魔が差すようにして湧いた弱気を押さえ込み、深麗は白の頭を一撫でする。軽く嘶いてみせる白が、いつもながら頼もしい。

「行きますよ、白」

発声器官のないはずの蛇が、吠声を炸裂させた。応える龍たちの声が重なりあい、渦を巻いて深麗たちを包み込む。

それでも退かない。ここで退くわけにはいかない。もう既に一度は退いてしまったのだ。もはや退路はない。逃げ道を、妥協案も、虫のいい解決もない。あるのはどちらが踏みしだくか。ただそれだ

けである。

殺到する龍たちを白の尾が薙ぎ払い、蛟の波濤が押し流す。

## 宿願龍：六

元を置き去り、深麗に押され、可解斗は方々の体で講堂の前に辿りついた。恐らく、この中に接輿がいる。こうなれば覚悟を決めねばならない。

もしいなかったとして、この敷地を根こそぎ探し回るくらいの覚悟はある。あの接輿と対峙するのだ。そのくらいのことさえ決められなくて、どうして前に立てようか。

（いや、そんなのは、ただのカッコつけだ）

元が可解斗に言った、あの白々しい言葉の羅列と大差ない――それは中身の無い空威張りに過ぎない。

そんな飾りつけで心が奮い立つのならば、いっそ容易いし、安楽だ。そうして嬉々として自身の命さえ擲ってしまうのだ。貴重な未来に背を向けて、今のこの場をどうにかしたくて、でもどうしようもなくて、ただ死んでゆくのだ。さながら闇に灯る松明に群がる羽虫のように。

途端、可解斗の体に怖気が走り抜ける。筋肉が自分の意から離れたのか、ぶるりと震えて上手く動かない。

それは自身の想像に恐怖を掻き立てられたからでも、燃え死ぬ羽虫に自身を重ね合わせたからでもない。

講堂の扉から自分を迎えに来る二つの影が、ただ近寄ってくるだけでもう心がいっぱいになってしまったのだ。

「本当に来るとは、いやはや、律儀ですね。それとも、深麗のお嬢様に唆されましたか」

「どうでもいいさ。ここに来るってことは、もう命は要らんということだ。分かってるよな、石竜可解斗」

その二つの影は、あの日、ジムからの帰り道であったものと相違なくて、どうしてもあの時のことを想起させるものだった。

「信達（シンター）、唐信（トウシン）」
「お前を連れてきた俺達の過ち、ここで雪ぐ。お前の血肉で、雪がせてやるぞ！」
咆哮とともに繰り出される唐信の豪快な回し蹴りを、可解斗は両腕を畳んで受け止めた。
しかし如何せん、大人と子供である。その力には埋めがたい差が存在する。
「でえい！」
唐信がさらに腰を入れて足を押し込むと、それでとうとう可解斗の踏ん張りは限界に達し、地に足を取られ、肩を打ちつける。
致命的に体勢を崩され、急ぎ起き上がろうとした可解斗の頭に、信達の踵が斜めに突き刺さる。
頭だけが地面をボールのように跳ね、ぐったりと気の抜けた体はそれに追従する。
「ははっ。全く、接輿さまの言ったとおりだ。ここまで嵌ると可哀相になってくるぜ」
「確かにな。もうこうなっては、彼には何の手段もないのだから」
どくどくと鼻血を垂らしながら、可解斗は何とか身を起こす。苦しそうに喘ぐ口は、ただ鼻呼吸を阻害された辛さだけのものではない。
「何の、話、だ？」
そんなことを言う間に飛びかかろうかとも思ったが、残念ながら体が言うことを全く利かない。そもそも声を掛けてはいるが、可解斗には唐信と信達の姿がぼやけ、正確な位置が掴めていない。
ここは会話を成立させ、何とか回復する時間を捻出するべきだろう。
そんな可解斗の狡い考えを知ってか知らずか、唐信が得意満面の笑みで見下ろしてくる。
「お前の話さ、石竜可解斗。お前のその、七流とやらの話さ」

「君は、自分がどのようにして龍と戦っていたのか、覚えているかい？」
交互に喋る二人は、さながら双子のようだ。実際、彼らは双子のようにこの劉家で育てられたのだろう。
「どうやって？　それは、七流の技を使って――」
「それだよ。そもそも、そこがおかしいんだ」
我が意を得たりとばかりに信達が手を打ち、可解斗の台詞を半ばで切る。
「果たして龍に、人間の技が通じるかね？　五体それのみを条件としたもので、龍を屈服させられるのか？　答えは否だ。豢竜の歴史上、そのような技術も事実も現象も確認されていない」
いきなり七流を全否定されて、それでも可解斗には何の感慨も浮かんでこない。そうやって得意絶頂になっている間に、こちらは反撃の準備を着々と整えることが出来る。
「人間は龍に勝てない。だから方術を用い、呪術を掛ける。そうして森羅万象の力を借り受け、何とかあの神代の獣を使役するに至るのさ。それは断じて、殴り蹴り折り投げて、屈服させるような関係じゃないんだよ」
「そうだ。俺達はあくまで、龍に協力してもらっているに過ぎない。豢竜氏の方が強いから、龍は従うのではない。豢竜氏と居たほうが暮らしやすいから、そばにいてやっている。それが健全な豢竜氏と龍の関係だ」
「なのに、君は――」
軽薄だった信達の声が、突如として硬質なものへと変化する。
「君のそれは――七流は、豢竜の常識を覆す。生身の人間が龍を殴る？　馬鹿馬鹿しい。そんなものは子供の夢だ。たちの悪いも妄想だ。でなければ……極めつけの悪夢さ。特に僕達、豢竜氏にとっては」
「だったら……だったらどうだと言うんだ？　あれが嘘だったと？　僕と戦った連中は、皆が皆、嘘だったって言うのか？」

「……もしそうなら、どれだけいいか」
唐信がさも忌みしげに吐き捨てる。
「彼らのことを疑うのは、さすがに失礼でしょう。それは君の技にも言える。君は正真正銘、自分の拳で龍を殴り、自分の脚で龍を蹴った。そして倒した。それは覆らない」

まるで医者が術式を失敗したように顔を曇らせ、苦々しく信達は言う。
「ただ、その力こそが問題だ。その膂力、耐久力、集中力その他諸々。人間に与えられたものではどうやっても補え切れない範囲で行使されているとしか思えないその力は、一体どこから沸いて出たのかな？」
「僕に、聞いてるのか？」
「答えられるのかね？　なら聞きたいものだ」
そんなものは決まっている。父である征竜から、嫌と言うほど叩き込まれてきたのだから。
「まず呼吸と姿勢を正し、その力を過不足なく発揮することで――」
「ああ、はいはい、もう結構。思ったとおりだよ。まるで知らないわけだ。まあ、知ろうが知るまいが、扱えれば何の支障もないのだろうがね」
またも可解斗の台詞を半ばで切り、信達は熱に浮かされた表情で語り始める。自分の言葉で自分を煽り、なおさら調子を上げているらしい。
「君はねえ、龍の力を、龍の気を取り込んでいるのだよ。そのもっともらしい、姿勢や呼吸を使ってね」
「龍の気？」
何か、足元がぬかるんだような感じがした。
それを分からない、嘘だ違うと切って捨てるのは簡単だ。しかしその言葉が確かに、父親のもの以上の説得力を伴って入り込んできたのも、また事実である。

可解斗自身も七流に対する疑念を、あの大会以降持ち始めていた。
「君の七流は、敵対する龍の気を己に取り入れているのだよ。そして体に龍のそれと同じ力を宿らせる。龍の力で龍を殴るのだから、そりゃあモロに食らえば倒れもするさ」
秘中の秘を明かし終えた信達は、可解斗の反応を窺うべく、顔を覗き込んでいる。しかし可解斗にしてみれば、何とも返答に困る秘であった。
自分よりも拳法や豢竜に詳しい者の見解だ。それを認めるのは吝かではない。だが、たとえ信達の言うとおりだったとして、可解斗は何をどうすべきなのだろうか？　それを誰に憚るのか？　何かを恥じるのか？　どんな謗りを受けねばならぬのか？
「言いたいことは、それだけか？」
頭の痺れはすっかり取れ、足取りに不安は無い。鼻血もある程度止まり、片方の鼻孔は息が通る。これだけ揃えば動くには十分だろう。
ゆっくりと立ち上がり、両の手を見えない何かに添えるように柔らかく突き出す。七流、水の流れである。
しかしそれを見ても信達と唐信は応じることなく、薄ら笑いを浮かべて眺めるのみだった。
何とはなしに軽んじられていると思え、可解斗は神経を逆撫でられる。
「さあ、あんたら豢竜氏だろ。とっとと、龍を出してみろよ」
覚悟を決した可解斗の言葉を、唐信は一笑に伏せてしまった。どうやら気のせいではなく、本当に軽んじられているらしい。
「さっきの説明を聞いてなかったのか？　お前なんて、龍がいなけりゃただのガキなんだよ」
そういって信達と唐信は、拳を構えた。
ここへきてようやく、可解斗は寒々しいものを腹の底に感じた。もう彼の腹の底に滾るものは跡形も無い。

愕然とする可解斗の顔を見て、信達はさらに気をよくしたらしい。
「僕らが龍を呼び出すと思っているなら、残念だけど当て外れだよ」
じりと踏み出し、可解斗との間合いを詰める。それに応じて、可解斗は左後ろへ下がる。
「君は近くに龍がいなければ、龍の気を取り入れられないだろ？」
もう蹴られた衝撃は抜けたはずなのに、足がまた震え始める。
改めて言われてみれば、至極その通りだ。これまで感じていた滾りは、須らく龍と対峙したときのものだったではないか。それを改めて他人に言われただけで、可解斗の動揺は極まってしまった。
そんな簡単なことにさえ、目を背けていたかったのかもしれない。自分だけが気づいていて、誰も思い至らないのだと、何の根拠もなく盲信していただけだった。
豢竜氏ならば龍を出す。そう当て込んでいた自分が憤ろしく感じられる。彼らとてぼんくらではないのだ。豢竜氏は、この世の誰よりも龍の近くに寄り添い、その生態を知り尽くして共に暮らす人種なのだ。
自分の浅はかな秘密など、途端に看破されてしまうのだ。その証拠に彼らは、龍を用いずに自分と戦おうとしている。
龍がいなければ、あの滾りが感じられなければ、果たして自分は戦えるのだろうか。七流は通じるのだろうか。

それ以前に、これだけの殺気を向けられて、生きていられるのだろうか。
「こら、逃げるなよ」
軽く左の拳が走り、頬を叩く。それにはっとした可解斗の腹には、もう唐信の右拳が突き刺さっていた。
腰が完全に浮き上がり、つま先まで突っ張っている。これ以上無い命中の程であった。
左上段突きから左に入り身しての右中段突き。その典型的な連環

さえ、まるで可解斗は防げなかった。
鳩尾に決まった一撃で足を止められたらしく、可解斗の足はずしりと重く地に付いて、如何にも動きそうにない。
「があっ」
それでも無理を押して、真下から振り抜く後ろ回し蹴り――火の流れ、臥竜尾を繰り出す。
渾身の一撃は、果たして唐信の服にすら掠りもせず、空を切って足裏を天に向ける。
しまったと思う可解斗の頭ごと、信達の蹴りが根こそぎ払う。逆立ちに近い体勢だった可解斗が、勢いでくるりと前転して顔面から着地する羽目になった。
「がはあ！」
うつ伏せになった可解斗をすかさず唐信が踏みつけ、胸郭を圧迫する。すぐに息を吐きつくした可解斗が、まるで金魚よろしく口を喘ぐ。
「龍は倒せても、人を倒せんとは。ちぐはぐな奴だ」
頭から掛けられる嘲りも、今の可解斗は跳ね除けることが出来ない。所詮、体格は大人と子供。思い切り体重を掛けられれば苦しみ喘ぐのは目に見えている。
おかしい。こんなのはおかしい。いつもの自分なら、本来の七流なら、こんな男の一人や二人、物の数じゃないのに――。
これと同じような感覚を、可解斗は知っていた。中国に来てからは、久しく味わっていなかった感覚だ。
無力感。焦燥。これは日本にいた頃、七流を活かしきれていなかった頃、日常的に感じていたものと同じだった。
四肢に力を込めて見ても、唐信の足はしっかと背中に固定され、さらに地面に押し付けてくる。
龍が近くにいなければ、導竜法によって龍気を体の中に取り込むことができない。それがなければ、七流は運用できない。
少しでも通用するかと思ったが、やはりまるで歯が立たない。い

っそ笑えてくるくらいだ。龍気による爆発的な身体能力の向上がなければ、可解斗の用いる七流など、真っ当に拳法を習得した人間に通じるはずもない。

分かっていたのだ。もう十分に思い知らされていたはずなのだ。日本で嫌と言うほど体に刻み付けられたはずだった。

――七流は、人に通用しない。

それを何故忘れていたのか――答えは簡単だ。有頂天になっていただけのことだ。七流が通じる環境。打ち倒される龍。為す術も無い豢竜氏。度重なる勝利に酔っていたのだ。

憤ろしい。しかしどうしようもない。体に力が湧かず、翻って心も折れて形を失う。

## 宿願龍：七

同じ頃、深麗と元もまた戦っていた。
白い大蛇に、黒虫のように龍が集る。嘶きが苦しみの叫びとなり、血を迸らせて身を捩る。しかしその巨体を活かし、体中に噛み付いているそれらを地面に押し付けて無理やり離す。
「白、白！」
深麗の呼びかけに、白は喉を鳴らして応える。しかしそれは如何にも弱々しい。
白は特に生命力が著しい種類の龍である。如何なる攻撃を受けようと、内傷外傷を問わずたちどころに回復させてしまう。噛み付かれたとしても、よほど大きな部位が切り取られない場合、瑕疵にすらならない。
だが今の白は、その名の通り真っ白だった体を血の朱に染め上げている。

開戦した当初こそものともしなかったが、五十を超える龍たちによる噛み付き、引っ掻きなどの攻撃は、白の体を容赦なく削ぎ取っていった。
それらを全て回復させると、白にも疲労の色が見え始めた。今は当初の半分ほどの速度でしか回復が行われていない。
しかし、その甲斐はあったと言うべきか。龍の軍団は数を減らし、半分ほどしか動いていない。大半は白に飛び掛った際に飲み込まれ、今正に消化されているか、白の巨体に薙ぎ倒されて身じろぎも出来ないでいる。あとの龍は、元の操る蛟の生み出した水流で押し流されている。
無論、深麗や元にも疲労は窺える。戦っているのは龍自身だとはいえ、共に戦場に立ち、共に戦っているのだ。豢竜氏として手練であればあるほど、心や体も龍に寄り添い、共感するにまで至る。

「さすがは劉家正統の豢竜氏。でも、ここまでです」
在り来たりな台詞を、自分よりも年下の者に吐かれる。しかし撤回させるには足りない。こちらは二匹とも健在ながら、相手は未だに二十近い。
白に同じく。蛟もまた消耗が激しい。特に蛟は頭の上の瘤『博山』が見るからに萎んでいる
『博山』の中には蛟の力の源となる水『尺水』が込められている。龍の軍団を撃退するために水を酷使したため、『尺水』までも減ってきてしまっている。
それでもまだ蛟は、元を守るようにして立ちはだかっている。見上げた絆と言えるだろう。力量の足りない豢竜氏ならば、龍が深手を負ったり疲労を極めた際に見捨てられてしまうことも少なくない。
「蛟、まだいけるな」
元の問いかけに、蛟は高く嘶いて応える。龍が未だに戦う気概を失っていない以上、豢竜氏が背を向けることなど有り得ない。
深麗も負けじと、己を奮い立たせる。元だけに気を吐かせるわけにはいかない。むしろ劉家の後継として、自分こそ矢面に立たねばならないだろう。
白に乗って龍の群れの只中に入った深麗だったが、その不用意な突込みが災いし、白ごと龍に集られる。

その内の一匹が、深麗のところまで肉薄してきた。
「あごおッ！」
振るわれた龍の尾の先が、深麗を腹をするりと掠る。その柔らかな触り心地を裏切る衝撃が、脇腹で暴発する。
堪らず深麗が白の頭から転げ落ちる。内臓さえ抉り飛ばされた感覚に襲われ、深麗はすぐに自分の脇腹を擦る。そして何とか自分の脇腹がまだ健在であることを確かめると、立ち昇ってきた痛みに身を竦ませた。
せめて手を当てて耐えようと試みるが、軽く触っただけでも腹の

中からごりごりと嫌な音が響く。砕けた肋骨が、互いに当たって鈍い音を奏でているのだ。
手を添えることも出来ず、かといって身動きも取れない。少しでも腹の辺りに力を込めれば、すかさず激痛を訴えて行動を無理やり止めさせてくる。
（まずい。これは、駄目……）
こんなところで蹲っている時間は、深麗には無いはずだ。早くこの場を片付けて可解斗の後を追わねばならないし、そもそも早く逃げねば、あの龍たちが殺到してくる。あの鋭い牙と爪が、容赦なく自分の体に食い込んでしまう。
豢竜氏なら、龍に殺されるのはむしろ本望だろう。しかしこの場では御免被る。まだ自分は、確かめていない。責の在り処を見つけてはいない。それが分からないうちは、殺されるわけにはかない――。
そんな覚悟の大きさとは裏腹に、体は言うことを聞いてはくれない。早く逃げねばと焦れば焦るほど、脇腹の痛みが鮮明になって頭を占めていく。
せめてじりじりと指で地面を掻いてみるくらいしか、深麗には出来ることがない。
甲高い龍たちの嬌声――もしくは深麗と同じように、痛み苦しんだ末の金切り声なのもしれない――が背中を叩く。それが徐々に近づいてくるのが、いちいち顔を向けずとも感じ取れてしまう。
とうとうそれが間近に迫った時、深麗の視界が暗澹としたものに包まれた。
これが死の直後の視界なのか。そんなことを感じていた深麗だったが、いつまでたっても体の感覚が鮮明に残っている。これはおかしいと考えてようやく、深麗は自分が何かに覆われていることに気がついた。
「白……」
白がその巨体でとぐろを巻き、深麗の周囲ごと包み込んでいる。

群がる龍たちから、身を挺して深麗を守っている。
堪らず、深麗の目に込み上げてくるものがあった。これほどありがたいことはない。豢竜氏冥利に尽きると言うものだろう。
ならばもう、出し惜しみは出来ない。

「白、いいわ。お哭きなさい。あなたの渇きを、叫びで満たしなさい！」
深麗の下知を受けて、白がその口を空へと向けた。
「モオオオオオオオ！」
白が、まるで牛の如き声を天に向かって上げ始めた。身を震わせ、喉を膨らませる。それは渾身の叫びであった。
その叫びが十分に周囲へ響き渡ると、周囲にいた龍たちもまた、叫び始める。それは白の叫びに共鳴しているわけではなく、もがき苦しむ苦悶の音だった。
見れば、龍たちの身が総じて煙を吐き、ばきばきと音を立てて乾いていく。この超自然の怪異は、明らかに白の叫びが原因となっていた。
蛟に限らず、龍とは水と非常に強固な関係を持っている。それは古代から周知されており、『管子』や『春秋左氏伝』に“龍は水から生ず”あるいは“龍は水物なり”と言及されている。
蛟のように水を従え、雨を降らしたり洪水を起こすのも龍の力だ。しかし旱魃もまた、龍によって引き起こされるものである。

「モオオオオオ！」
さらに白が音量を高め、身を震わせて叫びを天を届かせる。そのときには白の叫びに追従しようと言う龍はおらず、皆が皆、ぐったりと身を地面に横たえている。
水を司り、豊穣を齎すとされ、雨乞いの際には必ず奉られていた龍に対し、蛇はその性格に若干の違いがある。
ここに大蛇あり、赤い首に白い身、その声は牛のよう。これが現

れると、邑は大いに旱する。
特に蛇は凶兆。恵みの水を断つ乾きをもたらす凶獣とされていた。
水や雨の因である龍が、豊穣の象徴とされ、天子と結び付けられる中、蛇はその逆――つまりは旱魃の因とされている。その叫びならぬ叫びは雨を遠ざけ、旱魃を呼び、而して豊穣を妨げるものだった。
ようやく白の声が止む。『山海経』の伝説ほどではないにしろ、白の叫びは龍たちの水を奪ってみせた。
叫びを止めた白は役目を終えたとばかりにとぐろを崩し、その巨体を地面に横たえる。
「白！」
深麗が声を掛けるが、首を僅かに巡らせて真っ黒な瞳孔を見せるだけである。
この旱魃を呼ぶ声は、まさに白の秘中の秘であった。本来は発声器官を持たない喉を無理やり震わせて、呪術によって周囲にいる龍の体を乾燥させ、行動不能に至らしめる。龍に属する獣にしか通じないため使いどころが少ないが、今回のような状況に嵌れば十分に効果を発揮する。
その意味で、白の叫びは覿面だったといえるだろう。徒党を組んでいた龍たちは例外なく地に倒れ伏せ、操っていた若い豢竜氏たちは事態を把握していないらしく、蹴りつけたり手で張ったりと、何とか龍を動かそうと躍起になっている。
その振る舞いには、龍への畏敬など全く感じられない。こんな人物が劉家で学んでいたと思うだけで、深麗の心は忸怩たるものに満たされる。
龍たちが、のっそりと鎌首をもたげる。どうやらまだとどめとはいかなかったらしい。しかし蛟も白も、今は戦えるような状態ではない。
震えを隠せず見つめる深麗と、起き上がる龍たちの目を合う。ぎろりと睨みつけてくる龍眼を見て、深麗はすでにこの場の決着を予

感した。
首を起こす龍の様はいかにも鈍く、いらついた様子で彼らは龍の頭を容赦なく打ち据える。
「おやめなさい。そんな、ことは……」
一応は忠告してみるが、今さらそんなことを彼らが聞き入れるわけがない。
「さあ、とっととあいつらを殺してしまえ。あとはもう噛み付くだけだろうが！」
暴力的に急かす男に、ぐるりと龍が首を巡らせた。
突然に自分の方を向いた龍顔に、男はぐっと身構えてしまう。その威容が間近に迫れば、仕方の無いことだろう。

渇いた口が水分を求めたのか、口を大きく開いた龍の口が、男の喉笛に吸い込まれていった。
よほど想定外の出来事だったのだろう。男は声の一つも上げられず、ただ呆然と自分の首を押し潰す龍を眺めている。
龍にしてみれば、人間の首など藁束のようなものである。噛み潰すのに数秒と掛かりはしない。男が次の動作を起こす前に、龍は体を捻って男の首をその体からもぎ取った。
未練たらしく脊髄が尾を引き、横倒れになった胴体からは止め処なく溢れている。無論、もぎ取った首はぐしゃぐしゃに噛み砕き、頭蓋ごと丸呑みにして腹を満たす。
「ガアアアアアア！」
吼え猛る声に応じて、他の龍もまた競い合うように吼えていく。
猛っている。明らかに猛っている。白の渇きが如何に作用したかは知れないが、龍たちは明らかに何の支配を受けていない状態となっている。
豢竜氏と共に暮らす龍は、野生のものよりは比較的に気性が穏やかになる傾向がある。リラックスしている状態では見分けがつかないが、このような戦闘となると、目つきを見れば瞭然である。

すでに龍は、彼らの支配から解き放たれている。
解放された龍たちの衝動が差し向けられるのは、自分たちをこき使った主人である。経験的に深麗は、それが分かっていた。
「やめろ、嫌だ。くそ、言うことを聞け！」
事ここに至れば、彼らにも察しがついたのだろう。皆一様に恐々として後退り、端末をいじって何とか言うことを聞かせようとする様が、もはや滑稽以外の何物でもない。
龍たちが彼らに従う謂われも必然もない。それでも目の前の状況が飲み込めないようで、未練たらしく言い募る。
「ひ、ひ、ひぎゃあああああっ」
もはやいちいち見届ける気すら起きず、深麗は叫喚を背にして立ち上がる。白と蛟を符の中にしまい、二人は可解斗の向かった講堂へと急いだ。

## 宿願龍：八

亀のように畳まれた腕に、信達の蹴りが炸裂する。防ぎはしたが足が追いつかず、可解斗はもつれながら背中を壁に打ち付ける。
背で壁を拭くように横へ這い、少しでも距離を開けようとするのだが、もう一人が回りこんで逃げ道を塞いでくる。
「死んでしまえ。豢竜を貶める鬼子め」
先ほどから拳足と共に揶揄を投げつけられ、しかし可解斗は言い返す気概も失せていた。
今さら信達と唐信、あるいは自分。そのどちらかが合っていて、間違っているかなど興味は無い。自分が一方的に虐げられ、反撃の余地すら与えられない。それが可解斗の全てだ。
なけなしの気力を振り絞って、狙い済ました反抗を見せても、嘲笑うようにするりとかわされ、手痛い一撃を返されるのが常となっていた。
体力よりまず、気力が萎える。それに釣られて体から力が抜け、だらしなく逃げ惑う羽目になる。

それでも――まだ立ち上がり、とどめを避け続けるのは、期待しているからだ。
龍さえ、龍気さえ取り込めば、勝てるのではないか。心身充溢し、こんな疲れや負傷も消し飛ばして、彼らを瞬時に屠れるのではないか。その期待が、可解斗は捨てられない。捨てるわけにはいかない一線であった。
「しぶといねえ。一応は鍛えているだけの事はある」
言葉どおりに受け取れば誉めているようにも聞こえる。しかしその見下しきった顔を見れば、嘲弄であることが窺えるだろう。
「まだ勝つ気でいるのか？　だったら見せてみろよ」
もう彼らにしてみれば、自分達の勝利は確定しているのだろう。

その上で可解斗の体と心を完膚なきまでに叩き潰し、溜飲を下げるのが目的であるらしい。
そんな迂遠な行いも、覆す力を持たなければ拒否し得ない。今の可解斗には、何も言えることはないのだ。
駄目元でもいい。全くの無駄でもいい。こうなれば、七流と心中するしかない。
（本当に、それしかないのか……）
死中に活などという言葉ではごまかしきれない。ゆっくりと、しかしながら巨大な奔流に、可解斗は飲み込まれそうな気がしていた。
膝を内転させ、股を締め、脇を締め、背を正し、深く息を吸う。肺と言うよりは体全体に外気を取り込むように、姿勢を正して空洞になった自分の中を、再び満たしてあげる。
七流、一の流れ、竜、導竜法。後に続く全ての流れの源であり、七流の前提でもある。

これが成功しなければ、可解斗に勝ち目は無い。しかし成功するには、彼の周囲に龍が存在し、大気に龍気を放散していることが必要なのだ。
（それでも、今は――）
やるしかない。これに賭けるしか、自分には出来ない。自分は知らない。
「ふうう――」
大きく、ひたすら大きく外気を取り入れる。これ以上無いほど胸を張り、腹を膨らませ、喉を震わせる。
僅か腹に力が溜まり、疼くような気配があるものの、龍と対峙した時とは程遠い。可解斗はもっと、丹田が迸るほど回転し、その内圧を高めていくような感覚が欲しいのに、返ってくるのはちりちりと臍の辺りが炙られるような柔いものだけである。
まだ足りない。まるで足りない。これでは、全くもって戦えない。
「はあああああああ――」

より深く、より大きく、呼吸する。焦る気持ちを無理やり抑え、導竜法を崩さないようにしながら、限界まで外気を取り込もうとする。

そのいじらしい様を見つめる信達と唐信の視線を、努めて無視して、今の可解斗は龍気を求めて叫び続けていた。

しかし元よりこれは、二人の計らいから生まれた余興でしかない。可解斗の中にある希望を、根こそぎ踏み砕いて絶望させ、己の過ちに気がつけるようにとの心遣いであった。

事実、可解斗は自分の拠り所である七流を発揮させたものの、やはり全く機能する様子はない。

「はああ――あ、あうう……」

それどころか、可解斗の肺腑が先に限界を迎えたらしい。横隔膜が痙攣してるのか、えづきながら普通の呼吸もままならないでいる。

あれほどの力を揮っていた七流も、こうなっては形無しだ。たったこれだけ――龍が近くにいないだけで、こうも無様を晒す。

もう十分に信達と唐信の溜飲は下がりきっている。目の前の豢竜氏もどきが見せるささやかな抵抗は、彼らの自尊心を充足させて余りあるものだった。

「石竜くん。もう、いいかな？」

声音を押さえた信達の呼びかけに、可解斗は今にも泣き出しそうなほど歯を剥いて睨みつけてくる。それは正に自分の大切なものを、今にも砕かれようとしているからこその嘆きであった。

その頬の引きつりが、絞られる唇が、萎む目が、自分の敗北を伝えているとも知らずに、可解斗は自分の顔を歪ませる。

可解斗の顔が敗者のそれなら、今の信達が見せているそれは、勝者の顔と言ってもいいのだろう。

その眉尻はきりりと引き締められ、口に浮かぶのはあくまで淡い微笑である。彼の奥底に醸成された自信が、顔にも仕草にもにじみ出ている。

それを表出させているのは、間違いなく可解斗であった。
「もういいよな。十分やり尽くしただろ？　だから、もう分かってるよな？」
唐信はむしろ獰猛なほどの笑みを晒し、急かすように拳を握り締めている。こちらは自信と言うよりも、達成感のようなものが表れている。あとはもう最後の一手を差すのみだ。早くそれを差したくて、もう辛抱たまらないように可解斗へと歩み寄る。
唐信は可解斗の胸倉を徐に掴み上げ、その体を塀に打ちつける。あとはその頭が砕けるほどに拳で打ち抜いてあげるだけだろう。
可解斗は、唐信を見ていない。その目は彼の背中を超えて、あらぬ方向へ向けられている。
訝しんだのも束の間、釣られて唐信が後ろに振り向いた時、彼の目には何も映らなかった。
生温い感覚と、こめかみを押し潰される痛覚だけが、鮮烈だった。

「唐信！」
信達はその場から一歩も動けず、唐信が突如表れた龍に頭を噛み砕かれるのを、呆然と眺めていた。
横にくわえ込まれた唐信の頭蓋はばっくりと割れ、踏み固められた砂地に血を拡げていくが、夜陰に塗れたこの場では、底なしの沼にしか見えない。
それでも唐信は命を訴えるように、ときたま震えている。頭蓋を砕かれた衝撃が、まだその体を苛んでいるのだ。
何故、この場に龍が現れたのか。信達の頭は上手く働かない。唐信の脳漿と思わしき綿肉をべっとりと口先に付けた龍は、一心不乱に彼の頭の中身を貪っている。
龍に人が食われる。豢竜氏にとって珍しい事態ではない。操作を誤ったり、機嫌を損ねたりすれば、龍は容易に人を裏切る。
――むしろ龍が人に協力しているという状態が異常なのだと、豢

竜氏は須らく弁えている。その異常な状態を維持するために、豢竜氏は技を駆使するのである。
珍しいことではない。しかしおかしいことである。納得し難い事態である。龍を操れるものは、深麗と元の討伐に向かっているはずである。この戦いに介入し、ましてや唐信に襲い掛かるなど、罷り間違ってもありえないはずだ。
そこまで考えを巡らし、信達はようやく目の前の龍が、元の操る蛟の特徴を有していることに思い至った。

博山と呼ばれる特徴的な瘤は、それが蛟の類であることを示している。
（まさか、元の奴か！？）
元がここにいるということは、警備の者達が突破されたと言うことであり、また、元と行動を共にしているであろう深麗が現れる可能性も示唆している。
信達の周囲に、影が落ちる。まさか月が雲に隠れたわけではない。信達のいる場所だけが、くり貫かれたように黒く陰っているのである。
「信達」
冷ややか極まる声が、背中を叩く。顔に表れていた自信は、そのことごとくが削ぎ落とされ、蒼白を通り越して何の起伏も欠いていた。
そのくせ息遣いだけは荒さを増し、浅く繰り返すばかりでまともに呼吸することもままならない。
「何故、龍を呼んでいないのですか？」
平静な問いかけが、むしろ心を圧迫する。どこか咎めるようなものを感じるのは、信達にも心当たりがあるからだろう。
「そ、それ、は……」
大人しく答えようとした信達の意に反して、舌は痺れきってしまい、声を紡ぐ助けにもなりはしない。

「豢竜氏を貶めたのは、あなたたちのほうだ」
それ以上聞くことはないとばかりに、深麗が失望気味に吐き捨てると、信達を覆っていた影がどっと傾れ込む。
口は動かずとも足は動いたらしく、信達はその場から横飛びに逃げる。

しかしそんなもの――人間のささやかな抵抗など、龍が斟酌するはずがなかった。
「あぎいッ！」
逃げ遅れた両の足が咥えられ、信達はちょうど宙吊りのまま白に掲げられた。
深麗の令に従い、白は信達を咥えたまま、その口を力強く閉じた。
ばぐん、という音と共に、信達の体が地面に落ちる。しかしそんな衝撃よりも、足から昇る焼け爛れるような痛みが彼を満たしている。
もはや自分の足を見る気にもなりはしない。今さら見たところで、戻るものではないのだ。そんなことより何より、今しなければならないことがある。
――豢竜氏の技に従い、龍を顕すことが、今は先決だ。
信達はすぐさま符を抜き放ち、自分の龍を召喚して相対させる――はずだった。
よもやそんな行為を見逃しているほど、白も深麗も暢気ではない。
信達が詠唱している最中に、白の口が覆いかぶさり、両脇から彼の体を挟み込んだ。彼は両手と背中で突っ張り、何とか喰らわれるのを阻止している。
「ぬが、ぐうう……」
しかし、既に召喚が許される状況ではない。僅かでも体の緊張を解けば、龍の咬合力で信達の体は噛み潰されるだろう。
――そもそも人間が精一杯に抗ったとて、それが龍に通じるのだろうか。

否、そんなもの、龍が汲み取るはずがない。他ならぬ豢竜氏の歴史が、それを証明し続けてきたのではないか。

「あああああああ！」

自身の体が今まさに潰される音を聞きながら、信達は堪えきれずにあらん限りの声を上げた。

断末魔を一頻り叫び終えた頃には、信達の体はその厚みを半分以下にしていた。代わりとばかりに吹き出したりはみ出したりする血肉ごと、白はその大きな口で丸飲みにしてしまった。

## 宿願龍：九

「深麗、さん」
龍が人を喰らう様を放心の体で眺めていた可解斗が、漸う深麗へと呼びかけた。
すでに気力の限りを振り絞った後なのだろう。その頬は夜でも分かるほどに青ざめ、いかにも力なく項垂れている。
駆け寄ろうとした可解斗だったが、その足が止まる。顔面を蒼白にして、疲労を困憊させた深麗が、垂れ下がる前髪の奥から強い瞳で見つめている。
「少し、疲れました。申し訳ないのですが、休みます」
言ったきり深麗は白の体に寄りかかり、ぐったりとうなだれてしまった。その様は、さらなる追求を止めて余りあるものだった。
まだ色々と聞きたいことがあった。何よりまるで、自分は休むがあなたは行きなさいと言わんばかりの、その真意を確かめたかった。
「まだ僕に、戦えと言うんですか……」
深麗も確かに這う這うの体だが、可解斗の損耗も大概である。加減されていたとはいえ、大人二人に打ち据えられていたのだから。

正直言って、ここで深麗と共に膝をついて休んでいたい。贅沢を言えば布団に包まってそのまま眠りこけていたい。
――そんなものは叶わない。自分の居場所は、とっくに壊れてしまっているのだ。それくらいのことは、可解斗の理解できている。
しかし、まだ自分が進む理由があるのだろうか。これ以上に傷を負うことも、疲労の上に疲労を重ねることも、全てを抱えてでも行く場所が自分にあるのだろうか。
「……お願いです。あの男を、接輿を――」
その後が続かず、深麗はただ可解斗を見上げる。それ以上は察してほしいというのだろうか。だが可解斗には、深麗の思惑などに

考えが及ばない。
何を映しているのか分からない深麗の瞳に押されて、可解斗は足を引きずりながら、講堂の扉を押し開いた。
煩悶とする可解斗の思いに反して、扉は素っ気無いほどの軽さで招き入れてくれた。きちんと灯りを切らさぬ堂の中を、真っ直ぐに歩み進む。
何で自分はここにいる。どうして歩いている。どこに向かっている。何故そこを目指す。
自問しながら進む。自答さえない。只々、問いに問いを重ねていく。今さら無駄じゃないか。それでも足を動かすのは、やはり悔しかったのだろうか。あの男にまた会いたいと、心の中で思っていたのだろうか。

それとも、深麗にカッコいいところを見せたかっただけなのか。彼女の思いを裏切りたくないのだろうか。
あるいは豢竜氏への怨み辛みか。やはり自分は、自分を疎外しようとする豢竜氏が好きになれず、ただその象徴として接輿の所へ向かっているのか。
もしくは、七流を活かしたいだけなのか。それを揮える場所を、まるで昆虫のように一律的に求めているだけなのか。父との約束に殉じて、そんな自分に酔っていたいだけなのか。
もう可解斗の視界には、講堂の奥にある舞台が映っていた。その上にある玉座に座る、接輿の姿も――。
「やあ、征竜の息子」
相も変わらず、友人にでも気さくに挨拶するように、軽々しい声を掛けてくる。
「一体、何の用かな？　そんなひどい有様で、何をしようというんだい？」
その芝居めいた仕草も、今の可解斗は気にならない。そんなことに割く神経すら、置いてきてしまったようだ。

「来て、しまったんです。ただ、それだけです」
「誰かに言われて、来たのかね？」
「そうです」
「私に、再戦を申し込むためか？」
「そうです」
機械的に答える可解斗に要領を得ないと感じたのか、接輿が組んでいた足を解き、玉座から立ち上がる。
「答える気がないのか。それとも、本当に考えなしに、ここへ来てしまっただけなのか」
どちらでもいいか。これ見よがしに肩を竦め、接輿はそんなことを呟いた。可解斗は申し合わせたように、じっと接輿が降りてくるのを待っている。

揶揄されるのも当然の無計画ぶりだ。思えばここには、何も持たずに来てしまった。信念も、理由も、勝機も、外に置き去りにしてきていた。
問うて、問うて、問うて――自分のことばかりに夢中で、自分が何もないことに、今さら気づかされた。それに動揺し、おたつく心すら置いてきてしまい、あとは外からの刺激を待つだけになってしまっている。
「物欲しそうな顔をして。何を企んでる、征竜の息子よ」
「……下さい」
ぽつりと、可解斗は投げかけた。
「何が欲しい？　力か、責か、勝利か、敗北か」
「気が、欲しい。あなたと戦う、気が欲しい」
堪らず、接輿の顔に喜色が浮かぶ。
敵に、請う。そのはしたない行いを、しかし彼は跳ね付けず、むしろ待っていたと言う風に、諸手を広げて受け入れた。
接輿の脇をすり抜けて、二匹の龍が飛び出す。一本角の天禄。二本角の辟邪。二頭一対の龍は門を守る衛兵のように、接輿を挟んで

並び立つ。
真実、彼らはそういう龍なのだ。道の辻、村の境、神殿の入り口。諸々の境界に立ちはだかり、邪を避ける門番。
「ゴガアアアアア！」
雷を轟かすような音が、二つ重なって講堂を満たす。二頭の角からは雷気が漏れ出し、空気を爆裂させている。
耳を聾して余りあるはずの轟音に包まれて、しかし可解斗の心は平らか極まるものであった。
むしろ弾ける音の一つ一つが体に当たり、ぐらりと肉を揺らしてくるのが心地良い。このまま何時間でも、龍の吠声に身を委ねていたい。そんなふうに思うのも、束の間。慣れ親しんだ導竜法の呼吸を続ければ、体の奥底から湧き上がってくるものがある。

それは龍気。龍が放つ自然の気。その有り余る力の一端を受け取って、可解斗もまた身を滾らせる。
可解斗が一歩、前に踏み出した。申し合わせたように、二匹の龍もまた、彼の元へと駆け寄っていった。
獅子に似た低い唸りに対し、可解斗は両の掌を前に出す水の流れを取る。ゆるやかに腕を前に出し、二匹の龍を迎え入れる。天禄が足元から掬い上げるように、一本角を突き出す。辟邪はがばっと立ち上がり、鋭い爪を備えた前足を振り上げている。
可解斗は天禄から逃げるようにして、辟邪の懐へと右足から踏み込んだ。足運びを逆にしながら、左腕はのれんでもくぐるように気軽く伸ばされる。
その左手が振り下ろされた辟邪の腕を横へ逸らし、まんまと爪を避ける。
右足の踏み込みの時点で腰まで引き絞られた右手が、辟邪の脇腹の下を狙って打ち出される。
ずぶりと、肉の潰れる嫌な音が響く。可解斗の右貫手が、辟邪の肋骨のちょうど下の辺りに深々と突き刺さっていた。

「ぬあっ」
さらに可解斗が力を込めると、辟邪の体が横転し、そのまま床に叩きつけられた。
次に響いたのは、床をけたたましく叩き割る堅い音響であった。
水の流れ、竜洞入（りゅうのほらいり）。脇腹に命中させた貫手で肋骨を捕獲し、それを持ち上げて相手を投げ倒し、叩きつけると同時に貫手をかました手をそのままに、腹を押し潰すという投撃連環である。
床に倒されると同時に下段の掌底を食らい、衝撃を逃がしきれなかった辟邪の腹は、不自然なほどに凹んでいた。その中心にある右手は、貫手を当てたときよりも深く辟邪を圧迫している。
「がご、ごあああ！」
辟邪が痛みにのたうちまわり、血を吐き散らす。血痰の一つが可解斗の顔を濡らすが、今の彼にはそんなものなど気にならないらしく、馬乗りに跨って辟邪の動きを押さえ込む。

さすがは龍。内臓を潰したくらいでは、即死とはいかないらしい。白ほどではないとはいえ、優れた生命力である。
辟邪を押さえ込んだ可解斗が、血を吐き出している喉に手を掛ける。両の手を熊手のように曲々しく広げて挟み込み、その幅を徐々に狭めていく。
口を閉じ、血泡を滲ませて耐える辟邪。両手に力の限りを込めて、歯を軋ませるほどいきむ可解斗。
辟邪はともかく、可解斗もまた獣の如くに牙を剥いて襲い掛かっている。講堂に入ってきたときの吹けば飛ぶような脆弱さは、今や影も形も残っていない。龍と一緒くたになって噛み合い、食らい合う獣となってその命をもぎ取ろうとしている。
可解斗の手に返ってくる感触が、堅さを増していく。とうとう自分の手が、龍の首の骨に到達しようとしている。
歯の隙間から、涎と共に熱い息が漏れ出る。腹を空かした肉食獣のように、熱く伸びる息であった。

龍の必殺を確信した瞬間、可解斗はその場から飛び退いた。近くの柱を蹴りつけ、さらに大きく離れていく。
可解斗が手を掛けていた辟邪の前に、今は天禄が立ちはだかっている。あと少し退くのが遅まっていれば、あの一本角が可解斗の体を刺し貫いていたことだろう。
二頭一対の強みか。片方に手を掛けていても、もう片方の動きを封じねば必殺に至るのは難しい。

そうだった。かつて立ち合ったときにも、一頭に神経を費やして、その隙を接輿に突かれたのだ。
あのときの過ちは、もうしない。今の可解斗は、あのときとはまた違うのである。
（そうだ。もう俺は、違うんだ）
どうしてこんな簡単なことに気づかなかったのだろう。あれほど元に言われたのに、なぜ自分は素直に頷けなかったのだろう。
もう、違うのだ。誤り、間違い、負けてしまったときは、既に過去のものである。
接輿は本当に、くれたらしい。彼と戦うための気を、再びこの体に宿してくれた。それの意図するところは、可解斗にも知れない。
それでも今は、この力の奔流に従っていたい。思う存分に奮っていたい。十二分に発揮していたい。己の力を、技を、心を、その限りを尽くして目の前の龍にぶつけてしまいたい。
「オオオオオオオオッ！！」
天禄、辟邪にも負けぬ龍声が、可解斗の口から広がってゆく。それはおよそ、人の上げられる音からは懸け離れたものであった。
「グオロロロロロロ！」
呼応する二頭も喉を鳴らし、雷を放って再び向かい来る。角で薙ぎ払うように振るわれる雷撃が、講堂の床をあらかた砕いて可解斗に迫る。
二つの光の帯が交差し、一際大きく爆裂する。空気さえ痺れて静

まり返る気配の中、天禄と辟邪は煙が晴れ、獲物である可解斗の行く末を見守っている。
やがて希薄になった煙の向こうには、何もありはしない。二匹が辺りを窺う中、可解斗は天井近くに滞空していた。
雷撃による爆発に先立って上に跳んでいた可解斗は、その爆風を浴びてさらに高く舞い上がり、まんまと龍の頭上を取っていた。敵の攻撃すら力に変えて打ち返す正龍拳を応用し、爆発の勢いを力に変えて振り上げた右足に宿らせる。

天禄の頭頂目掛けて、狙い済ました踵を落とし、そのまま断頭台よろしく押し潰す。
ようやく反応した辟邪の顎を、さらに臥竜尾で跳ね上げ、翻った足で再び天禄の頭を踏み抜く。しかし可解斗は天禄に止めを刺さず、軽く足を入れ替えて後ろに下がる。それに一拍ほど遅れて、辟邪の角が天禄の目の前を横切る。
功を焦って身を滅ぼすのは、もう経験している。無理をして命を張ることはない。一打一撃できれいに決める必要はない。ゆっくりと落ち着いて、相手の戦力を少しずつ殺いでいけばいい。
起き上がろうとする天禄を庇うように出てきた辟邪に、まずは牽制の前蹴りを放つ。
顎を狙ってきたそれに覆いかぶさり、辟邪が身を起こして角を突き出す。後脚を突っ張って繰り出されたそれが、可解斗の右手に捕獲される。
ちょうど角と角の真ん中に手を突っ込み、力づくでその頭を押さえ込む。
龍の全身と、人の右手。本来ならば比べるのも憚られるような対決が、見事に拮抗する。しかし軍配はやはり龍にあるらしく、徐々に可解斗が後ろへと追いやられていく。
「――ウガア！」
吼え上げた辟邪の体が、一気に持ち上がって身を反り上げる。突

き上げてくる二本の角を、寸でのところで可解斗は顔を背けて遣り過ごす。
そこへ僅か、左の手刀が割り込んだ。
かくして辟邪はもんどりうって、自分で伸び上がった力そのまま吹き飛んでいった。
壁を拭くように落ちる辟邪の首が、今は自身の背中を眺めるように捻れている。

可解斗はと言えば、二股に分かれた角が右頬から耳にかけてを抉るのみに留まっている。体を動かすのに、何の支障にもなりはしない。
辟邪の飛び上がりに対応して放たれた左手刀はその長い顎の先端を的確に擦過し、頭を押さえてた右手の辺りを支点にして旋転させてしまった。
飛び上がる勢いがむしろカウンターの要領で作用し、辟邪は自分の力で自分の首を捻ったとも言えるだろう。それも一重に七流の術理があってのことだ。
竜洞入に加え、今の捻転は、辟邪を沈黙させて然るべきものである。可解斗は辟邪が動き出さないのを見て取って、その構えを天禄へと向けた。
起き上がった天禄が、吼え猛りながらこちらに向かってくる。
角や牙、爪、後脚を振るい、天禄が攻め立てる。如何な獣と言えば、双子に等しい片割れを傷つけられたことに憤慨しているのか、その激しさはこれまでに輪を掛けたものがある。
それらの一つ一つを、可解斗は少しずつ逸らし、止め、避けてやり過ごす。振り下ろされる前肢をその横から背刀で叩き、追撃の角を、先んじて首に手を置くことで動きの基点を潰してしまう。
首にかけた手を払いに来る腕に絡ませ、腰投げの要領で体を落とす。
起き上がり様、位置が低まっている天禄の頭を、下段の回し蹴り

で薙ぎ倒す。大木が傾ぐような鈍い音を立てて、天禄の体は為す術なく吹き飛び、林立する柱に打ち付けられた。背で壁を拭くように、べっとりと赤い筋を残して天禄が床に延べられた。それきり天禄は、身じろぎ一つ起こすことはなかった。

見れば天禄の頚椎の付け根が破れ、白い脊椎が覗いている。先程の下段回し蹴りによって、首をまるごとへし折られてしまったのだろう。龕灯に当てられて光るのは血ばかりではなく、極太の神経が透き通った白みを見せてくれる。

開放性骨折を起こした首から、天禄の生気と言う生気が駄々漏れていく。その様を見ながら、可解斗は悠然と残心の型を取った。

## 宿願龍：十

調息するために、可解斗が大きく息を吐き、背を正した。右頬の裂傷は、血の滴りが止まっている。

その一部始終を、接輿はただ眺めていた。気味の悪い薄ら笑いを浮かべ、さも目の前で展開されていたのは、自分を楽しませる余興に過ぎないとでも言うかのように――

それともこの場は、接輿一人が満足するために、彼自身が用意した舞台なのかもしれない。

「唐信たちが嘆くのも分かる。これは、豢竜氏への明確なアンチテーゼだ」

そしてようやく、彼は残りの段を踏みしめ、可解斗と同じ地の高さに身を置く。ハンチング帽とコートを脱ぎ払い、途中に散らかしていく。

「また、剣で相手をしてくれますか？」

抑揚なく、可解斗が問いかける。今さら余裕も油断も、恐れも慄きも見せる必要はない。体の中で渦巻く龍気の赴くままに、自分は動いてしまえばいい。

可解斗に歩み寄りながら、接輿はその肩を竦めてみせる。

「この場に龍がいるのだから、剣があろうとなかろうと、君とやり合うのは勘弁願いたい」

てっきり自分とやり合うのに万全の態勢を作りたいから、接輿は龍を呼び出したのだと思っていた可解斗は、訝しい思いでいっぱいだった。

「私の家に伝わっていた禁法によって、征竜と私が放逐されたのは、聞いているかな？」

こくりと、可解斗が頷く。

相手の意図が分からないとて、自分の手を止める理由にはならな

い。分からないからこそ、それを確かめるためには、やはり手を出すしかないのだ。問い質すのは、首に手を掛けてからでも出来る。
「では、その禁法の何たるかを、知っているか？」
今度は、首を横に振った。
あと数歩で、自分の間合いだ。前に飛び込みながらの龍環腿で、その頭を下から砕く。
「察しはついてるだろうが、その禁法というのは、やはり豢竜氏にとって――」
「きひゃっ」
鋭い呼気を引いて、可解斗の姿が霞む。
もはや接輿の繰言など、一分も可解斗の耳には入っていない。右足で踏み切り、反動で左のつま先を振り上げる。そこから右の蹴り上げ、さらに左の後ろ回し蹴りへと繋ぐ。
左のつま先が、接輿の顎の下から侵入する。
――そこで、可解斗の足は止まった。

加減しているわけではない。単純に、つま先が打ち抜けないのである。
「人の話は、最後まで聞いたらどうだ？　征竜の息子」
冷ややかな憫笑を浮かべながら、億劫そうに接輿が声を掛ける。
一旦着地した可解斗は、右の貫手を腹にかます。
右の手首に、激しい何かがぶつかり、大きく外へと弾かれる。接輿の左前腕――腕刀と呼ばれる部分に払われていた。
これ以上なく目を剥いて、可解斗は堪らず後ろへ下がった。
確かに可解斗は先だっての戦いで接輿に破れていたが、あのとき可解斗の拳足は、一切も接輿を捉えずに終っていた。故に負けたわけである。しかしそれは龍気を取り入れた可解斗の攻撃が、接輿にとっては一撃とて致命的であったという証左でもある。だからこそ精妙な技と見切りをもって避け、こちらの攻めを潰していたのに――今の接輿は、蹴りを顎で受け、腕刀で貫手を弾いてみせた。

甚だ納得のいかない事態である。突然、接輿に宿る力が増したとでも言うのだろうか。
「そうだ。人の話を聞くときくらい、手を止めろ」
満足そうに頷いて、接輿は続ける。
「これが豢竜氏が恐れる、反剋の禁法だ。分かるか？」
「反剋？　これが？」
「そうだ。君が行っているそれが、既に反剋。自然の理に真っ向から反する気の運用だ」
可解斗は弾かれた腕を押さえながら、きつく接輿を睨んでいる。

「不思議か？　反剋と言われたことが」
「いや、正直分かりません」
「そうか。君は日本の生まれだったな。それなら理解が及ばんのも仕方が無い。その身で味わうのが、分かりやすいか」
言って接輿が手招くが、可解斗は出ようとしない。既に体験しているので、今さらよく知ろうとは思わない。
人とは思えぬ力の運用。龍気を纏った可解斗に拮抗する力。それは而して、可解斗と同じ法によるものと推測される。
「要はあなたも、龍気を……」
「剽窃したのはお前の父親のほうさ。俺のところにあった禁法で、その七流とやらを作ったのだろうよ」
「祖父は、あなた方が時間を狂わせようとしたのだとか、言っていましたが」
「そんな大それたことが、人に出来るものかよ。せいぜいがこうして、本来取り入れられぬ龍の気を、体に留めるくらいなものだ」
接輿は大きく息を吸い、外気を己の体に取り入れた。
「これほどか、龍気というのは。確かにこれが罷り通れば、豢竜氏は飯の食い上げだな」
すうっと接輿の手が上がり、右手は腰の横、左手は肩口から真っ直ぐに突き出されている。

「さあ、来い。征竜の息子」
声に押され、ようやく可解斗も構えを取る。左の腕を畳んで手の甲を相手に見せつけ、右の拳は臍の辺りに添える。
七流、三の流れ、陽。拳足による攻防を旨とする基本の構えである。
右足で踏み込みながら振るわれる上段裏拳を、接輿の左腕が横に受ける。互いの腕が交差し、二人は小さく呼気を吐く。
「シッ――」
「ハァ――」
銅鑼の打ち鳴るような破裂音が、互いの胸から響く。
接輿の右拳と、可解斗の左拳は、それぞれの胸郭に深々と突き刺さっていた。そのまま余韻に浸るように、二人は拳を交わしたまま佇む。
「ぐ、うあ……」
一拍置いて崩れたのは、可解斗であった。せめて追撃を逃れるために、ずるずると足を引きずって接輿から離れていく。

接輿もまたそれを追おうとはせず、僅かに凹んだ自分の胸に手を当て、感慨深そうに目を細めている。
「技では、私に分があるようだな」
そして口にしたのは、やはり余裕の一言であった。
同じく拳を当てたのに、自分だけが倒れている。納得がいかないという思いが、可解斗の胸の奥でちりちりと妬ける。しかしその一方で、すとんと腑に落ちる考えもまた存在していた。共に龍気を取り入れた者同士。その趨勢は、一重に技の冴えで決まる。
ならば接輿は、間違いなく可解斗を上回る。そもそも接輿が龍気を用いない状態でさえ、可解斗は彼に叶わなかったのだから。
「ふうう――」
静かに息吹を行い、呼吸を整える。まだ可解斗は導竜法を解こうとはしなかった。先だってのときのようにはしたなく逃げ回るよう

な気持ちは、講堂の外に置いてきてしまっていた。
この体は龍気に従い、龍気の赴くままに動かすのだと、可解斗は堅く決めていた。自分は意思なく、覚悟なく、勝機なくここを訪れたのだ。ならば今さら自分でないものに命運を託したとて、誰に咎められるものでもない。誰に責められる謂れもない。誰に謝る道理もない。

右拳を顎の横に、左の拳を軽く曲げて前に出す。七流、四の流れ、火。陽の流れをさらに突き詰め、苛烈な打撃連環で相手を押し潰す流れである。
火を吹くように熱く長い息を引いて、可解斗が走る。愚直すぎる突進を、接輿の左上段突きが迎え撃つ。
食らってから無理やり顔を捩り、さらに可解斗が踏み込む。頬の肉が擦れて飛び散るのも気にせず、既に体は攻撃の態勢に入っていた。
左の拳を顔にばら撒き、右の肘が首を横に薙ぐ。いずれも弾かれて、接輿の右足が近間で翻る。
僅かに空いた隙間を縫うように、右の足甲が可解斗の顎を突き上げる。顔が大袈裟に仰け反るなか、右の足を避ける形で、可解斗が当てずっぽうに左の振り打ちを繰り出す。
「ごはっ」
蹴りの打ち終わりにぴたりと重なり、左拳が接輿の肝臓を横から押し遣る。
吹っ飛びそうだった顔をぐるりと戻し、そのまま額を打ち下ろす。腹を打たれて下がった接輿の前を、可解斗の頭が通過する。
外した。なら次は、振りかぶって右の手刀。
そこまで考えていた可解斗の思考が、下から昇った鋭い何かに断ち切られる。己の意に反して再び仰け反った顔の、鼻筋から額にかけての一線が綺麗に血の幕を上げている。
接輿の振り上げた肘が、可解斗の顔を切り裂いていた。

上を向いた視界の片隅で、接輿が既に右の拳を繰り出している。かろうじて右手を顔の前に添え、衝撃に備える。これを押さえて、左の肘で首を刈る。可解斗は左腕を振り上げ、攻撃の態勢に入った。

そこへ割り込む、接輿の拳。右手の防御など意に介さず、それごと可解斗の顔面をぶち抜いた。

左の肘だけが空しく振られ、可解斗の体は後方にあった柱のところまで押し遣られていた。

「どうだい？　君のものと、どちらがいいのかな？」

接輿に言わせれば、盗んだのはこちらである。本流である彼の導竜法が優れているのは自明の理なのだろう。

「特殊な呼吸によって龍の気を選択的に取り込み、整えられた姿勢によって身体の隅々に行き渡らせる。たったそれだけで、これほどの……」

旧来の豢竜氏には、及ばぬ境地だな。嘲りも顕に吐き捨て、接輿は拳を握る。

既に信達と唐信によって打ち据えられていた体では、龍の力を宿した接輿の相手など勤まるはずがなかった。こうしてまだ人の形を保っている時点で、奇跡に等しいのである。

しかしそれも、可解斗にとっては全く不思議なことではなかった。

何のことはない。接輿は徒に戦いを延ばし、決着を避けているのだ。征竜の息子である可解斗を弄ぶために。

既に二人の立ち合いは、接輿の一方的な私刑の様相を呈していた。昼には講堂で接輿に、夜には信達と唐信に、そして今また接輿に、可解斗は痛めつけられている。

龍の力が、人の細やかさで行使される。なるほど自分はこうやって龍を倒していたのかと、可解斗は意外なほど平静な心地で受け止めていた。それが自分に対して行われているというのに、まるで他人事のように感じてしまう。

それはもう、頭が痺れてしまっているからだろう。目の前に飛び

散る火花は、実のところ衝撃によって脳神経が混乱を起こしている
からに他ならない。

## 宿願龍：十一

可解斗は打たれるたび、むしろ自分が細まっていくような感覚に囚われた。余計な部分が接輿に取り除かれて、純粋に石竜可解斗の要素が浮き彫りになる。振るわれる拳の一つ一つ、蹴りの一つ一つが、可解斗を削り取っていく。

それでも、やるべきことは残っていた。振るうべき拳も、蹴り上げるべき足も、まだ残っていた。

「がああ！」

接輿に打たれながら、可解斗は打ち返す。右の拳で顔を殴られたまま左の拳を被せる。左の蹴りが腹を突き上げたなら、こちらも左足を蹴り上げる。

食らいながら行われる攻めは、その実、接輿には一切届かない。もはや限界まで痛めつけられた身体では、流麗な技の運用など望むべくもなかった。

まるでそれは、年少の連中に苛められていた時を連想させる。あのときに惨めたらしい感覚が、再び蘇ってくる。

（あのときは、どうしたっけ……）

あれはどうして無くなってしまったのだろう。虐めはどうして無くなってしまったのだろう。

それは元が助けてくれたからだ。その後も一緒にいてくれて、守ってくれた。だから年少の連中もいつか諦めて、こちらに構わなくなった。

今この場に、元はいない。深麗と同じく外で休んでることだろう。助けて欲しいとは思うが、彼にどうにかできるとも思えない。同じく深麗もだ。彼女が割り込んできたところで、もはや手遅れだ。

（このまま、死ぬのかなあ）

七流が当たらないとなれば、あと考えるべきことはそれだろう。

こんな苦痛に塗れたまま、死ぬのか。何の行も重ねられず、死ぬのか。
元より取るに足らない人生だった。やりたいこともなく、誰にも関心を持たれず、砂に埋もれる柱のような人生だ。自分さえ、省みたいとは思わない。
終るなら、早くしてほしい。
（そんなのは、嘘だ！）
やりたいことは、もう見つけた。関心を持ってくれる友人が出来た。どこにも埋もれはしない、自分の人生がここにはある。
自分で、作れたんだ。取り戻せたんだ。人生を、命を、目的を。
――そして、七流を。
（まだだ。まだ！）
まだ終っていない。まだ終らせない。まだ可解斗は、七流を見せていない。それを発揮していない。活かしてもいない。

心意気だけで自身を賦活し、もう一度立ち向かう態勢を整える。
呼吸と姿勢を正し、龍気を身体に行き渡らせる。
その様子をこれまた嬉しそうに、接輿は見守っていてくれた。
「覚悟を決めてくれたようだね。嬉しいよ……」
こちらも息を深くし、より大きく龍気を吸い上げる。いつの間にか周囲の壁が鳴動し、二人を中心にして空気が激しく流動する。
「最後に、聞かせてください」
轟々と渦巻く風の中でもはっきりと聞こえる声音で、可解斗は接輿に問いかける。
「何で、僕を殺そうとするのですか？」
ともすれば命乞いにも聞こえる台詞だが、そんなことにいちいち構っていられない。激しい状況の遷移で置き去りにしてしまったことだが、可解斗は肝心要である接輿のことをあまりにも知らないでいた。
せめて最後くらいは、彼の声を聞いてみたかった。

「征龍に、勝ちたかった」
意外なほど素直に、接輿は応えてくれた。彼自身、可解斗の問いかけに思うところがあるのだろう。
これ以上話すことはないらしく、接輿は口を噤んでいる。それはどこか、可解斗の促すような雰囲気であった。
「……また、僕は父の代わりか」
「また？」
「こちらの話です。あなたには関係のない」
可解斗も話すことはないとばかりに、口を閉じる。
「そうか。なら、気にしない」
元の様子を取り戻した接輿が、こちらに手招きしてくる。
「来い」
その招きに応じて、可解斗が軽く前に出る。まず近づかないことには始まらない。まだ遠い間合いなので、ゆったりとしながらも大きく踏みしめる。
その進みが、意に関わらず止まる。

これ以上足が進まない。どころか、身体が動かない。体幹から押さえつけられたような感覚。ちょうど臍の辺りに、ずっしりとした重みがあるらしい。
そこまで至ってようやく、可解斗は目の前の接輿が消えていることに気がついた。正確を期せば、今正に目の前に現れているのだが、その距離が、余りにも近すぎる。
見れば可解斗の腹に、接輿の拳がめり込んでいた。
（俺って、鈍いなあ）
相手がそういう手合いと分かっていながら、まんまと誘いに乗って、徒に前へ出た。しかも殴られたのを、前に進めなくなってから気がつく。
とんだ愚鈍だ。取るに足らない、つまらない。
（いいさ、これで……）

中段の崩拳が、可解斗の腹を深く貫いた。身体をこれ以上なく折り曲げて、後方へと突き飛ばされる。
堂の床を蹴散らしながら、可解斗は十歩余り下がったところで膝を屈し、天井を仰ぎながら倒れ込んだ。

感慨深げに、接輿はゆっくりと右の拳を腰まで引いた。今しがた味わった余韻で体中を満たすべく、十分に時間を取って残心する。
とうとう、征龍に勝つことが出来た。
征龍の仕込んだ息子に勝ったのだ。そう考えて差し支えない。
（そうだ。俺は、これが欲しかったんだ）

「ごほ、げふっ」
遠くで、咳き込む声がする。いちいち考えるまでもない。征龍の息子、可解斗のものだ。
どうやら、まだ息があるらしい。一瞬の隙を突いて放たれた崩拳は、確実に内腑を破砕せしめるほどの手応えを有していた。
放っておいても、いずれ死ぬ。接輿の宿願の成就は覆らない。
一歩だけ、踏み出す。
接輿は、可解斗の方へと歩み寄っていた。このまま放っておくのは、あまりに忍びない。宿願云々を抜きにすれば、彼は接輿の友人の、息子なのだ。ただ捨て置き、朽ちるのを待つほど、接輿の心は峭刻を極めていない。
傍らに佇んで見れば、いよいよ虫の息であることが窺える。血の泡が口元だけでなく、鼻からも溢れている。
見れば見るほど、征龍に似ている。顔立ち、眉の作り、口元、全てが生き写しだ。

ぶるりと、接輿の身体を走り抜けるものがあった。思えば終ぞ、こうして征龍を眺める状況にめぐり合うことはなかった。むしろ逆

の立場なら、数えられぬほど体験していた。
なるほど征龍は、苦しむ時こういう顔になるのか。もしかしたら、死ぬ時もこんな顔をしていたのか。
そしてまさに死ぬ時、どんな顔をするのだろうか。
見たい、見たい、見たい。再び衝動に駆られた接輿は、拳を握り締めていた。
可解斗を跨ぐように上を取った接輿は、屈み込んでひたと右の掌を彼の胸の上に置いた。どくどくと脈動する心臓の動きが、接輿にまで伝わっていく。
命を握り締める感触だ。友人の命が、今自分の手の中にある。征龍の命が、自分に囚われている。これから死ぬのだ。征龍はようやく、接輿の中で死ぬことが出来る。
「征龍、征龍！」
先程の崩拳など比べ物にならない欣快が、接輿の中で渦巻いている。思わず加減を誤ってしまいそうだ。だがいけない。ゆっくり、ゆっくりと味わわなければならない。味わわせなければならない。
何かが、接輿の身体を柔く押し上げる。単なる衝動ではない。物理的な無粋さを有したものである。
「やっと、触った……」
さらに聞こえてきたのは、真下にいる人間の声であった。
「驚いたな、まだ動けるとは」
軽口で応えてみても、可解斗は反応を示さない。どうやら聞こえてはいないらしい。ただ規則正しく、ぜい鳴の混じった呼吸を繰り返すばかりである。
「あなたでも、油断を、する。食らった、甲斐が、あった……」
焦点の合わない目のまま、うわ言のように呟いている。
「僕は、ただ、顕す、だけ……」
息遣いから、ぜい鳴が消える。深く、大きく、大気が可解斗の中へと入り込んでいるのが分かる。先ほどまで接輿もやっていたことなのだから――。

この身はただ、七流だけを顕す。これが、最後の一呼吸。ありったけの、龍気。
「七流、六の流れ、土――」
添えれられた両掌に力が篭もる。当てられている接輿に、それは余すところなく伝わる。
「食らえ、黄龍！」
腹部から血を噴き出すほど力み、可解斗が立ち上がる。掌に接輿を乗せたまま、胸郭を押し上げる。
身体ごと捻られる両掌が、下から立ち昇る。しっかりと踏みしめた足から吸い上げた龍気までも昇らせて、全てを流し込んでいく。
「おおおおお！！」
迸る龍声が、喉から漏れる。突き立てられた指が胸郭を抉り、心臓ごと削穿しながら背骨まで砕く。肉の爆ぜる音が堂内に響き渡り、勢いよく噴出した接輿の血肉が、床を赤々と汚す。
黄龍。本来は龍の懐に潜り、高い位置にある逆鱗を下から熊手で突き上げる動作である。
「お、あ、お……」
意味のない声が、接輿の口から漏れる。その声を口づけするほど近くで、可解斗が聞いていた。まるで抱きとめるほど近くに二人は寄っている。
可解斗は腕の中程まで接輿の身体に埋め、彼を串刺しにしたまま立ち竦んでいた。
「征、龍……」
かろうじて、接輿が言葉を紡ぐ。二人とも最早目の焦点を失い、顔を寄せながらも互いを見ていない。
やがて緊張を失い、可解斗がぐらりとへたり込む。水を吸った雪を踏むような、重い水音の中に二人が折り重なる。
接輿は胸から、可解斗は腹から、生気と言う生気を垂れ流す。も

はや龍気の運用などと言える身体ではない。
「それが、君の、七流か。征龍……」
既に用を成さないはずの声帯を揺らして、まだ接輿は訊ねる。
この期に及んで聞くことが、そんなことなのか。呆れるやら、憤るやら、可解斗は複雑な心地で返事する。
「ちが、うよ。接輿、さん」
遠のきつつある耳を頼りに、接輿の方を向く。目は光陰を取り入れてはくれるものの、像を結ぶだけの労力が可解斗に残っていない。舌も、喉も痺れている。本当に先程の一撃で、龍気を使い果たしてしまったらしい。丹田に渦巻いていた熱き滾りは、もう影も形も残っていない。
それどころか身体は芯から冷めていく。熱と言う熱が、自分を嫌って見放したように逃げ出していく。
「俺の、七流……だ」
最後のほうは擦れて、自分でさえ聞き取れない。それは誰にも届かない。応えた相手すら、聞いてはいなかった。
明らかな死の気配を、可解斗は感じていた。目に見えていたもの、感じていたもの全てが、自分から遠ざかってしまったようである。
たまらなく寂しかった。助けに来るといっていた深麗さえ来てくれない。
解けていく熱と一緒に、自分という存在が方々に散って跡形もなくなっていく。拡散していく五感が、端の方から消え失せていく。
それでも、怖くはない。後悔もない。何故なら、七流で勝つことが出来た。七流を表すことが出来た。それだけでもう、可解斗は満足していた。
失われつつある熱よりも、その充足が可解斗の中に優しく灯っている。
「――さん！　可解斗さん！」
危うくなった感覚が、揺さぶられて無理やり覚醒する。自分を締

め付ける力強い感触が、かろうじて可解斗を留まらせる。
（何だ、来てくれたのか。深麗さん）
声を掛けたくとも、口を開くのは酷く億劫だ。それだけの作業が、今の可解斗にとって重労働である。
「ごめんなさい、ごめんなさい！　私のせいで、こんなことに――」
全く以ってその通りだ。全て深麗の言っていることに間違いはない。今ここで可解斗が死にかけているのは、一重に深麗のおかげである。
そして接輿に勝てたもの、深麗のおかげだ。
厳しい責め立ても、優しい許しも、可解斗は深麗に向ける気はない。いちいちどれかを選べるほど、今は頭が働いてくれない。ただ胡乱な眼窩を、声のするほうへ向けるだけである。
ただ一つ、確認しておきたいことがあった。
「……接輿は、死んだ？」
問われてすぐは、深麗は何を言われたのか分からず、きょとんと可解斗の顔を眺めていた。やがてすぐに思い至ると、近くにあった接輿の頭を鷲掴みにして持ち上げた。
血のみどろに突っ伏していたそれは汚れ果て、誰の目にも明らかな死相を表していた。
「死んでいます。死んでいますよ、可解斗さん！」
泣き笑いながら呼びかけると、可解斗は僅かに頬を緩ませる。それは笑みというのは、余りに弱々しいものであった。
「やっぱり、僕の、勝ち、だ」
「はい、あなたの勝ちです。あなたは強いですよ、可解斗さん。だから――」
「もう、十分、だ」
それが聞ければ、本当に十分だ。本当に接輿に勝てたのなら、それは七流の実力を表し、可解斗の成長を表し、父の正しさを証明しているのだから。
（よかった。本当に、よかった）

そう胸の中で繰り返すうちに、可解斗の意識は暗闇に飲まれ、逃げていく熱と一緒に解けて散っていった。

意識が、ゆっくりと浮上する。それに合わせて、可解斗は瞼を開いていった。

龕灯の灯りは、相変わらず目に優しくて、声なき声を発する龍の像は、やはり厳しい。

「目が覚めましたか？」

そしてそこに佇んでいた人も、あの時――初めて可解斗が中国に来て目覚めた時と同じだった。

「深麗、さん？」

押し寄せる既視感のせいで、全てが夢のように感じてしまう。悪い夢でも見ていたかのように思えてくる。だが、それこそ夢だ。この身に、この心に、全て刻み込まれている。全て覚えている。

「ご加減は如何です？」

「最高ですよ、深麗さん」

首だけ巡らせて、可解斗は間髪いれずに応える。実際、今は最高の気分だった。

また戦える。まだ七流を揮える。この思い出を残したまま、自分は戦えるのだ。

これほど嬉しいことはない。

ゆっくりと身体を起こし、連子の隙間から外を覗く。あの時と同じ、宵の闇。ねっとりと張り付いて、全てを覆い隠すような夜半。

ここからまた、始められる気がする。

「また、龍と、戦いたいよ」

拳を握り締めて、可解斗はぽつりと言った。いつの間にか、深麗は傍らまで近づいていた。

「はい。また、戦いましょう」

きゅうっと優しく、深麗に手を握られる。その感触すら、往時のままだ。

可解斗はそれを、握り返した。重ねられた深麗の手をさらに包み込み、深く息を吸い込む。背を正し、気道を正し、取り入れた大気を丹田に下ろして回す。ゆったりと速度を上げながら練り、じわりと体の中に滲ませていく。

腹が、熱く滾る。僅かだけ大気に溶けていた龍気が、可解斗の身体を滾らせてくれる。この滾りあれば、可解斗は戦える。また龍と相対できるだろう。

龍と戦う。そのために、可解斗はいる。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5625q/


參竜伝

2011年3月22日21時40分発行